
Deus Ex Machina

マシーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deus Ex Machina

【Nコード】

N3144Z

【作者名】

マシーン

【あらすじ】

二千二十年、世界中ではまだ魔法という存在は認知されていなかった。

日本のとある兄妹は、とある事情から、魔法という存在を扱う、魔法使いを育成する為に作られた学校へと編入することとなった。

――真は、百合との何気ない日常を守る為、そして力への渴望を。

――百合は、真との当たり前のすこしえっちな日々を続ける為、

そして神を殺す為に。

一話 少年少女の憂鬱（前書き）

貴方とはこれで始めまして、になるのかな？

なら貴方は知っておかなければならない、ここがどんな場所であるか――

そう、ここは表舞台の反対側、まだ語られる必要のない不要な物語の断片

ここには沢山のシナリオが容易されている

ここにはたった一つの未来が映し出されている

ここには多くの結末が容易されている

だからここは表には出ないし、出さない

理由はまだ教えられないよ

まだ、ね

じゃ、ばいばい――

一話 少年少女の憂鬱

世界には未来というものがある。

人々、ひいては動物達はそれを瞳^めで見るとは出来ないし、それを頭で知ることは出来ない。

何故なら、未来なんてものは絶対的不確定なものであるからだ。未来、それは現在^{いま}の連続である。

例え話をしよう、仮に人物Aが”これから腕を振る”、という事柄を絶対的に発生する未来だと言い張るとする、これは確定的未来だといえるだろうか。

否、そこにはifの条件として、銃で撃たれる、突然の発作で倒れる等の突発的事柄でその未来はなくなってしまうのだ。故に、未来は絶対的などではなく、不確定で未知なものなのである。

もう一つ、”俺が未来を変えてやる”なんてことは出来ないのである。

何故なら、”その未来を変えろという未来”なのであるのだから。つまり、何が言いたいのかという事。

——未来なんてのは、あまり深く考えないのが一番だということだ。

人は、自分が時間を持って余しているということがあまり好きではない。

それは人間が何かしら”何かをしなければ”という意識を少なからず持つているからだ。

家事を残している者、仕事が残っている者、人にはそれぞれくつかやらなければいけないことがあるのだ、無論、生きるということもまた、それに当てはまるのかもしれない。

まぐるー一とは言いすぎだが、人は極端に暇だというのを嫌がる。そう、結局何が言いたいのかというところ――

「つまらない」

少女は憤慨しながら言う。

「我慢してくれ」

少年はその問いが何度目か等と思いながら適当に言う返す。

そう、この「つまらない」という台詞はもはや両の指では数え切れない程の数になっていた。

だから少女は言う、

「だから、何かしてっ」

「無茶を言うな」

――暇な時間が出来た用に何かしら、準備をしておけということだ。

突如として投げかけられた情け容赦のない理不尽な要求に、少年は辟易した様子で応える。

少女は、少年が何もしてはくれないと分かったのか、つまらなさそうにそっぽを向いた。

その様子を見て、もう暫くは大丈夫だな、と思いながら、少女が何故こんなにまでつまらなさうにしているのかを、考えてみる。

(……そういえば、かれこれ一時間と三十分は経っているな)

少年少女は今、マイクロバスに乗っている。

特に座り心地も良く悪くもない座席に、バスの中でたった二人、鎮座している。

淡々と進むバス、運転手が話しかけてくるはずもなく、ただ沈黙だけがその場を支配している。

だが、それだけではない、バスの前には電車に乗ったりもしていた。

それも、三時間も。

合計時間、四時間半に渡る長距離の移動はいかに少女がお話が好きだとしても、到底無理な話であった。

寧ろ、少女はあまり話しが得意な方ではなかった。

(まあ、かといって俺だってこれといって話すこともないしな、いや、あれがあったか)

「なあ、百合^{ゆり}」

少年が百合、と呼んだ先程までつまらない連呼をしていた少女がぱっと顔を明るくして振り向いた。

その顔はさながら、三日間餌を貰えなかった子犬が、ようやく自らの餌にありつけたかのようだ。

「何？」

かといって言動まで明るくなるわけではなかった、もしかしたら、本人は未だ不機嫌な顔を維持しているのだと思っているらしい。

そんなに期待された目で見られても困るのだが、と思いつながら質問する。

「お前は学校、行かなくていいの？」

「別にいいよ、今は調子いいけど明日は分からない身だし。それでも行こうとか思わないけどね」

いつも通りに、しかしどこか諦めに似た憂いの表情をした反応に「そうか」とだけ返して、またお互いに黙った。

――百合は、少年――^{かみしろまこと}神代真一の妹だ。

元々体の弱い彼女は、学校には行っていない、かといって通信もやってもいない。

幼少より原因不明の病により、体力は今時の十五歳少女のそれを下回るほどに少ない。

故に、百合はいつも家で家事だったり何だったりして暇つぶしをしているらしい。

そんなこんなな家庭の複雑な事情によって、此度は遠路遙々やって来た真は高校二年生にして転校することを決めた。

ただ、真にも若干の懸念がある、それは妹は友人と呼べる者が全くないことだった。

本人はそれでいいと言っているが、どうしても気になってしまうものだ。

(こつこつ機会に学校に行かせてみるのもいいかもしれないな)

「なあ百合……」

いい機会だから、と言おうとして、止めた。

いや、言えなかった。

隣で先ほどまで喧しい程に話しかけてきた少女は、少年がいざ話そうとすると、気持ちよさそうにきっちりした姿勢で寝てしまっていた。

それを見て、真はため息をついた。

そして思った、もしかしたら自分がそういう話をしようとしているのに気づいてさっさと寝たのではないかという予想。

真は、自らの妹をそんな風に見ていた。

時間にして、約三十分後、バスは大した重心移動をさせずに目的地へ停止する。

百合を起こし、コンパクトに纏めた手荷物を持ってバスを降りる。バスは一方通行で、帰りは誰も乗せずに去ってゆく。

当然、二人以外に乗っている者はいないので、少し離れるとそのままターンをして元来た道を戻っていった。

バスを降りて一番最初に見えたのが、これから自らが通うことになるであろう学校。

人魔学園、それが今向かっている目的の名前だ。

国立魔法大学付属人魔高等学校《こくりつまほうだいがくふぞくじんまこうとうがっこう》。

二二五年現在において、日本が独自に有するその存在を秘匿された、所謂”魔法”というやつを”正しく”使う為に、将来のある有望な若者に広めようという意思の下で創られた学校の一つである。魔法を教える学校は、高校で五つ、大学を含めて八つしか日本国にはない。（外国にもあるが、正確な数は把握出来ていない、これは外国が日本にも思っていることである）

真も、そして百合も”魔法”という存在を確かに知っている。それがどんなもので、どういう使われ方をしているのかということも。

そしてそれこそがこの学校に招かれた最大の理由であった。

魔法の存在を知らない者を招くことは出来ない、つまるところ言い換えれば魔法を知っていれば入れるということでもある。

尤も、一般教養を受けている者に限るが。

今日はその、人魔学校の入学式の前日であった。

バスも去り、目の前に聳え立つ豪華な校門を見据え、真は決心する。

とりあえずまあ頑張るか、と。

「――さて、行くか……っておい」

「んー？ んふふふ、なあにー……兄さん？」

「いや、何で俺の腕にしがみ付いているんだ？」

自らが緩い決心ながらも心なく格好つけていたというのに、同じくしてここに来ている――学校に通うとは言っていないが――百合は発展途上ならぬ先進国並のアレを押し付けて頬を腕に擦りつけて

いた。

間違いない、誰かに見られていたらあらぬ誤解を招くこととなる。そんな真の不安をよそに、百合は言い放つ。

「疲れた故癒し求む」

「古風に言われてもなあ……」

何でそれで癒されるのか、などとは言わない、それを言って以前怒られた記憶があるからだ。

前途多難、そんな言葉が頭に過ぎった。

シェイクスピア曰く、「世の中には幸福も不幸もない。ただ、考え方でどうにでもなるのだ。」

唐突にそんな言葉が頭に浮かんだ。

特に理由はない、どこかで読んだ雑多な本の中に、そんな言葉があつたのを覚えている。

意味は言葉のまま受け取ればいいのか、それとも言葉の中に潜む深い意味を探ってみた方がいいのかという疑問すら記憶に新しい。

そして自分で得た解釈はこうだ。

とりあえず前向きに生きる。

そう、それはこんな状況にも当てはまるはずだ。

「んふふー」

語尾に音符がついているんじゃないかというぐらい浮ついた声音で口ずさむ百合。

否、何か音符のようなものが見えたような気がしなくもない。

真が突然思考停止——基^{もと}現実逃避——をした理由は目の前にある。

「それで、神代真君」

今、目の前にいるのは無精髭を生やした飄々とした五十台ぐらい

のおじさん。

しかしその風貌はどこか、さながら戦争より帰還した戦士の匂いを漂わせている。

「はい、何ででしょうか校長先生」

「この……なんとというか、こつ甘つたるい空気はどうにかならぬかねえ、真面目な話をする予定なのだが……」

よつな気がする。

「兄さん分ほじゅーちゅー……」

「無理です」

「分かったこのまま進めよう」

この校長には理解力があることは分かった。

学校の敷地は思いのほか広く、目的の場所までどうやって行くかと考えていると、一人の男性が校長の使いだと言い、それについてきて、今に至る。

バスを降りてからというものの、百合が腕から離れる気配は一向になく、仕方なく室内までダラダラと入ってきては「疲れた」と言つてくつつく腕を変えたのだ。

無論、相手方は既に待機している状態、失礼なのは分かっているが、どうしようもなかった。

百合は、基本誰がいてもいないものとして生活しているからだ。

校長の前だからといって、人目を憚る行為をしても、本人はただ「こついう」状況楽しんでるだけだ。

それが分かったのだらう、校長も少々驚きながらも気にしないとつた風にしていた。

流石、こついつた学校の校長を務めているだけはある、といったところだらうか。

そして、隣で何か考え事をしている百合を尻目に、会話が再開された。

「それで、真君。」

事前に渡してあったパンフレットの方には目を通してくれたかい？」

「ええ、魔法を持たざる者と、魔法を持つ者。」

互いが互いを認め合い、高め合い、切磋琢磨し練磨する学校を目指す、でしたよね。」

現実がどうあれ、俺はこの意見には同意します」

「あいたた、直球ストレートもらっちゃったねえ。」

でもそれが現実、実際問題”魔法”を知らない人の人数の方が大多数、それに加えてこれまでの歴史をまるごとひっくり返すような真似、君が言うように我々が抱く理想に到達するには数々の試練があるだろうね」

自分もそう思っているということを示す。

「そこで、君にはこの隔離された学校でもって、外の人間からこの人魔学校を見たら、どういう風に見えるのかどうか、意見を聞きたいんだ」

「それが俺がここに呼ばれた理由だということとは分かってます」

そう、人魔学校における魔法の有無による精神的格差、その調査という名目で真はこの学校に転入することとなった。

言わばテストケースとして、学費免除と諸々の理由から、転入を決意したのだ。

「君が理解が早そうで助かるよ、ところで大方の話は事前に贈った書類に書かれていたもの意外にないし、他に何か聞きたいこととかはあるかい？」

編入手続きは向こうがしてくれと言っている、勉強についても無問題、友達作りは今考えることではない。

真自身、特にこれといった要望もなく、後は定期的な報告を面談という形で報告することになっている。

そこで、ふと思いついたことを聞いてみることにした。

「では、お言葉に甘えまして。」

今回はテストケースとして招かれましたが、それは俺だけということ

とで宜しいのでしょうか？」

「ああ、それか……んー難しい質問だねえ。

そもそもな話、君にも伝えてある通り、君は一応他校からの転校ということになっているんだ、学校には魔法を使える者が人間として優位に立っていると考えている人間も少なからずいるからね。

そのことを踏まえて考えた結果、君にはあくまで家庭の事情により転校してきた、というでしか学校には伝えられていないのだよ」

なんとなく、校長の言いたいことが真には分かった。

「つまりは俺にも、もし転校生がいたとしても、それが外部の人間だと悟られないように教えることは出来ないってことですかね」

「そうそう、その解釈で間違いないよ！」

いや、やはりしつかりと話の通じる相手と話すのは気が楽でいい！」

普段どんな人と話しているのか、とても気になるものだが、それは置いておく。

話もひと段落し、軽く息を吐く。

そして最後は、校長の一言で締めくくられた。

「お疲れ様でした、明日から宜しく頼むよ」

「ええ、とりあえず頑張ってみますよ」

「――兄さん、今日はお魚料理にしようと思うんだけど、何がいいかな？」

(さっきからそんなことを考えていたのか……)

もはやシリアスのシの字も出ないような、そんな空気になってしまったので、その場で解散となった。

百合にはとりあえず適当に返答して、二人は今日から住むこととなっている家へと帰っていった。

一話 少年少女の憂鬱（後書き）

この作品は、作者の創作意欲によって投稿スピードが違います。

時間経過

場面転換

大型転換

とじてやっています。

一話 友達は淑女と馬鹿と天才とお転婆娘（前書き）

この作品はフェックションです。

二話 友達は淑女と馬鹿と天才とお転婆娘

ランニング、それは真が幼少時より親から、毎日続けよと言われた数少ない事柄の一つである。

体に溜まった窒素を吐き出し、汗を流し、体力もつくし、何より走り終わった後の爽快感がいい。

そんな訳で真の朝の日課はまず長距離のランニングから始まる。

「はっ、はっ……ふー」

「お疲れ様、兄さん。」

朝食の準備は出来るからシャワー浴びて来てね」

「分かった、すぐに行くよ」

十キロという距離を毎日ハイスピードで駆け抜け、体もよく温まって帰ると、妹が食事の用意や学校に持っていく弁当を作っていることが常だった。（今日は午前で終了な為、弁当は作ってはいない）

高校一年生の時から続いている日課ではあるが、真は百合に対して感謝の念を忘れたことがない。

朝早くから起きて、弁当や朝食を作ることが体の弱い百合にとって辛いことだというのは分かっているが、それでも本人がやると言っただけで聞かないので、任せてもらっている形だ。

それに、百合は料理が好きだった。

「とりあえずさっさと行くか」

素早くシャワーで汗を流し、居間に行くとき百合がテーブルの上に一人分の朝食を用意していた。

トーストに、卵焼き、それとコーヒーだ。

ジャムは苺やら何やら数種類用意されていたが、今日はブルーベリー気分だった。

そこでふと、真は思う。

この家に、自分達は昨日来たばかりのはずだった。

勿論、転校に当たってこの家に引越すこととなっていたのだから、前もって視察に来ていた。

だからといって、百合の対応はいささか早すぎるのではないかと。

家は一軒家で、内部構造的にはリビングと台所、トイレに真と百合の個室があるだけだ。

それでも十分ではあったが、荷解きから今の朝食の準備。

本来なら、今日の朝の朝食はもっと簡単なもので終わりだと思っていた真は、百合の柔軟過ぎる対応に少しばかり疑問をもっていた。

――だが、それだけだ。

家に慣れるのは悪いことではないし、自分にとっても喜ばしいことだ、ならば何も気にする必要はない。

「ん……今日も上手いな、百合のコーヒーは」

「ありがとう、兄さん」

それに何よりも、こういう言葉で良い気分が始まる朝の方が、真は好きだった。

「それじゃ行って来るけど、あんまり無茶はするなよ？」

場所は玄関、現在時刻は七時半ちょっと、学校へ行くのには良い時間だ。

「無理」

「無理じゃない、帰って来たら遊びにでも付き合っただけだから？」

ただでさえ体力の少ない百合は、家にいるのがつまらないとふらふらと外へ飛び出してしまうことがある。

勿論、買い物へ行くことが多数なのだが、それでも無理はしないように言っておかなければ、何かで無理をしてしまっただろうと思っただけは、妥協策でもって説得する。（いつもはしないが、百合が無

理だと言った時には出来るだけそうしている)

「……分かった、必要な買い物だけしたらすぐに帰る」

「よし、ならすぐに帰るようにするからな。」

何かして欲しいことがあったら、帰ってから聞くからな？」

「っ……それならツイスターゲーム」

何やら空耳が聞こえてきたので、扉は勝手に(真が高速で)閉められた。

家から学校まではそう遠くない、そもそも遠くに住むのではあれば、わざわざ引越す必要などありはしない。

真は小走りで学校へ向かう。

毎日ハイスピード疾走で走っている真からすれば、汗一つかくこともなく目的地までたどり着くことが出来る。

それでも、真はスピードを無理やり少し上げた。

(帰ったらツイスターゲームとか……)

これまたある程度の知識として、知っている。

ツイスターゲームは、男女が仲良くしてくんずほぐれつな状態に陥るための娯楽ゲームだということ。

真が走る速度を上げたのは、今だけでもその事実から目を背けたかったからに他ならない。

ただ、もう一ひとり人物が必要ではないか、とは思っていたが。

「ふっー」

ゆっくりと息を吐いて息を整え、間近に見える校門を目指す。

ここの生徒は殆どが徒歩で、それもそのはずこの学校には寮があり、大多数の生徒はそれを利用してゐるからだ。

真が寮に入らなかったのは、男女別に分かれている寮では百合と

共に暮らすことが出来ないからに他ならない。

故に、登校する生徒の歩く向きは自然と真とは違い、少なからずの生徒が寮をしない生徒が珍しいのか時々チラ見してくる時がある。真はそんな視線を気にせず、まずは職員室へと向かうことにした。

「失礼します」という掛け声と共に室内へ入ると、一人の女性がこちらへやってきた。

「おう、お前が神代真で間違いないな？」

朝から元気潑刺といった風の胸元を異様に見せびらかしている彼女は、ここにいるということは先生の類なのだろう。

日本人の象徴ともいえるべき黒髪を一本に縛り、雑な動きの中にどこか美しい大和撫子のような風格を持っているかのようにも見える。はつきり言うのと、先生だとは到底思えなかった。

「はい、間違いありません。」

先生は俺の担任教師で間違いありませんか？」

「うむ、間違いない！」

ノリなのか、素なのか分からないせいで、リアクションがとりにくい。

そもそもこの先生の年齢はいくつなのだろうか、もし三じゅー

「変なことを考えていないかい、真君？」

「……いえ、先生はお若いなと」

鋭い、という感情は一切表に出すことなく、褒め言葉でもって逃れる。

正攻法だ。

現に先生は「ほう……」と言ってこちらを品定めをするように上から下まで見てくる、その視線からは不快感の感じはしないので失敗はしていないのだろう。

「お前、良い体つきしてるじゃないか……ま、それはおいといてと。今日からお前の暮らすの担当をすることになった北条由美子だ」

若干セクハラ発言のようなものを聞いたような気もするが、今は

あまり気にしても意味はない。

「して、先生は何か嗜んでおられるのですか？」

先程の、大和撫子のようだという件を好奇心程度に聞いてみる。

その質問に、由美子は眉を吊り上げた。

「何故、そんな質問を？」

「いえ、他意はありませんよ。」

ただ、その雑な動きの中に時々、摺り足だとかおかしなものが入っていたもので」

「成る程、確かに私はそういった習い事も、幼少時にしていたな。

だが如何せんこの正確だ、そのような動きは似合わぬだろう？」

「そんなことはありませんよ、とても良くお似合いです」

「ふふん？」

さてはお前……ジゴロかつ」

「違いますよ」

「じゃあ何だ、天才ナンパ師か」

「はあ……先に行きますよ」

これ以上は埒が明かない。

「あ、おいつ、待たないか！

先生より先に行くんじゃない、「こらあ！」

「よし、入れ！」

真が由美子と共に教室へ来たまでの道のりは割愛され、2・Aと書かれたまだ白いままの札が垂れ下がっている教室の中から声が発せられた。

教室の扉を開け、そのまま左側に見える生徒達には目を向けずに教室の中央とも言つべき教卓の傍にいる由美子に並んで立つ。

隣から「名前とか趣味とか言え」と言われたので、とりあえず頭に浮かんでいた言葉を出してみる。

「神代真です、特技はこれといったものはありませんが体は丈夫です、よろしく」

「お願いします、と付け加えなかったのは、自分には合わない台詞だと思っただけだからだ。」

真の知っている範囲であれば、こういう時、「あ、お前はあの時の！」みたいなことが起きるのだとか、そんな夢見がちなことを思いつつそんなことは起きない方がいい思っていた。

そんなことをされれば当然、クラス及び学校で自然体でいられなくなることも間違いなし。

だが、そんな思いは儂くも散ることとなった。

「ああ！」

突如、自らが座っていた椅子をガタツと揺らして立ち上がり、
「いかにも」な少女が指を刺してこちらを見ている。

真は、その少女を知らなかった。

「……誰だ？」

見知らぬ誰かに指を指されて大声を上げられる程、真は恨まれるような生き方をした覚えは……ない、はずだ。

口から出た言葉も、自然と発せられたもので、悪意はない。

「誰だとは何だ誰だとは！」

あの時の恨み、よもや忘れたとは言わせぬぞ！」

そう言った、金髪のツインテールをした身長が小学生並みの少女は更に憤慨して地団太を踏みながらキーキー猿のように喚いている。
いや、言い方が悪かった、ただ五月蠅いだけだった。

真からしてみれば、謂れ無き恨みをただ理不尽にぶつけられているだけなのだが。

「ふむ……」

もしかしたら、自分は何かをしてしまったのではないか、と過去を振り返ってみる。

「……ふむ」

が、そんな過去は見当たらない。

「『……ふむ』じゃないわよ！」

まさかつ、まさかとは思うけどこの私の顔を忘れたと言っんじゃないでしょうね！」

「知らん、それより先程からうるさいぞ、天保山金髪ツインテールよ、」

「……何よつ、人を外見で呼ぶんじゃないわよ！」

あと天保山って何なのよ！」

「何って、日本一最も低い山だ、知らないのか？」

「キッシー！」

どうやら背丈のことだと理解したみたいだ。

「……ふむ」

どうやら、本当に何かあったのかもしれないな、と少しばかり思ってみたが、やはり心当たりのないことなど自らの罪に数えられることはなく、かといって全く気にしないという訳にもいかなかった。そこまでのやり取りを振り返ってみて、思う。

何故、クラスメイト達は黙っているのかと。

確か入ってきた時に、横目で見た感じでは窓側の場所に、空席は一つしかなかった、と。

そして、そこは自分の席であろうということは容易に想像出来た。そこで気づいた、これからクラスメイトになるであろう者達全員がこちらを見ていることに。

(何故……何も言わないんだ?)

疑問は尽きないが、とりあえずはこの場の進行を進めるのが先だろつ。

「先生、席に着いても宜しいですか？」

由美子はそれで我に返ったらしく、「ああ、お前の席はあそこだと先ほど見た空席を指差した。

そこにそのまま歩いて行くのだが、刺々しい視線がいくつかと、冷やかな視線多数、その他少数といった風な視線を向けられたが、我関せずと席に座る。

不意に隣から視線を感じたので、挨拶をする。

「神代真だ、よろしく」

「あっ、えっ、は、はい！」

「お前凄えな！」

由美子による、真の為の各自の自己紹介は滞りなく終了し、先程まで五月蠅かった天保山も黙っていた。

その後、休み時間に入った直後に突然机を叩く音と共に渡来してきた原住民はもはや言語が理解不可能な程に荒ぶった声でもってやってくる。

「ちよつとあんたうるさいわよ！」

男の言葉が耳障りだったのが、遠くから茶髪の似合う少女が男へ向かって叫ぶ。

「うっせえな！」

やるのかこの野郎！」

「やんないわよ！」

あと野郎って言うな、私は女だ！」

「はっ、お前みたいなるさい野郎は、野郎で十分だ！」

はつきり言つて二人の方が五月蠅かった。

あと、案外仲はいいのかもしれないと思う。

その後も名も知らぬ五月蠅い二人はそのまま睨み合っている。

もはや、何が何で何なのかと、真はため息をつきたくなっていた頃だった。

「えっと、少し宜しいでしょうか？」

「ん、何だ？」

言葉は打って変わっておとなしめな感じのする高めの声が聞こえた。

顔を上げると、そこには黒髪の良く似合う、“ミス和風”の称号

を頂いていそうな少女が手を前で組んで立っているのが見える。

「え、えつと……」

話かける内容を考えていなかったのか、少女はもじもじと組んでいた手を動かしていた。

「ここは、自分から話しかけるのがいいだろう。」

「神代真だ……真でいい、よろしくな」

手を差し出して、柔らかめに話しかける。

「あっ、竜胆りんどうしあり菜です、宜しくお願いします」

「おずおずと握手をしたところ、対応に間違いはなかったようだ。」

「じゃあ竜胆さん、何か用があったんじゃないか？」

クラスメイトになるのだし、とりあえず親交だけでもという気持ちもあるのだろうが、先程の男の態度から見て、先の天保山とのやり取りが一因しているのではないかと、推測する。

理由としては、仲間が馬鹿にされたからか、ふてぶてしい態度が気に入らなかったのか、それとももつと別の理由があったりするの
か。

だが、挙げた二つの例はこの竜胆という少女からは感じられない。
やはり、親交だけだったのか？

「あの、えとつ……」

「「ああー……！！！」」

やっとこさ、竜胆が声を発しようとしていたところを、先程の元気が有り余っているのだろう男女二人組みが大声と共に戻ってきた。その語気に、自分が何か悪いことをしたかのように感じたのか、竜胆はあたふたしている。

「竜胆ツ！ お前、俺が一番に話しかけたかっただのに横取りしやがったな！」

横暴だった、竜胆が若干ながら可愛そうである。

「ちよつとあんた、何菜を困らせてるのよ！」

「え、えつ！ 俺のせいだよ、なあ、今は竜胆さんの話を聞いているんだ、少し黙ってはくれないか？」……え？」

さつきから、人が人の話を聞こうとしているのに邪魔してくれるものだから、一喝、とはいかないものの、やや不機嫌気味に言ってみる。

因みに、全くもって機嫌が悪いというわけではない。

ただこういう時は、そういう風に言ってみると思いの他黙ってくれるものだ――良い印象は持たれないが――。

案の定静かになった男と、それと同時に黙った少女を尻目に視線を竜胆に移す。

それだけで、真が何を言いたいのか分かったのか、意を決したように交差していた手をぎゅっと握り締めて（そこまでの決意なのか分からないが）顔を上げた。

「それほどの用事という訳ではないのですが……えと、何か困ることがありましたら何でも言ってお下さいね、ということだけだったのですが……」

どうでしょうか、と言わんばかりに俯いたまま視線だけを上げる所謂上目遣いというやつを竜胆はしていた。

それがわざとなのか天然なのかということ、真は置いておき、竜胆に返す言葉を模索する。

「……分かった、まだこの学校のこととは分からないことが多いからな、何かあったら頼むよ」

どうして、という質問はしない。

もしも善意でもって接してくれているのならば、それは相手に対して失礼だからだ。

「は、はいっ！」

何ともない、普通の返答に竜胆は元気良く応えた。

「――先程はすまなかったな、ああでもしないとお前達は止まりそうになかったから仕方がなかったんだ」

「おう、気に済んな！」

俺達も大声ではしゃいじまって悪かったな、俺は靈童子れいどうじ竜也りゅうぢ、ヨロ

シクな！」

先程の天保山から竜胆までの一幕を終えて、見知らぬ相手に黙れと言ったことを謝ると、男一竜也は快く許してくれた。

元々は、竜也が悪かったということは置いておくとして、だ。

真と竜也はお互いの骨が軋み合いそうな程の握手をした。

「それで、竜也はさっき俺に何を言おうとしていたんだ？」

竜也には、こういう付き合い方をした方が良い、と思ったのは半ばノリである。

真が思い出していたのは、「お前凄げえな！」という発言、一体何に対してなのか甚だ疑問が残っていたところだ。

「ああ、それかっ……ん、何だっけか？」

当の本人は、先程の少女とのやり取りのせいで記憶の彼方に追いやってしまったのか、頭を抱えた。

「おいおい、もうついさっきのことまで忘れたのか？」

「あ、こいつ鳥頭だから気にしないだね」

話に入ってきたのはどこの国の生まれか、真つ赤な髪をを真つ直ぐに伸ばし、髪に特徴のある髪飾りをついているのが印象な、先程から竜也とやり合っていた少女だった。

肩にかかった髪を振り払う仕草はどこか、美しいものがあつた。

「まあ、竜也は少ししたら思い出さるうとして、一つ質問があるんだが？」

「？ どうぞ？」

「名前は？」

「コンスタンティア＝ルビーよ、ティアって呼んでくれると助かるわ、真君」

名前は洋風だが、日本語は上手なようだ。

「分かったよ、ティア。

ところでもう一つ、質問してもいいか？」

「いいわよ、寧ろどんどんしてもらっても構わないわ」

「なら遠慮なく……お前達、本当は仲が良いのか？」

「「良くない！」」

「息、ぴったりじゃないか」

眉を顰めていがみ合う二人に良くもまあ息が合うな、と関心する。

「「真似するな！」」

「ま、まあまあ二人共、落ち着いて……ね？」

すぐに仲裁に入ったのは二人の勢いに乗っけていけず、静かにしていた竜胆だった。

竜也と少女は竜胆に咎められて、バツが悪そうに「ふんっ」と言っ
つてそっぽを向いてしまった。

このままでは、平行線だと判断し、話を進めることにする。

――としようにとしたところで、丁度良く学校のチャイムが鳴り、
休み時間が終了した。

由美子による授業は淡々と進み、これからのことを色々と話して
いた。

取り分け耳に残っていたのは、魔法の選択授業のことについてだ
った。

ここ、人魔学校はかつて日本軍の訓練学校であったという。

二千年以降より年々世界中での戦争は減るにつれて、日本軍が使
わなくなったという跡地を、現地での戦争の跡地を見る為という名
目で魔法学校を建てたのだという。

少し話しは変わるが、毎年、日本国内の魔法学校同士で他校との
交流という名目で他流試合が行われる。

一般的に、魔法は戦闘用、医療用、日常用に大別され、この他流
試合では、主に戦闘用魔法をどれだけ扱えるか、という”世間一般
の高校”では絶対に有り得ないイベントが開かれている。

そして話を戻す、今由美子が語ったのは、その他流試合に出る為

の生徒を選出するものであった。

そう、この学校では元々が軍隊が使用していたということで、訓練の出来るように近くに深い森林があり、浜辺がある。

その為、この人魔学校には”戦闘用”の魔法を学ぼうとする軍人志望の生徒が集うのである。

――そして由美子の話に戻る。

この学校では主に、ブラックとホワイトに区分されることとなる（制服も色事に分けられる）。

戦闘用の魔法を学びたいのであればブラック、そうでないのならホワイトということとなる。

そして大体この学校では、七対三の割合でブラックが多い。

現在、この教室内でも黒い制服と白い制服で、七対三の割合が生じている。

真もまた、白い制服を着たクラス中、十二人の内の一人だった。

付け加えると、竜也とティアはブラック、意外なことに竜胆もまたブラックである。

「さつて、それじゃ授業を終了します！

各自どこか変な場所に寄ったりしないように！

さて、私はさつさと帰ってお酒お酒ー」

スキップスキップランランランと軽やかな足取りで帰って行く由美子をこのクラスの生徒達はさも当然かのようにしているのは何故なのだろうか。

やはり、魔法という存在があると世間一般からかけ離れた感性を持ってしまうようになるのだろうか。

否、それはまだ早計だ。

あの先生が以前からあのような態度を取っていて、それに耐性が出来てしまったという可能性はなきにしもあらずだ。

だとしたら、先の感性の変化というのは、先生だけなのかもしれない。

(これは報告するに値しないな……)
魔法の存在、そしてその存在価値、使い方、まだまだ考察する部
分は尽きないようだ。

これは、とある一軒家での、とある出来事である。

その場所では、少年がブリッジを、少女がそれに覆いかぶさるよ
うにして完全なる密着状態にあった。

「兄さん……兄さん」

兄を呼ぶ少女から発せられる、生暖かい吐息が首にあたる。

少女の吐く息は、不規則な「はっ、はっ……」という典型的な疲
労のように見える。

頬は紅く照らされ、その瞳からは涙でも浮かべているかのように、
淫靡な輝きを放っている。

その姿は真っ白なシャツをその体には分不相応に大きいサイズを
着ていて、袖口が余っているのが分かる。

「あつ、兄さん……だめえ」

そのシャツからは、二つの北半球がこれ見よがしにとその存在を
アピールしている。

そう、少女は所謂ノーブラというやつだった。

否、ノーブラノーパンであった。

「だめだよ、んっ、そんな……とこお！」

絡み合った手や足がもそもそと動く、どうやら何かを探っている
ようだ。

途中、少女の胸が当たったりしていたが、気にしないようにして
いた。

というよりそれどころではなかった。

兄と呼ばれている少年は、今、目を瞑った状態にある。

両手両足は現在、思うがままに動く状況ではないが故に、少年は

眼で見る現実ではなく過去を思い返すように現実逃避をしていた。

（あれは……本気だったのか）

今朝、少年は少女に出来るだけ何でもすると行った（言ってしまったの間違い）のだが、少年はそれを後悔していた。

（もつと簡単なのにおけばよかった）

「今度は兄さんの番……だよ？」

ため息をついて、現在目の前にあるものを、なるべく視界に収まらないようにして眼を開ける。

すると目の前にすすつと手動で回す、色が四色あるルーレットがやってきた。

それを、片手で何とか回すと、赤色が出た。

ルーレットに備え付けられた、ボタンを押す。

すると色に分けられたルーレットは、今度は右手、右足、左手、左足と書かれたものが四つに分けられたものになった。

「に、兄さん、はやくう〜」

ふう、と耳に息を吹きかけられて、背筋が強張るのを感じるとともに、ルーレット勢い良く回した。

針が示した先は、左足だった。

つまり、左足を赤のゾーンに置かなければならないのだ。

「……ぬ」

だが、その赤ゾーンは、現在左足が置かれている辺りには赤色の場所はなく、諦めて他の場所探すと、丁度反対側辺りにあったのだ。そして、そこにしか左足は置けなさそうだった、他の場所を目指せば恐らく足を攣るだろう。

だが、それがいけなかった。

左足の傍には黄色に置かれた右足があり、反対側へ行くためには体を回転させなければならぬのだ。

だが、下手に手を抜いてわざと崩れ落ちたりして負けると、少女は再戦を申し込んでくるだろう。

断れば今後、やることがヒートアップしてしまう、それだけは避

けなくては。

「あんっ」

体を反転させるためには、少女の体と自らの体が摩擦してしまうのは当然で、少女はどこかとは言わないが、どこかが擦れて先程よりも更に艶かしい声を発していた。

その声を聞いた瞬間、体からまるで生気を奪われたかのように、崩れ落ちた。

「ひゃうっ!?!」

少女は、少年の上に重なっていた。

これが何でもすると言った真の、転校初日の最大の出来事であった。

二話 友達は淑女と馬鹿と天才とお転婆娘（後書き）

こんばんわ、作者です。

今回は、この作品の趣旨を先に述べさせて頂きます。

この作品では、登場人物達一人ひとりの「魔法」という力、存在への意識、価値観、使い方の用途など、彼らが魔法に対してどんな気持ちを抱いているか、これからどうしたいか、ということを実現していきたいと思っています。

三話 爆発と、正体（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する人物、固有名詞は大体関係ありません。

三話 爆発と、正体

程良い疲労感はい快適な睡眠をもたらす。

それは、昨日の起こったことについても決して例外はないはずである。

「……ふう」

「お疲れのようですね、昨日、何かあったのですか？」

「竜胆さんか、まあ……少し遊び過ぎてしまつてね」

現在は時刻にして八時半、朝のHRも終わつたところで、一息ついたところを隣にいた竜胆が心配そうに聞いた。

あれが遊びと呼べるものは世間に対し、アンケートをとつてみたいものだが、それをすると自分のプライベートを公に晒しているようなものなのでしない。

そしてそれとは別に、何か突き刺さるような視線を受けていて、それが原因の一端を担っている可能性もなくてはならない。

しかし竜胆は、そんな真の苦労を露知らず、これまた以外といった風な体で口元を抑えている。

「遊び……ですか、神代君でも遊びつてするんですね」

一体どういふ風に見られていたのか、自分は至つて健全な、まだまだ健全な高校二年男子である、と真は思う。

——確かに、最新のゲームなどにはあまり興味はないが。

「なあ竜胆さん、君は一体どのような目を俺を見ているのかな？」

自分の失言に気づいたのか、「あ、あはは」と言いながら目を宙に泳がせている。

そして真は思う、今日の竜胆は昨日に比べて格段に話しやすいと。

昨日はおどおどあたふたとした、落ち着きのない引つ込み思案な（真も大概失礼である）性格だと思つていたのだが、今日はやけに

落ち着いたようにも見える。

もしかしたら、一日置いて心の整理が出来たのかもれない。

竜胆はそのまま「あ、次の授業の準備しなきゃ」と言っただけで自分の席へ戻った。

(そういえば、次の授業は魔法の制御訓練、だったか)

チャイムが鳴り、全員が席に着くと、やって来たのは白衣を纏った眼鏡をかけた優男のような教師だった。

「えーと、今日は初めての授業になりますし、まずは私の自己紹介からー」

それから淡々と年齢、趣味、得意な魔法などを列挙すると、程なくして本題に移ることになった。

「君達も知ってる通り、魔法は便利だ。

山で遭難したならば火を起こす、火事が起きたならば水で消せる、等々のように用途は多種多様だ。

それは私達魔法使いが文明と共に進化を続けてきたからに他ならない。

でも、君達は常に肝に銘じておかなければならない、魔法の便利さと、その危険性を！」

先生の言うことは至極全うなものだった。

確かに、魔法というのは道具要らずのどこにでも運べる便利なものだが、しかしそれは裏を返せばどこにでも持っていけるということでもある。

飛行機に乗るためのセンサーに魔法使いは検知出来るだろうか、答えは否、例え一人ひとりが非力な者であれど、機内で火を起こせるのならば、それは明らかに危険なのだろう。

魔法使いとは、そういった世間での危うさと、利便性を天秤にかけた、危うい存在だ。

「人は言います、空を飛びたいと。

しかしそれが出来てしまうのが我々、魔法使いです。

夢を失くした人はやがて目標を失い、墮落する人生を歩むこととなるでしょう……。

私は、君達にそうあって欲しくありません、魔法使いは危険ではないとっ、人々の味方だとっ……そう言える人に育って欲しいのです」先生の言うことは一理ある、だがもつと明確な目標を指し示さない限り、その言葉は意味のないものになってしまう。

或いは、それを自覚して欲しくて自ら魔法教師という立場になったのか。

「さて、前口上はこれぐらいにしておいて……それでは誰か、簡単な魔法をここで見せては頂けませんかね」

「うむ、ここは私の出番であるな！」

そう言っつて勇ましく立ち上がったのは、久しく見ることのなかった天保山だった。

彼女は真の方を見て、にやりと笑った。

真はそれを知らん振りしていたが。

「おや、ミラっエクセリーゼさん……貴方がやってくれるのですか？」

その瞬間、教室が凍りついたのを俺は見逃さなかった。見ると竜胆の顔は以上に強張っつていて、どこか虚ろなようにも見える。

まるでミサイルを前にして死を予感した兵士のような顔。

そのまま視線を動かし、竜也とティアにも向けてみると、二人は何か椅子から若干体を浮かしつっつある。

そう、さながら絶望的戦況を見て、敗北を予感して逃走する敗残兵のような。

(これは……まずいのか?)

何分この学校に来て間もない真なのだ、こっついう空気には敏感だが、何が起こるかなど分かりようもない。

「おい、竜胆……何が起こつている？」

その問いかけに、竜胆の眼はこっつ言つていた。

もう、終わりだと。

その言葉でもって何を理解しろというのか、疑問は尽きない真だが、竜胆は話にならないようだし、このまま事態を眺めるしかないのだろう。

「では、お願いします」

「うむ、心得た……はあああああああああああ！」

「え、ちよ、ミラさん!？」

真は、瞬時に理解した。

今回の話は、簡単な魔法を完璧にコントロールするということを他の生徒に見せる為のものであると。

そして天保山ことミラが容易した魔法を行使するための、魔方陣というやつは至極簡単な作りなもので、すこし力を入れれば発火するというものであった。

そして今起こっているのは、その簡単な魔方陣に対し、あまりにも膨大な量の魔力が注ぎ込まれているということだ。

魔法名は「ファイヤー」だろうが、これでは「ボルケーノ」になりそうだ。

ただでさえこんな狭い教室で、そんな魔法を使われれば大惨事になりかねない。

見ると、生徒達は防御魔法を展開させていた（一部は逃走を試みていた）。

この事態が、事前に止められなかったのは真が考えうる限り二つある。

一つは先生が新任教師で、ミラが放つところなるということを知らなかったこと。

二つ目は、生徒達がミラを止めないで見るところを見ると、それがミラ＝エクセリーゼという少女の性格なのだろうということだ。

「フアー」

(このままでは俺が死にかねないな……)

とりあえず、事態を收拾するためには何かしらの手を打たなければならぬ。

「イー」

(とりあえず、”あれ”をなんとかするか……)

ため息をつきたくなる気持ちを抑えて、それよりも先に体を動かすことにする。

「ヤー」

ミラの体掴むと、

「ぶっ飛べええー！」

ミラの体を、本人が自覚しない内に掴み、そのまま槍投げのように空中高く放り投げた。

時速十何キロぐらい出ただろうか、と思っていると、遠くから小さい「ア」が聞こえると同時に、大爆発を引き起こしている。

まるでそれは真夏の夜空の空に咲く、一輪の花のようだ。

それを見て、真はしみじみと「綺麗な花火だな」と思いながら、静かに十字を切りながら駆け出した。

今日は魔法演習の実地訓練だった。

実地訓練と言っても、学校の校庭がそうなっている為、彼女達がそう呼んでいるだけで、実際にはただの魔法練習なのかもしれない。この学校の設備は整っているし、食堂や購買、果ては魔法訓練の為に特別に容易された特殊訓練施設などがある。

彼女はその学校の生徒会長で、生徒達の生活と魔法との二つの面で模範たるべき存在。

今日も軽く与えられた課題をこなすだけだと思っていた。

「アーーーーー！……！」

(アー?)

どこからか、雄たけびのような、甲高い悲鳴のような声が聞こえてきた。

それはどこか、近くではない、校舎に反射してやまびこのようにあーあーと繰り返されている。

それが遙か上空であると理解した時、声を発していただろう声の主は突然爆発。

(誰か敵役の人でもやられたのかしら?)

彼女はあまりテレビを見ない人間であるが、”そういう”特撮のヒーローモノでは、敵役がやられた場合、大抵爆発するのだと。

そんなことを感慨深く思っていると、爆発した煙の中から人影が落ちていくのが見えた。

(いけないっ……あのままでは地面に激突する!)

体は重力に全く逆らわず、身動きもしないところを見ると気絶している可能性もあった。

そう理解するよりも先に体が動いていたのは生徒会長としての義務からか、それとも彼女の性格故か。

体に身体能力付加を与えると、彼女は通常の倍以上のスピードでもって落下する人影に追いつくが、あと少しの差でもって間に合わないかもしれないなどと弱音が心に浮かぶ。

落下する人の真下に水のクッションを作ろうと魔方陣を描こうとした直後、凄まじいスピードでもって彼女を誰かが追い抜いたのを見た。

体格からして男のはずだが、彼は滑り込むようにして女の子をキヤッチすると、そのまま体を捻りながら、落下してきた際の慣性を中和していく。

(凄い、体捌き……)

恐らく、ただあの体をそのままキヤッチしていたら、落下の際の衝撃で女の子の体のどこかが折れていたかもしれない。

彼女の考えていた水のクッションでも、衝撃は緩和出来ただろう。

だがそれとこれとはまた話が別なのである。
——何せ、彼は魔法を使っていた様子がないのだから。

「ねえ、君——」
生徒会長、みながれあやか水流綾香は好奇心からか、それともまた別の感情を抑えきれずにいた。

後悔先に立たず、ミラを投げてしまったと気づいた時には既に十字架をきりながら走り出していた。

自分でも、よくもまああそこまで豪快に投げ飛ばしたものだと思えてやりたいところだが、それどころではない。

投げて、その後に大爆発を起こすのは分かっていたが、その後どうするかということについては頭に浮かんでいなかったのだ。

窓から飛び出して（二階から）、すぐさま落下地点まで向かうと、途中に人影が見えた。

が、そんなことを気にしている場合ではない、人間は頭の方が重い構造上、落下は頭からしていくのは当然として、それをどう受け止めるかも思考中。

（勢いを殺しながら木にジャンプしていくか、それともこちらから迎えに行くか……いや、今からでは向かえに行くのは到底不可能だ……なら、あとは俺の体に任せるしかないか）

猛スピードで駆ける人影を、そのまま追い越して落下と同時に今の速さを落とさずにキャッチ、すぐさま膝をクッションにして衝撃を緩和、後は独楽と同じ要領で重心を分散する。

一人ならもつと楽なのだが、とは思うものの、無事成功。

「ふー……まっ、結果オーライってことで」

腕の中ミラにいる天保山はやはりその小さな体躯に見合うような体の軽さだ。

もつと肉食え肉、と心の中で呟いて顔を見やると目を瞑ったまま微動だにしない。

爆発の衝撃で気を失ったか、それとも体力を根こそぎもっていかれたか。

それも今考えても意味のないこと、と判断して踵を返そうとしたところ、近くに誰かがやって来ていた。

「ねえ、君……」

恐らくは先程の人影だろう、よく見ると背丈もミラと違って長身で細身なスレンダーな体型をしていた、何よりふとももがいい感じな太さだ。

真としては、厄介ごとになる前にさっさとおさらばしたいところなのだが、そうは問屋が許さないよう。

何故なら、彼女が真の行き先の進路方向にしっかりと構えているのだから。

ため息をつきたくなる気持ちを抑えて彼女に向き合う。

「お話があるのは分かりますが、今はこの人を保健室へ連れて行きたいので……」

人を抱えたまま話をするなど、傍目から見たらおかしな話だろう。それ理解したのか、彼女は首を振った。

「分かりしました、では私も着いていきます」

何故、とは問わない。

恐らく同行拒否したところで、その内また尋ねられるような気がしたからだ。

そこで、協力者？を得たことに気づいた。

そう、保健室の場所をまだ知らないのだ。

真と綾香は現在、保健室のある一角に椅子を配置して座っていた。「ふーん、やっぱりそんなことがあったのね」

綾香はさもありなるといった風情で、首を四度縦に振った。

まるでミラが”あれ”をやらかすことを予知していたか、ミラが魔法を使うとああなることを知っていたかの二択だろう。

会った時にミラの顔を見て納得した様子を見たところ、後者のようだが。

「ええ、それで生徒会長はミラが魔法を使うとああなるということを知っていたのですか？」

やっぱり、と言ったのだから、これで二回目などではないのだろうということも容易に想像が出来る。

「そうなのよ、この子だったらね、魔法を使おうとするといつ力みすぎちゃって火なら爆発、水なら津波、雷なら停電を起こすような…」
「そうね、簡単に言ってしまうえば問題児、といったところかしら」
頬を手を当てて、悩ましげにしている綾香を見るとやはり年上の女という印象をひしひしと受ける。

面と向かって分かったが、綾香は美人だ、それもとても。

一体全体どういう家から、綺麗なスカイブルーの色の髪が生えてくるのか問うてみたいところだ。

これも、魔法の影響なのだろうか、と今度じっくり考えてみることにする。

「問題児といいいますと、それなりに色々とやらかしたりしてるんですよね？」

だったら何かしらの対応策、もしくは本人にしっかりとした教育を受けられるとか……」

言わなくても分かることだが、それらは恐らくどれも試みたのだろう。

そして、失敗した。

「色々手は尽くしたのだけれどね……これはやっぱり個人の問題だから、なかなか上手くいかないのよ」

「いいんですか、そんな色々なことを本人の知らないところで俺に話してしまって」

「うーん、難しいところだけど、いいんじゃないかしら？」

だってあの子のクラスメイトでしょ？　ってことはあの子の友達、
だったら話しても全く問題ないわ」

難しいところだが、クラスのあの反応を見たところ、ミラのこと
は周知の事実なのだろう。

そうすると、何故あの新任教師（新任であるかどうかは分からな
い）はミラに魔法を使わせたのだろうか、他の教師に釘を刺されて
いた可能性は大だ。

わざと、ということやはり考えすぎだろう、今はただの教師の
過失としてみるべきだ。

「それで、ちょーっと会長、聞きたいことがあるんだけどなあー」

綾香は突然、甘ったるい声音でずっと体を乗り出す。

スレンダーな体型に見合った豊かな胸が、腕に挟まれて制服の上
からでもわかるぐらいにのめり出しているということには、気づい
ていないようだ。

「……何のことですか？」

真があくまでもしらを切るのとははや唯の悪あがきでもあった。

ミラを救出？する途中、真は綾香の描いていた魔法陣をちらりと
だけ見ていたのだが、その時見たものは簡単に口にして話せるレベ
ルのものではなかった。

繊細にして鮮やかな円の配置、術式の順番、力の循環経路のどれ
を見ても遜色のない、ただの学生レベルにしては些か高すぎるレベ
ルのものである。

ミラが魔法を失敗するのは、簡単な術式での少ない力の循環経路
に対し、過度の力を注いだことで起こる『シヨート』と呼ばれる、
言わば魔法の暴発というもの。

簡単なものであれば力は然程いらない、逆を言えば複雑なもので
はあればそれ相応の力を要するということでもある。

綾香はその、難しい方を短時間でやってのけた可能性があったのだ。

そして、しらを切るのが悪あがきであるという理由は一つ、綾香が自らの走る速度を魔法で加速させたのに対し、俺は魔法の補助なしでそれを追い越したということだ。

「分かっていると思うけれど、貴方魔法を使っていなかったわよね？」

逃げ出したかった、猛烈に。

「そう見えただけでしよう、実際には使っていましたよ、あいつを助け出す時に」

嘘だ、実際には最初から最後まで、今に至るまで魔法は一切使っていない。

それに綾香は、具体的にいつの話であるかは語っていない、こちらがそういつた具体的な場合を出すことで、そちらに意識をもつていかせようとした。

「いいえ、そんなことはないはずよ！

私は仮にもこの人魔学校の生徒会長、魔法を扱う生徒達の模範たるべき私が、そんなことを見逃すはずが無いわ」

「事実がどうあれ、俺には俺の事実が……そして、貴方には貴方の事実があります。」

会長がそう見えたのであれば、それは会長にとって事実です、ですがそれが俺の事実であるとは限りません」

「それは詭弁だわ、貴方は魔法を使っていなかった」

「視野をもっと広くして見てください、自分だけが世界ではありません」

「……貴方、意地悪ね」

「すみません、こちらにも色々と事情があるものでして」

仮に俺が魔法を使っていないということを事実として認めたとして、それに変な噂を付け加えて吹聴するような真似を、生徒の模範たるべき生徒会長がするとは思えないが、まだ時期尚早なのだ。

綾香はそんなこちらの事情を悟ったのか、やけになったように諦めた表情になっている。

「……ごめんね、誰にだって知られたくない事情はある、っていうのは分かっているつもりなんだけどね」

自嘲気味に言う綾香は本当にただ、興味本位なだけだったのだらう。

それ維持用追求して来なかったのは彼女の確固たる自我故か。

「分かりますよ、そういう気持ち」

好奇心は猫を殺す、と言うがそれでも止められないのが好奇心だからと言って、下手に手を出していいというものでもないが。

「ふふっ、これじゃどっちが年上か分からないわね。」

それじゃこのお話はおしまいっ、また今度会いましょう、神代君？」

「ええ、その時はもっと有意義な時間にするように心懸けます、水流先輩」

「ありがと、またねっ！」

そう言ってウインクを華麗に決めてみせると颯爽と保健室から出て行った。

そして思う、ウインクとはああいう風に華麗に決めると可愛く見えるものなんだと。

それからしばらくして、保険医が帰ってきたのを見計らって真も保健室から退室した。

綾香と別れて、ミラを置いて保険室から教室へ戻ると、どうやら時間は思いの他経っていたらしく、二時間目まで終了している様子。

(転入早々サボリか……)

自分が悪いとは思っていないものの、授業をサボタージユすることへの罪悪感は拭えない。

三時間目は座学だったのですんなりと席に着けた、すると隣にいた竜胆が話しかけてくる。

「ミラさん、どうでしたか？」

爆発寸前までは諦めたかのように見えた顔も、今ではすっかり元通りになっている。

とりあえず大丈夫だ、ということだけ伝えて今は授業に集中する為、前に顔を向けた。

「真、さあ答えてもらおうぜ？」

「真君、私もちょーっと色々と聞きたいことがあるんだけど？」

「神代君、あの、その……私も少し聞きたいことが……」

四時間も恙無く終了し、百合が作った弁当を取り出そうとしてところで、勢い良く例によって三人が詰め寄って来た。

竜胆は他の五月蠅い（竜胆に比べて）二人がいるからか、物怖じしてしまっている様だ。

三人の息のあった言葉の連なりっぷりに、俺は聖徳太子ではないぞと思うものの、どうやらしつかりと答えるまで離してはくれなさそうだ。

綾香とは違って日々一緒に暮らすクラスメイトである為、ここで断つても次があるか、関係が悪くなるかだ。

尤も、この三人は後者の人間には見えないのだが。

「分かった……ここじゃ何だから、もっとゆっくり話の出来る場所に案内でもしてくれないか？」

他の生徒も気になるのか、ちらりとこちらに向ける視線が痛い。

三人は特に反対もせず頷き、ティアがそういった静かに話しの出来る場所へと案内するので付いて行く。

案内された場所はまだ誰もいない中庭の隅の方で、確かにこれから他方角からそうそう見えることはないだろう。

全員が腰を下ろすと、とりあえず話の方向性を確かめるべく、ま

ずは一番何か言いたそうな竜也に聞いてみることにする。

「それで、各々何か聞きたいことはあるだろうけど、代表して竜也に聞こうか」

恐らく聞きたいことは、三人共に一つに集約されているだろうと踏んだ。

「んじゃ、気を悪くしたら謝るけど、聞くぜ……真って魔法使えないのか？」

「何故そう思うんだ？」

あの時はただ防御魔法が間に合わなかったって可能性のあるだろ」

「だってよ、あの時……真は魔法の防御壁を張ろうとしなかった、というより魔法を使うつもりがなかったように見えたんだ、俺にはな」

その言葉を聞いて、竜胆とティアを見やる。

竜也の言っていることには全てではないが、概ね同意しているように見える。

「竜也の意見は分かった……それなら勿体ぶらずに聞いたらどうだ、俺が魔法を使わないこと……もしくは魔法が使えないことがお前達の聞きたいことなのか？」

「違うけどよ、ただ俺達の間での噂はこうなっているんだ。

真……お前が”反魔法組織”の一員なんじゃないかってな……」

「……その情報はどこからだ？」

答えは沈黙、極秘ルートってところか。

「では質問を変えよう、もし俺がその、”反魔法組織”の一員だったとしたら、お前達はどうしたいんだ？」

意地悪な質問だが、今のままでは竜也達の思惑が全くといって掴めない。

「別にどうしようとも思わねえよ、元よりそんな情報なんぞ信じてないからな」

「ありがとう、なら竜也……お前のその清潔さに俺は誠意で持って答えよう。」

答えはノー、だ……俺は”反魔法組織”の一員なんかじゃあない、魔法だって使えるさ」

”反魔法組織”とは、そのままの意味で魔法の存在を知っている奴等が、その存在を恨んでいる、もしくは自分が魔法を使えない恨みをぶつけようとしている傍迷惑な頭のイカれている集団だ。

その”反魔法組織”の連中とは一度会ったことはあるが、どうにも話の通じない奴等だった記憶がある。

「なら、何である時真は魔法を使わなかったんだ？」

そう、俺が”反魔法組織”でないというのなら、結局は最初の段階に戻る訳だ。

その答えは、たった一言の言葉で済ませられる。

「それは、俺の主義だからだ」

三人が三人共に別々の反応をする、絶句しているように見える竜也、口元を吊り上げているティア、目を点にして口をぱっくり広げている竜胆。

ただ、こればかりは誰にも否定しようのない事実であり、それが実であれ虚であれ、俺が言ったことが全てに他ならない。

「魔法を使う、使わない……それは俺の自由であり、お前達の自由だ。」

それは誰にも侵害されることのない権利だ、お前達にはお前たちの俺には俺の、魔法の不文律ルルがあるはずだ、違うか？」

少し説教臭かったが、あまり気にしても意味のないことだろう。

真の言葉に最初に返したのは、先程嫌な笑みを浮かべていたティアだった。

「そう、ね……確かにそう。」

真君、貴方はやっぱり良い人ね……試すような形でごめんなさいね。本当は”反魔法組織”の話なんてでっち上げなのよ、ごめんなさい」
今度はこちらが絶句する番なのだが、生憎とそういうことは顔を出さない主義だ。

つまりそうになると、また見方が変わってくる。

「それはお前達、三人の総意か？
それとも――」

「わ、私達だけです！ 他の人は関係ありません！」

「……ふむ」

するとまた色々と変わってくるものがある、例えば何故あの場でミラを止めなかったか、だ。

真の言ったことを最初から理解しているのならば、何故この問答をしたかという疑問も残る。

――が、答えは簡単だった。

「成る程、俺は試された訳か」

先程のティアの発言の「やっぱり」からして、やはり人柄、人格等をテストしたものと見えるだろう。

「発案者は私よ、二人は無理やり「俺は別に怒ってないぞ」……あらそう？」

やけにあっさりとした返答に、ティアは面食らった感じで目を開いている。

「その代わり、一つ質問してもいいか？」

「どうぞどうぞ」

「あの時、教室での爆発の時にお前達が防御壁を使用した目的は？」

「さつきも言っただけど、あれは貴方を試す為にやったものよ。」

けど勘違いしないでね、ミラを含めてクラスメイト達はそのことを全く知らなかったの。

もし爆発しても私と栞が全力で皆を守り、竜也は外に被害が出ないようにスタンバイしていたって訳よ」

そこまで自身があるのなら、それはそれで良かったのだろう。

ただし、教室自体が無事であったかどうかは甚だ疑問だが。

「成る程、理解したよ。」

やはり俺はお前達を怒る理由はないな……それと、結果はどうだったんだ？」

ティア、竜也、竜胆と見渡してみるが、三人共別にこれと言って

何か不満やらなんやらがある訳ではないようだ。

「百点満点の合格通知よ、ただ――」

「まさか、あの子を投げ飛ばすは思ってもなかったけど」
それについてはまた今度、本人に謝ろう。

三話 爆発と、正体（後書き）

やっと三話までいけました、長かったような、短かったような。ここまで書いてやっと自分の中で世界が固まったような気がします、溢れ出る出るこの知識、漏らさずに保管しておきたい気分です。

四話 マジック・ロジック 前編

一般に、魔法という存在が確認されたのは正確には決められていない。

そもそも、魔法という概念が、一般社会に出回っていないということは、それ即ちその存在が公には公表されていなかったに他ならない。

ならば何故、日本軍の跡地を魔法学校として建てているのかと言えば、それは一般市民には分かり得ぬことである。

ただ言えることがあるとすれば、日本の首脳達はそれを知っていて、それを世界に広めまいとしているのだろう。

もし魔法があるということが世間に漏れれば、魔法使い達はたちまちその存在を晒され、かつての魔女裁判に発展するかもしれない。そして、それに反抗する者がいるとしたら、それは大変な事態となる。

国内での内紛は望むべくもなく、魔法を知る者はその存在を世界の隅へ追いやられたということ。

それが、数少ない魔法に関しての知識だ。

――いや、もうひとつある。

それは、魔法使いを使った魔法使いによる兵団。

銃弾を跳ね除け、ミサイルを迎撃し、味方の治療をする、これ以上ない程理想的な戦争条件だ。

無論、核ミサイルやなんやらと、魔法使いでも対応出来ないものがあるだろう、それは魔法使いに限らず公平に死を与えるものだ。

故に、その条件は条件にならず、ただ白兵戦で一騎当千の魔法使いがいるならば、戦争における死者が減ることに繋がる。

つまり、人魔学校は将来に向けての魔法使いによる兵団を作る為

の施設なのだ。

(と、思っただけだな……)

魔法使いが世間に出ると、ほぼ必ず混乱が起こる。

それは人そのものの価値観を揺らがす、一種の世界恐慌とも呼べるものになるだろう。

そういったことを起こさない為に、この人魔学校を檻として作った可能性も否めない。

真は前者だと思っっているが、希望であれば後者の方が幾分ステキに見える。

(しかし実際のところ、実地訓練やら戦闘用魔法の鍛錬やら、どうも”そっち”に教育が傾いている気がするんだよなあ)

やはり魔法における将来性は、未開拓の新境地と呼ぶ他ないだろう。

(魔法使いは人間か、否か……)

人魔学校二年、神代真は今日も悩んでいた。

人は、窮屈なものが嫌いだ。

或いは箱の中、あるいは生活環境といった狭いものの中に押し込められているという意識がある場合、人はそれに苦手意識を覚えてしまう。

それはストレスになり、次第に精神を疲労させていく。

動物は何故、狭い場所を好むのか――全てではないが――それは体に何かか密着していると安心感があるからだ。

だが、それが人間に当てはまるとは決して言えない。

逆を言えば、当てはまらないとも言えないのかもしれない。

「兄さん！」

百合は真を指差し、「ずびっ！」という効果音がよく似合いそ

うな顔で突如として言った。

「つまらない！」

「我慢してくれ」

「嫌、無理、我慢、限界！」

日本語としては成り立っている（気がする）が、どうもこれは本当に我慢の限界のようだと真は思う。

真が人魔学校へ編入してた一週間、百合は校長へ挨拶へ言った時以外はしっかりとおとなしくしていた。

家の中をくまなく調べたのか、それとも外出して探検に出たのか。色々やったであろうことはあるが、ついにと言うべきか、我慢の限界は突破してしまっただらしい。

そこで真はふと、時計を見る。

時刻は朝の七時、ランニングも終わったので後は着替えて学校に行くばかりだ。

（少しぐらいは話が出るか）

「百合、今日は暇なんだろう？」

それじゃ今日、学校へ来てみないか？」

ここへ来るあたり、そういった百合が退屈しない為のプランはあれこれと考へてはみたものの、あまりいいものは浮かばなかった。

それもそのはずか、真とて女の子の日常というものには、身近にいたとしても疎いもの。

そしてその最大の原因となっているのが、百合が女の子の生活として真つ先に思いつくであろう、ファッションや買い物、恋愛ものの雑誌に興味がなかったということ。

ブラジャーやパンツを穿くことすら抵抗感があり（外出の際は必ず身に付けさせている）、服も白か黒の単色というあまり柄に拘りも無い様子であったりで、真には百合に対して、一体何をしてやれば退屈を凌げるのか、素もぐりの手探り状態なのだ。

友達の一人でも出来れば、違うのではないかと考えたが、本人は頑なに断っている。

「嫌、兄さんは私に学校へ行つて欲しいみたいだけれどっ、あまり私はそういう場所が好きじゃないの!」

「じゃあこのまま退屈な日々でもいいのか?」

「うっ……それは、嫌だけど」

嫌だけど、退屈なのは嫌という百合に対して何かしてやれることはないのかというのはしばしば考えることである。

一回だけ、「学校を休んで一緒にいるか?」と言ったことがある。その答えは、「それは駄目! 迷惑かけてまで一緒にいるなら退屈でもいい!」と言う。

実際のところはさして迷惑でも何でもないのだが、本当に滅多に怒らない百合が怒るのだ、それは嫌なことの一つなのだろうと思っている。

「それじゃあ、ごうしよう。」

今日のお昼を届けてはくれないか、それだけでも退屈にはならないだろう?」

「……嫌」

「これは兄としてのお願いだ、一度だけでもいい……来てくれないか?」

「……」

「頼むよ、百合の出来立ての弁当、食べたいんだ」

「……そんな言い方ずるいよ、兄さん。」

分かった、気が向いたら行くから、来なかつたら自分で買って?」

「ありがとうな百合、俺は買わないよ、百合が美味しい弁当を持って来てくれるからな」

そういつて頭を撫でてやると、顔を俯きながらこくりと頷いた百合を見て、何故だか気分が良かった。

「——ということがありまして、もしかしたら妹が学校に来るかも

しれないのですが」

朝のこともあり、百合が来るならば学校が混乱しかぬない事態になると予想した上で、事前に報告する為に校長室へとやってきた。

本当は人魔学校へと来て、一週間ということまで定期連絡の為に来たのだが、真の本題はほぼそちらの方である。

「ほほう、それは良き事かな、大勢の子供は学校で社会という大切なものを覚えるからね。

……だが、いいのかな？ 妹君いもぢいくんはあまり体が強いとは言えないのだろうか？

ここへ来るのにも一苦労ではないのかい？」

「いえ、妹は良く買い物に行ってくれているので、大した労力にはならないはずです。

その分、ここへ来た時には十分に休ませてから帰らせるつもりです」
無理さえしなければ、百合は生活を恙無く送ることが出来る。

ただ、学校へ来るのなら急激な生活環境の変化を覚悟しなければならぬため、あまり強く勧めることは出来ない。

「了解したよ、職員にはそのつもりで話をしておく。
ただ生徒の方は君がフォローしてくれると助かる……何せ、あの容姿では目立ち過ぎる」

「心得ています……それでは本日の本題へ」

魔法は一般社会へと馴染むことが出来るか、その他には魔法を持つ者と持たない者が共存出来る社会でなければならぬ。

校長の「うむ、頼むよ」という言葉を聞いて話を再開させる。

「まず、生徒達の魔法への認識が重要と考えます……先日の一件はお聞きになられましたか？」

「聞いているよ、君のお陰で幸いにも教室への被害が出なかったと聞いている」

どうやらミラの魔法爆発事件のことは周知の事実だが、問題はそちらより真が教室への被害を抑えたという風に出回っているようだ。

「それでなんですが、ミラが……エクセリーズさんが魔法を暴発させた時、教室の生徒達はおるか、教師までもが魔法での防御壁を張るといふのを見まして、魔法が既に人としての生活の一端として入り込んでしまっていることは否めません。それは一般人と決定的に異なります」

これで全てという訳ではないが、それは校長も承知していることである。

今更魔法を使うのを控えるというのは、魔法学校としての存在に矛盾してしまっているのも懸念の一つ。

「それで真君は、それについてどう考える？」

「危険な兆候であると考えます。」

魔法と科学にはあり方として、似たようなものありますから」

「それは？」

「便利すぎると人間が動かなくなるといふこと、それと犯罪が容易になることです」

校長は嘆息して言う。

「やはりか……身体能力の低下、近代の人間に挙げられる問題の一つだね。」

それと犯罪か、それは実を言うと考えたことがなかったね……所詮、私も魔法社会に生きた一人の人間といふことかな」

「いえ、校長は一つ新しいことを知りました……問題は、それをどう解決するかです」

正解の方程式へと辿り着く道のりは決して優しいものではないが、それでも気づいたといふことはそれから連想される事柄もまた一つ増えたといふこともある。

「ははは、君みたいな若者に教えられてしまうとはね……いや、失礼だった。」

どうやら無意識に内に私は君を格下として見てしまっていたようだ、素直に詫びさせてもらおう」

自分の非を素直に認める、それは年を追うにつれて段々と難しく

なる。

高齢にしてこの人格、真は校長に対して素直に尊敬の念を抱いた。「いいんです、実際に俺は貴方より格としては下にいるでしょうから……しかし、この魔法に対しての考えは格下か格下でないかというの関係ありませんから、お互い腹を割って話していきましょう」「うむ……うむ、そうだな。

よし、時間も長くなってしまったようだし、この件についてはまた次回に持ち越しということにしよう。

妹君のことはしっかりと伝えておくから心配しないでくれ」

「ええ、ありがとうございます」

校長との話し合いを終了させ、時計の方を見ると時刻は一時限目の開始時刻まであと少ししかなかった。

真は少し行動を早めながら、「失礼しました」と言って退室した。

それは、何気ない一言から始まった。

四時間目が始まる前のこと、真は何気なくいつものメンバーになりつつある竜也、ティア、竜胆と一緒にいると、突然横から何かか飛んできたのだ。

それは偶々空いていた窓から颯爽として去っていったが、何か紙を丸めたものだった。

資源は大切にしよう、と真の心にもないことが浮かんくる。

会話としては、あまり味気のないことばかりで、覚えているのは一時間目の魔方陣の授業どうだった？とかそういった魔法学校ならではの独特の会話であった。

魔方陣から連想して、魔法ということですからすっかり忘れていたが、編入当日からこれまで、ミラからは何も接触がなかったということを真は思い出した。

ミラの魔法爆発事件（多数ある）が起きたのが、三日前のこと。

それからこれまでの間、ミラからの接触はおろか、視線すら感じることがない（何かこちらを気にしている素振りは見かけたことがあるが）。

編入当日のこともあり、真から話かけるのは何だか気が引ける思いであったので放置していたのだが、今日、ついにあちらの方が我慢がなくなってきたようである。

端的に何があったかと言うと、真はミラからまた連想して、これまた編入当日に竜也が「お前凄えな！」の発言の意味がどうしても気になったのでミラの話へと転換してのだが、

「あんだ今、私のこと馬鹿にしたでしょ！」
ということになってしまったのだ。

何だかもう、真的にはミラに構うと碌でもないことが起こりそうな気がしてならないので、無視することにした。

「それで竜也、あの時はどうしてあんなことを言ったんだ？」

そもそも何故怒られているのか分からないのだから、無視するには十分な判断材料と言える。

「ちょっと無視しないでよ！」

「……真、お前は本当に凄えな」

「だから、その凄いつていう意味を俺は知りたいんだが」

「だから私を無視すんな、こら！」

「竜也、そろそろ教えてくれないんじゃないのか？」

瞬間、頭の上を誰かの腕が通るがすつと前に倒れて避ける。

「つつてもなあ……もうすぐ四時限目始まるからぱっぱと話すぜ？」

「宜しく頼む」

今度は胸を狙った突きを、半身の状態で避け、その後上段蹴りをしてくるのを軽く屈んでかわす。

視線はそのまま竜也に向け、自らにお襲い掛かる脅威は一切合切無視することにする。

「簡単に言つと、そのミラ＝エクセリーズは大富豪の娘さんでな、はつきり言つと近寄り難い雰囲気も併せ持っているせいか、そいつ

に近づく奴は少ない、だからそいつに対して文句だったり、馬鹿にしたりする奴も勿論少ないんだ」

「つまり、ぼつちか？」

「ぼつち言うなあ！」

あと私を無視するぬあああああああああああああ！！」

「そういうこと、俺が凄いと思ったのは、そいつに対して初対面？から馬鹿にしたことだな……容姿とか」

その答えを聞いて思う、確かにミラという少女はただでさえ編入当日につつかかってくる危ない性格をしているのだ、クラスの連中からしてみれば危険人物と同列に位置する訳だ。

更に魔法の暴発、どこぞの大富豪の娘ともなれば扱いにくく、近寄り難い人間の出来上がりというわけになる。

「……ふむ」

そこで、ミラが続けざまに放っていた拳を止める。

ぱしっ、といい音が教室に響く。

「なっ!？」

驚愕した顔で、顔を真っ赤にしているミラ、だが今はそんなことを気にしている場合ではない。

「ミラよ、お前は友達が欲しいか？」

「っ意味分かんないんだすけどっ、てか手を離しなさいよおっ！」

ミラは真の手を掴んで離そうとするが一向に離れることはなく、蹴りの反動で抜け出そうとするがそれらは全て避けてしまっている。避ける理由はないが、新しい制服を簡単に汚すつもりもない。

「やれやれ、離れたらまた暴れるだろうに……ほれ」

潔く離してやると、そのまま勢い良く後ろへ飛んで行く、そのままだと教室の外へ行きかねないので一応一言言っておく。

「ミラ、もうすぐ四時限目が始まる、すぐに帰って来いよ」

「うっさい！」

そう言って去って行くミラを見届けて、後ろを向くと呆れた顔でいる竜也と笑いを堪えきれずにいるティアが爆笑していた。

――結果として、四時限目が始まる直前にミラは律儀にも戻って来ていた。

四時限目が終わると同時に、一人の少女が教室を飛び出していった。理由は至極単純なもので、単に一人の少年と顔を合わせずらいからだ。

(何なのよ、一体あいつは！)

『友達が欲しいか？』、そう言った一人の男の姿を思い出し、ミラ「エクセリーズは腹が立つよりも混乱の方が頭の中を占領してしまっていた。

確かに、友達と呼べる人はミラにはそうそういなかった。

その原因も自分では分かっているつもりで、でもそれを直そうと思ったことはなかった。

他人に合わせるのに、自分を変えるのなんておかしい、そう幼いながらにして思った彼女はいつも一人だった。

(だったら、友達でもくれるって言うの……！？)

友達とあげる、くれる、もらうなどそういったものではないとは知っている。

だが、知っているだけだった。

友達など碌にいないミラにとって、真のお友達発言はそれほどまでに心の中まで浸透していたのだ。

だが彼女にも意地がある。

「お友達になってあげましょうか？」、「うん！」

などという生ぬるいお友達など信じるに足らないと思っているから、ミラはいつもまでも「お友達」を作れないということを自覚していた。

ただ単に「お友達になって？」というだけで恐らく万人は「うん」

ではなく、「分かりました」と言うだろう。

ミラという少女は、それはお友達ではなく、ただ立場を鑑みた上で大人な対応だということを理解している。

更に、加えてミラは決定的な欠陥を持っているということも知っている。

魔法を使おうとすると、”つい”ではなく”どうしても”魔力が多めに注がれてしまうという欠陥、欠点。

魔法使いとしては本当にどうしようもない出来損ない、ただのマジツチの棒程度の火すら操れない魔法使い。

それも、真は知っているはずだった。

だから、真という少年には疑問を抱いて仕方がなかった。

自らの素性を知ってなお、自らの欠陥を知ってなお、あの態度、あの対応。

理解が、出来なかった。

(けどあいつが本当にあの人なら……え?)

ミラは欠点と同時に利点もあるということに自覚している。

それは、魔力そのものを目で視れるということ。

その量、質、色などの魔力に関しての情報をその目で視て捉えることが出来るということ。

それは彼女自身、親を含めた誰にも話していない、ただ唯一の長所だと思っている。

その彼女が、生まれて初めて目にした違和感、それは彼女自身を確実に恐怖へと誘っていく。

(何、あの魔力保有量、そして質、色……あの人、絶対に人間じゃない!?)

これまで”強い”魔法使いのものは色々と見てきたが、それは初めて目にした”目に見える死”そのものだった。

幸い、その人物はこちらが見ていることに気づいていないのかそのまま歩いていく。

(あの方向、私の教室……だよね、どう……しよう)

足が竦んでなかなか動かない、気付けば額や脇には冷や汗が、奥歯はガチガチと音を鳴らし、足は重力を忘れたように感覚が薄れていた。

得たいの知れない恐怖、これまでにない非日常。

そして自分と同じ多大なる魔力保有量の持ち主。

その人物に、ミラは自然と興味を持ち始めていた、否、最初に見た時から持ってしまったのかもしれない。

その自覚がないままに、ミラはつり上がっている唇を引き締めて、教室へ向かっていた。

約束——とまではいつていないが、そろそろ時間だということ、真はいつも通りのメンバーと共に席へ着いていた。

食事をする場所はいつも中庭なのだが、今はまだ本日のメインヒロインが来ていない。

「ねえ、真君の言う待ち人って誰なのよ？」

一時限目が始まる前から、今日の昼食は一人追加だという話はある、それをティアは聞いている。

「そうですよ、神代くんってば私達に何も教えてくれないんですから……」

ティアの隣では竜胆がぶりぶりあつちと怒りを露あつちにしている。

先に中庭に行ってもらうか、と考え始めていたところに、真の待ち人は現れた。

その瞬間に教室はしーんと静まり返る、まるで雫がひとつ、水面に落ちるのを今か今かと待ちわびている風情だ。

そして、その雫は落とされた。

その雫——ではなく百合は真の傍まで来ると「はい、これ」と言っ

ていつも通りに弁当を渡す。
それに対して礼を言って、このまま教室にいるのはまずいと考え

て竜也達に中庭に行く旨を伝える。

だが、竜也達も百合を見つめたまま動かない、口はポカーンと開けたままで夢遊病患者のように覚束ない足取りでいる。

「さて、まずは紹介しよう、妹の百合だ」

真が掌てのひらを百合へ向け、視線は竜也達に向けて話す、その隣では百合で優雅にお辞儀をしていた。

これは、百合自身がしたいのではなく、真の体面を気にしてのことだということ、真は知っている。

紹介を終え、三人の各々の反応を待っていると、最初に動いたのはティアだった。

「きゃー！ 可愛い可愛い何コレ超可愛いー！」

可愛い発言を三連発して興奮するティア、そのまま百合対して抱きつこうとするが、頭を抑えて止めさせる。

「こら、初対面の相手に対して何をする」

その気持ちは分からないでもないが、何よりそれを止めないと百合の機嫌が悪くなるのだ。

そして今夜は何をされるか分からない、故に真は極力百合の機嫌を損ねないようにしつつ、且つ楽しめるように話をしていることを考えていた。

そしてそんな思惑を知らないティアは、渋々体を引きながらも、まだ体は前のめり気味である。

対して百合は知らん顔で持つて来ていた水筒でお茶をすすっているが。

「えと、神代君の妹さんですよね……私は竜胆菜です、宜しくお願ひします」

竜胆がそう言いながら、照れながらも手を出すと百合は珍しく（珍しく）手を握り返した。

「神代百合です。こちらこそ、兄さんがお世話になっています」

「私はコンスタンティア＝ルビー、宜しく」

「靈童子竜也、宜しくな」

順々に握手していく中、真はその様子を凄く以外そんな顔を見ていた。

顔こそ確かには笑っていないものの、確かな交流を図った、それは真にとつて驚くべき事実である。

が、生憎とそのままという訳にもいかない、一通りの紹介を終えて、百合の持ってきた弁当を広げると中にはまだ作ってから三十分も経っていないだろう熱々の白米とおかずが入っていた。

それを、竜也達は「おお」と言いながら覗く。

「これ、百合ちゃんが作ったの？」

「はい、こうなることは予想していたので兄さんのお弁当は増量してあります」

それだけ言うと、百合は自分の弁当を食べ始める。

一方、ティアは予想していなかった答えなのか、それとも自分が言う前に聞きたいことを言われたからか真の弁当と百合を交互に見ている。

「えっと、食べてもいいってことだよな？」

「そうだろうな……お前達は運がいい」

「何がですか？」

「百合の手料理を、熱いまま食べられるということをだ」

竜胆の問いに、真は簡潔に答える。

二人は目を見合わせて、ひょいっと弁当に伸ばしておかずを自らの口へ持っていく。

その瞬間、二人が目を大きく開いて手を口に当てている。

「何これ、旨……」

「ですよね……何だか、自信失くしちゃいます、私もお料理は得意な方だと思っていたのですが」

がっかりする二人、だが竜胆が料理を出来るということは初めて知った。

「それなら竜胆も今度作って来てくれないか？」

「えっ、でも……」

「まあ、一回だけならいいんじゃない、栞？」

「あ、俺のも頼むぜー、最近出費が激しくてさー」

「誰があんたなんか栞の弁当食わせるもんですか！

猿はバナナでも食ってないさいよ！」

「んだとテメエコラ！」

竜也とティアがこうなると、しばらく放って置かないと静まらない為、放置。

改めて竜胆の方へ向くと、苦笑いしていた。

「では、今度機会があったら……わっ！」

「なんっ、んぐっ……何をする、百合」

竜胆の話を聞いていると、突然箸が口の中へ侵入してきた。

中でウインナーが歯に磨り潰され、喉を通っていく。

「兄さん、私の弁当飽きたの？」

何故、そんな扇情的な顔で見やるのか子一時間程問い詰めたい衝動に真は駆られた。

「そんなことは、もがっ……」

「兄さんのお弁当を作るのは私の役目……ふふっ、それとも毎日トリニダード・スコープオン・ブッチー（世界一辛い唐辛子）が入った真っ赤なお弁当がいいの？」

「たまたま見ていた雑誌が同じだったのか、真もその名は知っている。」

「それは勘弁、と言う訳なんだ……竜胆さん、悪いけどそれはまたの機会にははくれないか？」

竜胆には悪いが、流石に食と引き換えに命は懸けられない。

「ふふっ、それはいいんですけど……百合さんはお兄さんのことが大好きなんですね」

そして竜胆は百合の素顔の一面を垣間見て、何故かそれを嬉しがっているように見える。

「そんなことはない」と兄さん、いつも通りでいいならそうしてあ

げる「……凄く仲良しだ！」

家でされていることを、ここでされたら一躍俺は妹と変なことをしている変態お兄さんに早変わりしてしまう。

最も、そうなったところで百合は全く気にしないのだが。

百合がやっど話せる人がいるというのに、その傍に真自身がいるとどうやら色々と危ないことが起こってしまうらしい。

「さっ、それはそうと神代君……そろそろお弁当を食べないと時間が無くなってしまいますよ？」

「ああ、そうだな……って百合、何をしている？」

「私は食べ終わったし、兄さんに食べさせてあげようかと思っていつの間に、と思っているとそんな考えを遮るようにどんどんと口に運ばれてくる。

それを羨ましそうに見ている竜胆、そして休み時間終了間際になつてようやく喧嘩をやめた二人はがつつくように弁当を食べていた。

「「ごほおっ!?!」「」

今日の正午の教訓、食事をする時は焦らずゆっくりと食べようということだ。

――そして真は、休み時間の終了のチャイムと共に去って行く人影を黙って見ていた。

四話 マジック・ロジック 前編（後書き）

第一話以外は、大体一話10・000字を越えるように心懸ける作者です。

それはそうと、最近足が冷えてきているのでスリッパ履くのを欠かせない毎日です、辛いですが頑張っていきますよ、ええ！

五話 マジック・ロジック 後編

午後、食事を慌しく食べ終えた真達は一旦教室へ戻り、午後の一時間を使って行う魔法訓練の為に支度をしていたところだった。

魔法訓練の授業では、一般の座学とは違って怪我の恐れがある為、ある程度の装備はしておかなければならないという校則が第何条かに記されている。

教室に残っているのはクラスの男連中、女子は専用の更衣室で着替えをするようになっていた為だ。

従って、百合は渋々ながらも竜胆とティアに連れて行かれて行った。

何故か、ミラが隠れるようにこそそこそと着いて行ったが、それは気にしないことにした。

人魔学校の生徒達は、入学と同時にあるものが配られるようになっていた。

それは、対衝撃のアーマースーツと、魔法陣記憶用の杖だ。スーツの方は、色は黒か焦げ茶、それと迷彩柄があり、対衝撃ということもあって中々に防御性能に優れた一品なので下手なことをしない限り破れたりはいしなだろう。

魔方陣記憶用の杖とはその名の通り、自らが使用する魔法の、魔方陣をそのまま記憶させることで、わざわざ描くこともなく、力を入れるだけで発動するお手軽魔法キットだ。

どちらも、値段にすると一介の学生では買えない金額なのだが、それは国立ということもあって最初の一度だけは完全無料での支給らしい。

魔法陣を記憶する杖のことだが、先程は金額と述べたが高いからと言って杖の性能が良くなるわけ決してではない。

寧ろ性能に関してはあまり差がないと言える。

金額というのは、その形状だったり、耐久性を高めたものだったりするから、おのずと材質も高くなるにつれて金額も上昇していくというもの。

故に、杖（形はどうあれど、総称して杖と呼ぶ）にどういった魔法陣を記憶させるか、何種類を記憶させるかというのは、魔法使いが悩む事柄の一つである。

ただ、その話を百合に話したことがあったが、その時に百合が呆れた声で何かを言っていた。

それは限りなく小さな声で、たまたま意識の外のことであったので聞き取れなかったが、確かに百合がそのことについて感心を抱いていなかったのは覚えている。

「真、こっちは準備出来たぜ」

「こっちもだ……竜也、お前はあまり似合わないんだな、ソレ」

「言うな……俺が着るとどっかの下端の戦闘隊員ぐらいにしか見えないことは知ってるんだ」

そこまでは言っていないが、と思うもののそれ以上何か言うのは野暮というものだろう。

「真は……何でお前が着ると様になってんだ！ ずりいぞ！」

「無茶を言うな、そういうことはこのスーツをデザインした人に言え……」

何故似合っているかというぐらいのことで、怒られてやるほど人はなっちゃんないぞ、と心の中で思いながら歩き出す。

それ以上竜也が会話をしなかったのは、魔法訓練に対する緊張だというのは分かりきっていたことだった。

真はただ、竜也が話さないような雰囲気を出しているので黙っているだけだったが。

校庭へ出るや否や、先に出ていた男子生徒から感嘆の声が聞こえてきた。

ここでやるのか、とか、広すぎるだろ、とかだ。

竜也もまたその一人で、話す様子もなかったので黙って待っていると、後ろから声が聞こえてくる。

「やつほー、待ったあ？」

そう言って前にいたのは、真達とは全く持って違う色をしたスーツを着たティアだった。

赤いスーツ、それは戦場なら真っ先に発見されて集中砲火を浴びること間違いなしのド派手な色彩だ。

ただ、元々のティアに対するイメージが赤ということもあって、さして違和感が感じないのも確か。

というよりは似合い過ぎるのだ、お姉さん気質のティアであるが故に、やけに大人びた雰囲気のように感じる。

「遅れてすみません、お着替えに時間がかかってしまいました」

そう言って頭を下げる竜胆、彼女のイメージは黒だったのだが、今度は反対に白のシートを着ていた。

雪国での戦なら善戦出来るか、とも思う。

そして、二人の横側に百合が不機嫌そうに立っている。

百合は元々の基本色である黒のスーツを着ているのだが、何分百合は肌は色白、紙の色も真っ白ということも相まって、一種の神秘性を増しているように見える。

「兄さん、これ全然可愛くない……」

そう言って尻の辺りのスーツを摘んで離すと、ぴちっという肌の柔らかさそうな音を響かせた。

それを聞いていた男子諸君が一斉に聞き耳を立てていたのは言わないでおこう。

「まあそういうな、三人共、良く似合っているぞ」

「そうだな！ まあティアには正に孫にも衣装って言葉が似合っているけどな！」

余計な一言なんていわなければいいのに、と思いつながらもテイアに追われて逃げていている竜也から視線を外す。

見れば竜胆も緊張しているのか、強張った顔でいる。

一一のにも関わらず、その隣で赤くなっている頬に手を当てた百合が「似合ってるなんてそんな……でも兄さんがそう言うなら」と言いながら体をくねらせているのを見て、雲行きが怪しくなったのを感じた。

「全員整列！」という言葉でクラスの一団が集まる。

前には四名の先生が立ち並んで、威圧感を隠そうともせず睨むように生徒を見る。

見学者の百合は、グランドの脇で退屈そうに体育座りをしてこちらに手を振っている。

真は視線は先生に向けながら、気付かれないように手を振り返した。

中には自分に向けて手を振っていると勘違いしている馬鹿な男が約何名かいたが（先生に見つかって叱られていた）。

「よし、ではこれから三つに分かれて模擬訓練を執り行う！各自、好きな場所へ行け！」

今回の模擬戦は最初ということで、四十人の人数をまず四つに分け、三十人は模擬戦を、残りはそのフォーローをするということになっている。

ホワイトからは二名、模擬戦へ出る事となっているのだが、その内の一人は真だった。

もう一人は好戦的だが、適正魔法は医療特化というアンバランスだが貴重な男子生徒だ。

そして今回の特色とえば、三つのボクシングのリングより二回り程大きなリングで、それぞれが魔法専用、物理専用、そして魔法と物理のどちらでもありの実戦専用、この三つということになっている。

真はその物理の方にエントリーしているのだが、いつものメンバーはそうではない。

ティアと竜也は両方を使える実戦専用のもので、竜胆は魔法専用の方へ向かっているのが見える。

人数は三等分されているので一つの場所に十人、単純計算で一对一の五試合だが、恐らく時間が余っていたりすると体力の残っていないような人からまた試合をさせられるだろう。

(地味に引き伸ばすか……)

早く終わらせることにあまりメリットを感じないが、逆に長引かせるのにメリットを感じる。

ただ魔法戦の場合はそうはいかない、魔法は一般(魔法使い的常識)に考えて早めに決着をつけるのがいいと言われているらしい。

らしい、というのは真自身が未だ”魔法戦”というものを自らが体験したことがないからだ。

「さあ、お前の番だ」

先生が持つてくる箱の中には、一〜五の数字が書いてあり、同じ数字の者が競い合うというものだ。

真の手に持つ番号は一番、即ち最初に模擬戦へと駆られることとなってしまった。

強い風が吹く、まだ春に張り始めたばかりで肌寒い風が残るなか、水流綾香は屋上で校庭を見下ろしていた。

今の時間は、三年生の担当先生が今日に限ってだけいない故、自習の時間だ。

「今、二年生は初めての模擬戦かあ……」

そう言って綾香は、自らもまた、今の二年生のように体験した初めての模擬戦というものを思い出していた。

彼女は生まれたときから高い魔力保有量と、優秀なる魔力コント

ロール、そして”水”に魅入られた、魔法使い達の間では天才児と呼ばれていた。

否、呼ばれている。

その彼女の初めての模擬戦は、実に呆気のものであったということとは記憶にしっかりと残っている。

水を使つての瞬殺、聞こえは悪いが言い換えると即気絶させたということだ。

その時にも彼女は、本気ではなかったということもまた覚えてい
る事柄のひとつだった。

――張り合いがない。

自分が強者であることに、綾香自身は対して思い入れはない、寧ろこんな大した力はいらないとすら思っている。

強すぎる力は時として災いと成す。

彼女自身、それを強く知っているからこそ、生徒会長に立候補したのだから。

「何してるの、綾香？」

「二年生が初めての模擬戦をやるみたいだから、少し見学していたのよ」

そう返答すると「そうなんだ」と言つて同じように校庭を見るのは来栖川美奈、日本人と外人との間に生まれたハーフで、茶髪でおさげで黒縁眼鏡というのが彼女のスリーポイント。

「へえ、私はホワイトだから、模擬戦はちよつと怖くてあまり出来ないけど、やっぱり初めてのつていうのは少し楽しそうだね」

美奈は数少ないホワイトの生徒で、戦うという意識をあまり持たずにいる内気な少女だ。

そんな美奈は、別の形で皆と一緒に在りたいという理由で生徒会書記に自ら立候補をすることに。

「まあ私の場合は三人ぐらいしかまともな……ってあら！？」

突然、綾香がらしくもない素つ頓狂な声を上げて、やけに楽しそ
うな声をあげる。

「どつしたの……あ、あれって……？」

綾香の視線を追っていく先には、物理用のリングに上がる一人の生徒。

美奈とて伊達に三年間この人魔学校で過ごしていたわけではない、負傷者の治療という名目で自らもまたリングの横に立っていたのだから。

こと勝負事においては当然、どちらかが勝ち、どちらかが負ける。ならば横にいるだろう美奈達の役目は、どちらかが負けるのを予め予想しておき、負ける方にいつでも行けるように”強い”生徒をしっかりと見極める為に鍛え上げられていた。

その美奈と、生徒会長の綾香が見つめる先にはリングの上に立つ、無愛想な少年が一人。

その風貌を見て、美奈は問う。

「もしかして、あの子が綾香の言ってた子、だよな？」

合っているだろう、という自信は美奈にあるものの、やはり引け腰に聞いてしまうのが美奈故である。

それに綾香は「そうよ」とだけ返す。

「教えて綾香、あの子は他の子とは何か違う……一体この違和感は何なの？」

「それは自分自身で確かめるべきよ……始まるわ」

綾香が美奈から意識を外して、その二年生の動きの一挙手一投足を見逃さんとしていることに気付いた美奈もまた自らのもてる全神経でもって、その戦いを見ることにした。

シェイクスピア曰く、「お前たちもみな知っているように、慢心は人間最大の敵だ。運命をはねつけ、死を嘲り、野望のみを抱き、知恵も恩恵も恐怖も忘れてしまう」

真はこれを言葉の通り、油断せず気を抜くなという意味合いで理

解している。

或いはマラソンのゴール、目標はゴールではなくその先にあると
考えればおのずとその通過点であるゴールを最後まで走りぬぎ、全
ての道のりを全力疾走出来る。

或いはテスト、どんなに自分が解けたと思っっている回答でも、も
う一度見ればどこがおかしい部分が見つかるかもしれないという
と。だが、先に挙げた事柄はやろうと思えばやれる簡単な事柄でもあ
る。

自分は出来る、どんなに難しくても出来るという慢心こそ、人間
の弱点だ。

諺ことわざでもってすれば、足元を掬われる、と言うことも出来るだろう。
故に真は気を抜けるを時は存分に抜き、気を入れる時は抜けない
よう栓をしっかりしておくように心懸ける人間である。

三つのリングはコンクリートで出来ている、そもそも野外のなの
だから当然か。

故に物理専用では大変危険なことになるものが多い、魔法が使える
のであれば、ぶつかる寸前にブレーキがかけられるからだ。

だが、物理専用で魔法の使用は禁止されていない。

魔法による攻撃ではなく、魔法によって強化された肉体で戦うと
いうのが、物理専用が設けられた理由だ。

見れば、ティアや竜也、そして竜胆までもが真の方を見ているこ
とに気付いた。

お友達の心配か、それともいずれ競い合うかもしれないライバル
の戦力を知りたいのか。

尤も、真は手の内を見せる気などサラサラない。

真と対照的な位置にいる相手、ブラックの生徒は黒いスーツを着
ている。

手のあたりのスーツを引っ張っている辺り、どうやら素手による
戦いを主としているらしい。

それも、ブラフだと仮定して戦うが。

この戦いの勝敗条件は、場外へ飛ばすか自分が負けを認めるか、審判が負けと宣告するまでか、審判が危険だと判断した場合にも決する。

無論、危険行為は反則負けだ。

これが学業へ特別内心に響く訳ではないが、軍事演習としてなら教育の一環として然程問題は無い。

(……戦力分析)

相手は先程見た通り、徒手格闘技を習得している可能性がある。

ならば、足はダメージよりも動くことに特化させているだろう、なれば付加能力は行動の加速化。

(短期決戦型か……カウンター狙いで行くか、疲労を狙うべきか)

速さでもって攻められるというのであれば、それ相応の対応はとって当然。

速さに関する付加能力特性を持つのは風と雷、それと重力制御だ、相手の外見的性格から見てまず風という線は薄い。

ならば、難易度が高いその場で効果を持続させなければならぬ重力制御よりも雷の方が可能性として高い。

更に言えば、この模擬戦では戦いの始まる前から魔法を準備することは反則だ。

ならば何故、相手は杖を持っていないのかいえば、それは格闘技の邪魔になるからに他ならない。

(結局はいつも通り……か)

審判が「両者前へ」言くと、二人が一定の距離を保って向かい合う。

始まる前に真は、人差し指を前に出す、相手もまた同じような構えをとっている。

魔法をいかに早く使えるかが勝負、と思っているのだろう、だが

――

「始め！」

「――ふっ」

瞬間に距離を詰めて相手の手を弾き、魔法陣を中断させるとそのまま顎を軽く殴る。

するとこつんという音が響いて相手の眼球がぶるんと動き、膝が笑い始めて目を開いたまま膝から崩れ落ちた、その後地面にある相手の頭の横を軽く踏んで、終了だ。

敵は、まんまと真の策にはまった。

真もまた自ら魔法を使つての肉弾戦だと、相手はそう勘違いしたのだ。

ただ、真は人差し指を出しただけに過ぎないのに。

敵が魔方阵に意識を入れた瞬間に肉薄、あとは先の通りである。

真はこれを、対魔法使い戦術の一つとして考えている。

「し、勝者……神代真！」

未だ啞然としている周囲を放っておき、再び暇を持て余してしまつている姫君への下へと、真は馳せ参じて行つた。

「どうだった、百合……少しは楽しめ……てないみたいだな？」

兄が闘つているところを妹が見て楽しむのも少しおかしな話だが、それでも百合の退屈が凌げるのなら、どんな道化でも演じてみせよう、それが真のいつかした決断だ。

だが当の本人は、あまり気乗りしていなみたいである。

「だって、勝負一瞬だし。」

それに、他人のゲームをやつてるところなんて見たって面白くないんだよ？」

「まあ、そりゃ自分でやつてる訳じゃないもんな、仕方ないか」

「兄さんは楽しかったの？」

痛いところをついてくる妹に、真は苦笑しながら答える。

「楽しいって言えば嘘になるな、人を殴って楽しいのはやはりおかしな奴、だからな」

例えそれが競技であっても楽しいとは感じないだろう、というの

が真の見解。

それで戦いを止める、という訳ではないが。

「それじゃ、私も楽しくないもん。」

楽しみは共有してこそ、なんだからね？」

何だからしいことを言っているが百合とてあまりコミュニケーションをとる方ではないので若干ながら説得力に欠けている。

「多分俺は次があるだろうから、ここにいて一緒に見ようか」

ここは魔法専用と実戦専用リングの間に位置する空間。

そこにはいつものメンバーに真が抜けた状態の三人が集まっていた。

それぞれ、竜也が四番手、ティアと竜胆が五番手である為、一緒に一番手で試合をやることになったらしい真の戦いの様子を観戦しよう、ということになっていたのだが。

「っはあゝ……なんだありゃあ」

その戦い振りを見て、竜也が感嘆の息を漏らす。

竜也達はミラを投げ飛ばした時の真の俊敏さ、反応の速さ、筋力の多さ等をそれぞれ各個観察し、推察していたのだ。

相手となった男子生徒は、陸軍の軍人を父親に持つ、幼少の頃から戦うということについては何かしらの特訓なりを受けていたはずだ。

彼もそうだった経緯があるからこそ、物理専用の模擬線に立候補したのだと思っている。

竜也達から見ても、相手の動きには一切ーとは言わないがー無駄がなかったと思っっている。

始めてからの初動、魔法陣を描くスピード、どれをとっても二年生でトップクラスであることはほぼ間違いない。

実際に竜也含めて他の観戦者も、物理では敵わないと思っっている

生徒が多数であった。

その彼が、ものの数秒で成す術もなく沈黙した、というのが現実だ。

「真君、やるとは思っていたけどまさかあそこまでとはね……」

相手とて、真の動きを注意していない訳ではなかった。

真の動きから情報を読み取り、それで尚且つ魔法戦だという思考を選んだのだ。

魔法使いとしてそれは間違いではない、寧ろそれが最良だったというべきだろう。

ただ如何せん相手が悪かった、というだけ。

「人差し指一つで相手の思考そのものを操った、という訳ですよね……」

「だな、実際俺らも真が魔法を使うってことを想像しちまったんじやねえのか？」

確かに、竜也達はそういう想像をしていた、というよりはせすにはいらなかった。

ミラを投げ飛ばして、真に問い迫った時、彼が答えた「それが俺の主義」という発言。

それは裏を返せばつまり、場合によっては魔法を使うということでもある、実際に真も魔法は使えると言っているのも要因の一つだ。

「真君って、人ひとり投げ飛ばすから武闘派かと思ってたけど、実は頭脳派だったってことね。

実際、闘っていたのが私だったら負けるとまではいかないけど、辛かったかも」

真の相手が負けた要因の一つとして、魔法陣の描くスピードであったこと、それも一つの要因。

だが魔法陣記憶用の杖を持っている、魔法専用と実戦専用のリングの上であればその限りではない。

「こりゃ、もうちつと真面目に戦略練らなきゃいけないな」

「そうですね……私だったらあの一発で即気絶でしたし」

「私も、対真君用の必勝戦術、考えとこ」

仲間に対して酷い口振り、とは三人とも心の中で思っていたこと
だか、言わないことにしていた。

「あ、ミラのやつの試合が始まるみたいだぞ」

魔法使いは日々進化していくもの、そう竜也達は考えている。

「ほえ〜……」

竜也達とは違う場所、屋上で美奈は竜也と同じように感嘆の息を
漏らしていた。

「『ほえ〜』どころじゃないわよ？」

あの子は私達、魔法使いの考え方とか戦い方、それと対処方法をし
っかり考えてる。

そうでなきゃ、あんな結果にはなったりしないわ……つまり、今現
在二年生で一番強いのが彼、ということになりかねないわ」

「確かにそうですね、あの足運び……あの間合いからの一瞬の迷い
のない詰め。

まだ実戦経験の少ない、二年生の魔法使いからしたら度肝を抜かさ
れるどころじゃないかもですね」

それは暗に、自分達なら大丈夫ということでもあるのだが、それ
を綾香もまた否定しない。

三年生の矜持プライドだとしても、それは誰しも卑下するは出来ない。

それ程の実戦経験を積んでいると彼女達はそう思っているし、実
際に行っているからこそその自信。

「私の手描きだったらギリギリ対応が間に合っつてところかしら、
もしも更にスピードアップするなら杖がないと駄目ね」

「うーん、私はどうでしょう……まず杖がない物理専用のリングで
は戦いませんし、かと言って相手と同条件というのが前提であるな
らば、私では対応は無理ですね。」

あの子がどんな魔法を持っているのかは未知数ですが……是非、魔法戦で闘ってみたいものです」

来栖川美奈はリングの上ではあまり闘わないものの、魔法陣の描くスピードは綾香と並んでトップに君臨している。

尤も、杖があれば魔法陣を描くことはあまり意味を成さないのだが、それでも杖を弾かれた、折られたりした時に即座に対応できるという点では優秀だ。

「まあ、その機会があれば私も……っと、あの子が出てきたわよ」「ミラ」エクセリーズさんですか、あの子も魔力保有量は凄いのですけどね」

ですけどね、爆発してしまつては、という言葉の続きが綾香の頭に浮かんだが、同意見なので黙殺。

「まあ、何かあつたら私達が対応するから大丈夫じゃない？」

「そーですねー」

「む、何よ……やけに嫌そうじゃない？」

「そりゃ、そうですねー」。

あの子つたら人に怪我させるだけじゃなくて器物破損するんですよ？直すのはこつちなんですよ？」

どうやら機嫌を損ねたみたいだということを一ち早く理解すると、「はいはい、分かったから」と言つて宥める。

根は大人しい性格なのだが、ネガティブモードに入るとぐちぐち五月蠅いのが美奈でもあつたりする。

(まっ、欠点のない人間と付き合つても面白くないってね)

自らもまた欠点はあるって然るべきだと思つ綾香は、美奈の頭を撫でながらそう思つていた。

ミラとその相手がリング上上がる、だがやる気満々のミラと違つて相手は物凄く萎えている。

(お気の毒に……)

真は合掌しながら相手の安否を願う。

ミラが魔法を使用すると分かっているのなら防御壁を張ればいい、恐らくそれで勝てると思っっているのだろう。

実際、ミラが空中爆発をした時、気絶をしていたのだからそう思っつても無理はない。

ただ、それでいいのかとは問いたくなるものだが。

試合開始の合図とともにミラが魔法陣を、相手は魔力を練り上げてドーム上の防御壁でもって自らの周囲を爆発から守る腹らしい。

対してミラはといえば、爆発の余波など我関せずとしているのか、火が着火する程度の魔法陣に渾身の力を持ってして魔力を注ぎ込んでいる様子。

あれでは教室の二の舞だ、とは思っていた真だが、それは現実のものとなった。

ミラを中心とした半径五十メートルにも及ぶ大爆発、幸いにも(無情にも?)その場から離れていた人達は皆、軽い防御壁でもって爆風を受け流していた。

「っつておい、こっちまで来るぞ」

爆風は他の生徒達が受け流していて、その余波と本流が混ざり合っつて真と百合の元へ迫ってきている。

その姿はさながら砂嵐といったところで、中に巻き込まれている砂や石があたるだけで瀕死の重傷は免れぬだろう。

そう判断した真はその場から逃げる為に百合を抱え始めると、「大丈夫だよ」とだけ隣で言っていたのを確かに聞いた。

「風よ」

そう百合が言葉にした瞬間、それまで迫っていた爆風が突如として空中遙か上空へ昇っていき、砂や石を連れたまま近くの森林へとその姿を消した。

「……百合、お前……何をしたんだ?」

真は、今日の前で起こった事実を受け止められずにいた。

確かに百合は「風よ」とは言った、だがそれだけだ、魔法陣を使った様子は一切ない、ましてや杖さえ持っていない。

魔法陣を使わない魔法、そう頭で認識した時に真は瞬間的にそれは不可能だと思わずにいられない。

魔法とは、魔法陣に描かれた文字ルンでもって、自然の力の一部を操るものだ。

確かにそれは魔法技術とされる立派な学問に、魔法学校では認定されているのだが。

それにはどこも、魔法陣の存在は不可欠だ。

魔法陣があつてこそその魔法だ、と言わんばかりの本の量、魔法陣の数々。

「何って、魔法だよ？」

きよとんした顔で、平然と言つてのける百合。

彼女が今したことは、現在における魔法技術に革命を起こしたと言つても過言ではないぐらい、凄い——脅威と言つても差し支えないものだ。

「魔法を、魔法陣なしで使つたのか？」

それは当然の問いだった。

価値観の塗り替え——真自身、魔法のことを全て知つたつもりではなかったが、それでも並の一般人より、並みの魔法使いよりは深く理解していると思つていた。

何より”真の魔法”がそうだと示しているものだと思つていた。

だが、更なる事実を当たり前のように告げられる。

「何を言つてるの、兄さん？」

魔法陣は魔法を使うためのものじゃないよ？

魔法陣はその名の通り魔法を配置するもの、あんな風に魔法陣を描いてから魔法を使うなんて無意味なこと、私はしないよ？」

「……そうか」

つくづくとも言うべきか、真は百合という存在には驚かされるばかりだ。

そして、この会話、あの行為と声を見ていたのが自分だけで良かったと思わずにはいられなかった。

「魔法陣を描いてから魔法を使うなんて無意味」とい発言は今の魔法使い全員に喧嘩を売っているようなもの、それは今の真には望むべくもないことだ。

このことを内密にするように、と百合に言ってから、真は思う。

――ああ、どう言い訳しよう、と。

あれからは淡々と模擬戦は行われ、竜也とティア、竜胆はそれぞれの魔法を駆使して勝利を勝ち取っていた。

実は真は、屋上から誰かが見ているということは知っていたのだが、その人物達には百合の魔法の一件は知られていない様子で静かに安堵した。

一方、隣にいた百合はいつの間にか肩に寄りかかって寝てしまっていて、一向に起きる気配はなかったがこと真が闘う時に限っては目を覚ます。

真の二戦目で本日最後の模擬戦、ブラックの相手は真の接近を許すまじと開始早々から後ろに飛びのいたのだが、今回は真はそれを追わない。

何故なら、後ろでは百合が楽しませると言わんばかりの眼光を漲らせているので、即KOする訳にもいかず、相手が魔法を使うの待つことにした。

所謂、舐めプレイというやつではある。

あのまま追えば三手目には詰んでいたのは、真の想像では出来ていたのだが、それはしない。

そしてどうやら相手の逆上を買ってしまったらしい真は、魔法が

ら逃げ続けることになってしまった。

相手が使っているのは火の魔法、どうやら体全身に炎を纏って触れれば火傷、殴っても火傷という付加ダメージを対策としてとったらしい。

——火の魔法を纏って、本人が熱いと感じないのは体の表面に薄い防御壁のようなものをまっというからだ。

はつきり言えば、全くの愚策である。

火に一瞬触れた程度で熱くもなんとも感じないし、耐火性も兼ねているスーツを着ている以上安全確実だ。

だがそれでも、一定時間触れられれば低度の火傷はするかもしれない。

が、それは真を掴めればという話であり、その間にKOされれば元も子もない。

「はあっ！」

相手の纏った火が拳の延長線上に伸びてくる。

(なるほど、射程距離を引き伸ばして俺を近づけないつもりか、そして……)

それを難なく避けると、直線状に向かった炎は路線を曲げて真を襲う。

それをバツク宙で避けると、その間に百合が何気に笑っているのを見えた気がする。

(俺が押されているのを楽しんでいるのか……?)

なんとも酷い妹だ、と心の中で愚痴りながら火を避け続ける。

傍から見れば、火の縄跳びを飛び続けているようにも見える。

相手は魔法を持続して使うのに疲労をしているのに対し、真は汗一つかかずに避け続ける。

このまま避け続ければ、真が勝つのは分かりきっていることだが、それでは百合が退屈してしまう。

それを理解すると同時に大きく相手から距離をとる、炎も一定の距離を保たなければ形状を維持できない様。

「なあ、これから俺は一撃でお前を倒す」

それを聞いたはずの相手は、はあ？という顔を浮かべた後に、顔を引き締める。

先の真の一戦でそれが可能かもしれないと理解したからだ。

はあ？の意味は馬鹿なんじゃないかという意味ではなく、何故そんなことを言う必要があるという意味だろう。

「この一撃を何とか出来れば、お前の勝ちだ」

そう言っただけで真は深く腰を落とす。

どこぞのなんたら拳法で使われそうなものだはあるが、真が何かしらの攻撃しからないという意味は伝わっている。

相手も炎の形状を変化させて、炎を球体状にどンドン圧縮している。

だがその為に使う力は決して少なくない、これが決着であると互いに理解しているのだ。

「スウ……」

一点突破である以上、炎による防御は見込めないと判断した相手は全神経でもって真の動きを捉えようとしている。

全身の筋肉を最大限まで動かせるぐらいに体は温まっている、あとはどれだけの気合を出せるかだ。

（身体機能強化開始……手の先から肩……胴、下半身、爪の先まで行き渡らせる）

準備は出来た、後は躊躇なく体を全身全霊でもって稼働させるだけ。

「――ハアツ！」

隙など関係ない、ただ力任せの掌から押し出される衝撃波。

真の足元の地面はひび割れ、足元の地面を抉りながら後退している。

相手は圧縮した炎でもって全力の迎撃に打って出る、これに成功すれば真は火に押されて場外へ出るだろう。

だが、そんな想像を打ち砕く力がそこにはあった。

相手が全力で圧縮したはずの炎は、押し出された空気の塊によって一瞬にして分解され、四散していく。

相手はそのまま、負けたということを理解する間もなく場外へ吹き飛ばされた。

模擬戦後、相手からは「今後の課題が出来た」と言われて握手をし、爽やかな終わりを迎えた。

一種のライバル意識が相手に芽生えたみたいだが、そんなに闘争心をむき出しにされてもな、とも思う。

百合に模擬戦の感想を聞いてみれば、「兄さんの負けるところが見たかった」等と心にもないことを言っている。

そうしてこの日の魔法を使っただけ、初めての模擬戦は終わった。

――百合の魔法陣を使わない魔法という疑念を残して。

五話 マジック・ロジック 後編（後書き）

今回は現代における魔法の定義、そしてその反存在となる者のお話しです。

魔法という存在を突き詰めて、行き着く果ては――

次回の第六話でプロローグに位置するお話しが終わります。（長すぎる！）

六話 少女と従者の相互関係（前書き）

今回は百合主点の話です。

主に二人しか出てきませんが、話に他の人は出ます。

六話 少女と従者の相互関係

魔法、それは神秘の力。

魔法、それはカミサマが与えた聖なる力。

魔法、それはアクマと契約せし者が行使する力。

人々を救済し、自然に恵みを与え、秩序と平穩を与える力。

それは本当。

それは嘘。

カミサマとはいるけどいない存在、人間がそうあったらいいなという想像が創造したモノ。

アクマとはカミサマより余程、信憑性を感じられる。

この世にはアクマしかいないのではないか、と誤ってしまう程に生は残酷にして無情に苦痛を与え続け、死は無慈悲にして平等に終わりを与える。

聖書には書いてある、神は悪魔よりも人を殺している、と。

ならばカミサマとアクマの違いは何なのだろうか。

人々を救済してくれるのがカミサマならば、何故人を殺すのだろうか。

或いは、それが救いなのかもしれない。

死という救い、それは本当に救い？

ならば逆の位置に存在するアクマは人を生かし続けるのだろうか。

それは、本当に悪なのだろうか。

或いは、それが悪なのかもしれない。

カミサマとアクマ、その二つを同一視して見るならば、それが本当のカミサマなのかもしれない。

救いを待っている人々に、平等に生と、死を。

一一なら、何で……私は、死を、望まなかったのに。

今日も少年は家を出て行ってしまった。

否、それは時が来れば戻ってはくる、だがそれを待つ時間こそ、少女には苦痛だった。

「兄さん……早く帰ってこないかな」

少女一一百合は今日も家で兄の帰りを待っている。

今朝は真が好きな和食にした。

白いご飯に魚、それに少量の和え物、朝から朝食を摂り過ぎない様に、しかし途中でお腹を空かせないように考慮した量を作った。

真は、喜んで食べてくれた、美味しいと言って頭を撫でてくれた。しかし、それだけ。

「はあ……」

だから百合は今日も溜め息をつく、怠惰な日々^らに苦痛を感じながら。

だが、今日のところは一味違ったようだった。

「百合、そんな溜め息をついてどうしたのですか？」

「藍か……はあ、どうしたもこうしたも、退屈だからに決まってるじゃない」

百合は辟易した様子で彼女一一鬼島藍に向かって言う。

鬼島藍は人魔学校の三年生で、今日は登校日の筈だ。

「そうですね、では今日は街の方へ出掛けてはみませんか。学校に隣接している街とはいえ、結構面白い場所が多いんですよ？」

真が百合をこの地へ連れてやって来た理由のその二として、学校の敷地にデパートやスーパーなどが並んでいる住宅街や商店街が並んでいることだった。

百合が安全に買い物出来るようにと、真は少しばかり学校への道のりを遠くしてでも商店街の近くの家へ引っ越したのだった。

無論、そこは遠すぎないように百合も意地を通したのだが。

「それはいいんだけど、今は買うものも大してないし。というか、学校はどうしたのよ……今日はちゃんと学校やってるはずでしょ」

兄さんも行っちゃったし、と最後に付け加えられる。

学校に見学したのが昨日のことで、その日はそのまま帰宅した為に買い物には行かなかったが、別段今日買っておかなければならない物というものもない。

故に、百合には買い物へ行く理由はない。

しかしそれに、藍は不満そうな顔をしている。

「私、いつも言ってますけど、百合は趣味が無さ過ぎだと思つのです。」

あと、学校はサボタージユしました」

「藍、いつも言ってると思うけど学校はしっかりと行きなさい」

百合がそう忠告すると、藍は懐ふところから何を取り出す。

「この仮面、かけなければいけないっていうのは分かってるつもりなのですが……」

「やっぱり変人扱い？」

藍は頷く。

「はあ……けどこればかりは諦めなさい、貴女が選んだ道よ」

「それは……分かってるつもりなのですが」

「分かってるなら……まあいいわ。」

今日のところはよしとしましょう、その代わり、色々と私に言うことがあるんじゃないの？」

藍が学校を休んで百合の下へ来るのは、何も今回だけではなかった。

この地へ来る前にも、引越す前の家へ突然やって来たりする、それが例え下らない理由だとしても。

その理由としては、藍が手にしている仮面に理由があったりする。それは、百合が”百合以外の前では決して外さないこと”という

藍に課した不^{トル}文律。

それは学校中でも適応され、今や藍は人魔学校で知る人ぞ知る変人扱いになっている。

曰く、顔に傷があるだとか、実は要人の娘だとか、凄い美人だとか、そんな噂を藍は耳にしている。

本人からしてみれば、そんな噂のせいで人が寄って来ないのだから、いい迷惑だ。

しかし、迷惑が全て悪いとは一概には言えない。

仮面を剥がされる可能性が少ないと言えば、あまり人と関わり合うのを良しとはしないからだ。

というより、藍はあまり”人”が好きではなかった。

「はい、今回の一年生に入学した者の中では、特に危険な人物はいません。」

いるとしても精々が五賢人の子供ぐらいです、魔法も然程強力ではありません。」

「魔法、ね……。」

藍の言ったことに対し、百合は遠くを見るような目で呟く。

思い出すのは人魔学校での先の一件。

百合が言っているのは、学校の生徒が使う魔法のこと、つまり魔法陣のこと。

「百合は、学校を見てどう思いましたか……?」

「どうも何も……まず根本的に魔法というものを履き違えてる、馬鹿みたいに魔法陣魔法陣って……。」

その呟きに藍はつい苦笑してしまう。

「確かに、私達はあその子達とは、少しばかり違いますからね」

「少しどころじゃないよ、私はあんな魔法と認めない」

「そう、ですね……それじゃあこの話は終わりにして外行きましょうか?」

「それ、まだ続けてたのね」

先の話を終えるや否や、溜まっていた洗濯やその他諸々の用事を
終え、外出の準備をしていた。

「藍、私の方は準備は出来てるけど」

今の百合の格好は、髪の手入れをしている真っ直ぐで綺麗な髪に、
白のワンピース姿。

それだけだった。

それを目撃した藍は、ただちに百合の自室へ連行していく。

「いつも言ってるじゃないですか、女の子としてもう少しお洒落
に気を使っべきだと！」

そう言いながら、藍は手馴れたように百合の部屋にある押入れを
物色していく。

そう、ブラジャーとパンツを探しているのだ。

「私だっていつも言ってるじゃない、それ窮屈なのよ」

「駄目だって言ってるじゃないですかッ！」

第一自分の好きな殿方以外にそんな格好を見せてもいいんですかッ
「！」

あたかも自分自身のことのように話す藍に対し、百合は白けたよ
うに言う。

「いいのよ、別に兄さん以外に見られたってどうも思わないから」

本当にそう思っているのだろう、そう思った藍は更に険しい剣幕
になっている。

その様子を、またか、と試みてみる。

百合自身からしたら、何かに体が締め付けられるような感覚はい
つになっても慣れなく、窮屈にしか感じられないもの。

病院でもそう言った類の衣類は見に付けず、特別治療室にいた為
誰かに見られて困るようなものでもなかった。

幸い、医師と看護婦は女性だったので難を逃れたのだった。

「……もう、百合がそう思っていて、私は困るんです。」

それに百合はお胸だつて大きいんですから、そんな薄着一枚では出るところが出てしまふんです、それを見る殿方の目と言つたらもう気持ち悪くてっ！

私だつてここまで強く言いたくないのデスケドツ、デモツ、下着ダケハツ、身に付けてくださいませんかッ！」

余程その時のことを思い出したくないのか、藍はおかしな悲鳴を上げながら身悶えている。

その様子を、貴女の方が気持ち悪いわよ、という思いで見っていた百合は溜め息をついた。

「分かつたわよ、それじゃ下着を出して、色とかは貴女が決めていいから」

その言葉が嬉しかったのだろう、後光が輝く程に顔を明るくして「はい！」と言つて、「これがいいかな、でもこつちも捨て難いですし」と下着をとつかえひつかえ取り出しては悩んでいる。

「後一分」

一寸の迷いもなく、そう宣告すると背を震わせて一組の下着を取り出す。

それを着て、外出して欲しいということだろう。

下着の色は白だが、柄は花柄のレース付きという、全く自らの趣向にそぐわないものだった。

その下着は以前に藍が購入してプレゼントしたものだ。

学校の外と言つても近くもなく、遠くもない程度の場所に街は位置している。

生徒が気軽に足を運べる範囲にあるのはいいことで、実際人魔学校の生徒は足繁く通っている者は多い。

街にはショッピングモール、小さな病院、スポーツジムから娯楽施設までありとあらゆる一一とまではいれないが大体のものはあると言つていいだろう。

尤も、百合はその大半に対して興味がないので専ら行くのはデパ

ト等での食品と日用品の買出しだ。

そして今日の目的は、ない。

「それで、藍はどこへ私を連れて行くの？」

歩き始めて早十分、商店街に足を踏み入れた二人は行く当てもなくぶらぶらと辺りの店を除いているだけ。

それを退屈と感じただろう百合は、不機嫌な声音が言う。

一方、藍はといえば、家を出たあたりから仮面をしていて分からないが、それでも機嫌がいいのは足取りから見取れた。

「まずは私お勧めの飲食店です、それからカラオケに新しいお洋服を一一つて待つて下さい、帰らないでえ！」

妄想に耽つて自らの世界にトリップしていた藍を放っておき、先程よりも不機嫌さ割り増しの顔をしているだろう百合は踵を返して元の道に戻つていたところだった。

後ろから胸に抱きつかれて、腕によつて締め付けられた胸が苦しそうに見える。

幸いまだ商店街の入り口なので人影は少なく、それを目撃する人は残念ながらいない。

「藍、飲食店は私もお腹が空いているからいいとして、この調子だといくつかものお店に入りそうだし、命令するわ。」

一緒に行つてあげるお店は、一つよ、後十秒で決めなさい」

「お洋服でお願いします」

「はいはい、貴女は私を着せ替え人形にするのが好きね」

「百合は本当に可愛らしい容姿をしていますので、どんなお洋服にするか迷うんですよね」

皮肉を込めて言ったのだが、藍は違った意味を捉えたようだ。

最もところで、藍が選んだ服は大体の確立で却下されている。

「まあ貴女が楽しんでるのなら、別にいいわ……それじゃ藍の言う飲食店に行きましょう」

昼食はレストランで Pasta ものを頼み、ドリンクバーはなしとい
うわけなしの節約していく。

両親が不在の神代家では、月々に送られるお小遣い——もとい基生活費
をなんとか節約して暮らしている。

それは極普通の学生の、寮暮らしで払っている金額のそれ二人分
なのだが、何分百合はお金に対して執着心がない、というより多く
使うのを良しとしていない節がある。

食事も控えめだし、百合の為に少しばかり多くしてあるだろうお
小遣い分のお金は朝食に消えている。

たまに、藍がそのお金を使って百合自身の洋服を買っていたりす
るのだが、それは稀の話。

閑話休題。

藍はお店には寄らないから、という理由で覗くだけという形の下、
百合を各地へと連れ回していた。

骨董品だったり、期間限定の食べ物だったり、ひっきりなしにあ
ちこちへ連れ回されるハメになりそうだったが、途中で「……藍」
と不機嫌さ急上昇した声で言うと、すつと洋服店へと向かっていく。
洋服店内には、下着から何まで色々なものを取り扱っている女性
専用のお店で、恐らくは学生の大半をここを利用しているに違いな
い。

そんな中で二人が（一人が連れて行かれた）のは下着売り場、そ
の途中でご婦人方々が二人に注目していたのは無理もないこと。

一人は絵本から出てきたような可憐な美少女、もう一人は何故か
仮面を付けている長身の麗人（？）。

更には二人共、並々ならぬスタイルをしているのだから声をかけ
る勇氣すら湧かない。

「——百合、こういうのは如何です？」

「だから、私はそういうの付けたくなんだけど……なんならサラシ
でもいいのだけど」

先程から、こういうやり取りをしていた。

麗人が勧め、少女が断る。

傍から見ればどこぞの裕福なお嬢様に、お付の執事がメイドを思
い出すが、そんな人物がこんな普通の店へ来るはずがない。

そして、「藍がこれを付けて下さい」と言つて更衣室へ押し入れ、
何やら梃子摺ていすつているような気配がした後、中から出てきた百合を
見て絶句する。

透き通るような白い肌に、黒く艶かしい下着、白と黒のコントラ
ストが神代百合という少女を更なる高みへと昇華させていた。

「……すこしきついわ」

そう言つて瞬間に今度は違う下着を持たされ、中に押し込まれ、
その繰り返しが幾度となく続いて最後には、

「どれが一番着心地が良かったですか？」

「これね、でも少し高い気がする」

という会話が成され、結果的にはその下着一組を買い、次に洋服
店へと行くことに――一般客数人を背後に連れて。

そこから先は、一種のファッションショーに。

主に白と黒の配色が成された洋服を出していくが、それでも色々
なものがある。

中でも店内を騒ぎ立てたのは、ゴシッククロリータの服であつたこ
とは店内だけの秘密になっている。

「……疲れた」

「お疲れ様です、百合。」

今日は私にとって掛け替えのない一日になったことは間違いありま
せんッ！

「貴女はいいわね、そんな性格で」

「そうですね、こんな性格のお陰で百合に色々なお洋服を着せるこ
とが出来ますから。」

それに私以外の頼みではこんなこと、聞いてはくれないでしょう？」

あくまでもなこやかに言う藍に対し、百合はそのまま目もくれず歩いていく。

それは無視だとか、さういう理由ではなくてただ単純に疲れているだけ、それを藍も分かっているから荷物は自分で持って黙って背後で歩き続けた。

太陽も沈みかけ、時刻は午後五時あたりを示している。

百合と藍、二人は橙色に輝く太陽を背にしながら帰路の途についている。

その途中で、百合は不意に口を開く。

「……………それで、その後の動きはどう?」

「 ”天使” と ”使途” の動きが確認出来ました、 ”神” は以前姿すら現さない様子です」

間髪なく答えると、百合は何か考えるように立ち止まった。

藍もそれに習って動きを止めると、百合の言葉を待つかのようぴたりと静止したままだ。

「 ”天使” と ”使途” はそのまま放っておきなさい、どうせ雑魚よ。ただ、 ”神” がまだ動かないってことは、私達も動く必要はないわ。貴女はそのまま ”神” の監視、それから兄さんの護衛を続けなさい」
有無を言わさぬ威光を放ちながら言う百合に、ただ藍は頷くだけ。
更に百合は言葉を続ける。

「藍、今日は良く気を抜かずに警戒出来たわね、おかげで少しは気楽に買い物が出来たわ。」

私が今日、途中で帰ったりしなかったのはその褒美だと思いなさい」
「……………ありがとうございます!」

言葉の途中でそのまま進んで行く百合に、藍は喜びを露にしながら後に続いていった。

時は少しばかり経ち、時刻は丑三つ時を迎えている。

その晩、神代家では一つの部屋に少女が二人。

その部屋では明かりは消されているが、机の上にある蝋燭が束の間の明るみを生み出している。

影が陽炎のように蠢く中、片方の少女が口を開く。

「防音の魔法を張ったわ、これで兄さんにも聞こえないでしょ」

百合の指先は仄かに黄金に輝いていて、それは円を描いて終わると同時に消える。

その横では先程まで一緒にいたはずの藍が正座している。

藍は、「ありがとうございます」と言い、続ける。

「お疲れのところ、本当に申し訳ありません。

実は今日、もう一つお伝えしたいことがあります」

正午のときのような、和気藹々とした雰囲気とは一変、今度は物静かにしている。

その様子を見ようとせぜずに、「続けて」と促す。

「でもどうでもいい方と肝心な方のどちらを先にしますか？」

どきどきわくわくとした顔でいる藍に、ブリザードの眼差しが貫く。

「藍」

瞬間、藍の顔が急に青く変化していき、その様子はさながら百面相の様。

「二つも報告し忘れていたなんて、”常に周囲の警戒を怠るな”をしっかりと出来ていたから褒めたものの……その他が疎かになっていたら話にならない」

「……面目次第ありません」

しゅんと俯く藍、この場合の藍は本当に反省していると知っている百合は溜め息をついて更に話をするように促す。

「今回の罰はまた今度に回しましょう。」

それで、まずはどうでもいい方から聞きましようか」

「一々罰だの罪だの言っていて話が進まない、ならばそのことは暇が出来た時に問うこととして、今は話を先に進めるのが先決である。」

何しろ、百合は眠いのだから。

「はい……どうでもいい方としては、もうすぐ……四月の終わり頃に学校の方で一年生から三年生での合同演習が行われるんです。」

内容はその日決まるのでまだ分かりませんが、ただ魔法を使った実戦演習だと思っはいます、例年そうでしたので」

「それで？」

「百合に……一緒に出て欲しいな、なんて……っ！」

本日三度目の凍える眼差しを受けて、姿勢をこの上なく素早く正す。

目は四方八方に泳ぎまくってはいるが。

一方、藍を睨んだまま百合は腕を組んで音がなるように指で音を刻む。

それが暫くして、腕を組むのを止めて藍と視線を交わす。

「それで私に入学しろ、と？」

勿論、百合が学校に入らない理由、そして入れない理由は熟知している。

しかしそれでも、引けない理由が藍にはある。

「はい、私も今年で高校生活最後の年になります。」

出来れば、最後の年くらいは百合と一緒に学校生活を楽しみたいのです」

「それは私の為、じゃくて？」

「はい、私の為にです」

そこまで話して、再度百合は黙った。

藍はさつきとは違う、怯んだ表情ではなく、決心の固まった顔をして言葉が紡がれるのを待っている。

それが一分程して、ようやく口を開いた。

「分かったわ、私も兄さんと一緒に登校するのを楽しみにしたことがあったしね」

「ではっ「待ちなさい」……はい」

「仮に私が入学すると、色々と弊害が起こってしまうのは藍も分かっているでしょ？」

藍が頷くのを見て、話を続ける。

「まず第一の私の魔法よ、私は魔法陣なんか使わないからあそこでは良い意味としても、悪い意味としても捉えられてしまう、それは今後に支障を来たす可能性があるから駄目。」

二つ目に、私がいっつも学校には行けないっていうこと、家事とか買物もあるし、更には体調の関係もあるわ……だから学校へ行く時間なんて滅多にない。」

三つ目に、私が色々と手続きをしないといけないってこと」

三つ目の宣言を聞いた瞬間、藍はプツと笑い出してしまった。

それに対してイラツとしたのか、百合が魔法を使ったのは一瞬の出来事。

藍が逃げる準備をしていたのにも関わらず、そのまま氷付けにされてしまう。

現代の魔法では到底使用不可能なもので、名をいつか訪れる眠りの時という魔法。

氷に包まれた対象物は、否応なくその細胞一つ一つの動きを全て凍結させられ、あたかも氷河期に偶然氷に包まれていたマンモスのような状態に陥る。

或いは細胞、細胞は氷が解けると同時に再度動き始めるというが、この魔法はそれに近いものがあった。

その様子に、百合は満足したのか、指を鳴らすと氷はそのまま砕け散り、冷気と共にどこかへ消え去った。

「ふふっ、氷の中の藍、そのままどこかの博物館にでも出してみようかしら」

薄く不気味な微笑を浮かべる百合に、藍は本気で怯えていた。

藍がこの魔法をくらったのは、何も今回が初めてではない。

以前にも、百合を同じ様に嘲笑（？）し、怒らせてしまったことが確かにある。

その時には、百合が直々にその様子を写真にとって藍に見せたのだが、その時の様子は藍にとってトラウマものだった。

なにしろ、怯えた表情で固まっている自分が、自分の知らないところにいるのだから。

藍は、自分が再度犯した過ちを悔い改め、今後はもうしないように誓った。

――今度は上手く逃げるように頑張ります、と。

「……その表情、もう一度……うっん、今度は燃えているのに火傷はしない魔法でじっくり」

「ひいひいひいひい……っ!?」

部屋に防音の魔法が張つてあるのも考えずにただ藍は悲鳴をあげた。

今度こそ、藍は誓った。

――今度からは顔には出さないようにしよう、と。

「――それで、次の話に移りましょうか」

もはやシリアスの欠片もない雰囲気だが、百合がそう言う途端にそうなってしまうのだから不思議なもの。

その空気を感じて、顔が恐怖のまま固まっていた（二度目の誓いもバレた）藍は気を取り直して顔を引き締める。

藍は一旦気を落ち着かせてから、話始めた。

「実はつい最近、軍の魔法直轄の上層部に動きがありました。

五賢人の一人が直々に軍を動かしているみたいで、エリート揃いの少数精鋭でもって何かをするみたいです。

目的は大まかに二つ、一つは要人の暗殺もしくは拉致だと推測しています」

その報告を聞き、百合は黙る。

というより、何も言う必要などない。

例え軍がこの家に攻めてこようが、ミサイルを撃つてこようが家とその中は何ともないからだ。

先の魔法いつか訪れる眠りの時を使えば核ですらこの家を傷つけることは出来ない、そういう魔法を有している百合からしたら、軍隊が攻めてくるなどどうでもいいことだ。

「それが何時いつになるか分かりませんし、私もいつも二人同時には護衛出来ません。

ですから百合には神代真の方をお願いしたいのです」

藍の言いたいことはなんとなく理解した。

つまりは神代真と友達、自分はどちらかしか守れないから百合にはいつも一緒にいる真を守って欲しい、ということだ。

人魔学校への入学を推したのもそれが関係していないとはいえない。

だが、それがどうしたのか、と百合は思う。

「藍、貴女の言いたいことは分かった。

でもね、勘違いしているようだから言っておくけど、もしもその軍隊とやらが来たとしても、私にとってはどうでもいいことなの、そのことには兄さんの友達が死ぬことも含まれてる。

それに兄さんなら、軍隊が来ても軍隊ぐらいならなんとか出来るでしょう」

「ですが、もし神代真がお友達を助ける為に軍隊と激突したら、不慮の事故が起こるかもしれない」

「その為の貴女でしょう、藍が助ける対象を兄さん一択に考えれば危険も何もありません」

それは、藍のことを信頼しているからこそその言葉。

藍はそのことを理解し、信用と信頼を寄せてくれている百合に報いたい気持ちではあったが、それでも己の気持ちよりも優先すべきことがある。

「確かに、それで神代真は安全でしょう……しかし、神代真は確実

に心には傷を負うことになるでしょう」

「続けなさい」

「物事にはどうしても詰められない一手があります、それは個人ではどうにもならないもの。」

ですが別の駒を使えばそれも落とせます」

「……フフ、私を駒と呼ぶようになるとは、いいご身分に成り遂せ
たじゃない……藍」

「それについては謝ります……ですが、それとこれとはまた別の話、
今は私が罰せられることよりも、神代真の身体と、心を守る方を優
先します」

「……いいわ、貴女の誘いに乗ってあげることにするけど、その分
しっかり働いてもらおうわよ」

「心得ています」

これで、今日の話は終わり。

百合も藍は一段落した話に、肩の荷が下りたようにふうと息を吐
く。

やるべきことは大してない、百合が入学し、その後に待ち受ける
事柄に対処していくだけだ。

藍はそれについていくだけ、特にやることはないが、その分短時
間にやることは濃密なのだろうと予想していた。

それと、百合が息を吐いた要因にはもう一つある。

「ねえ、藍」

再度、凍えるような眼差しに睨まれ、藍は動きを固める。

そして思い出したことが一つだけある、それは――

「今日の買物の帰りに、私は貴女を褒めたよね？」

良いことをして褒めたのなら、悪いことをしたら………お仕置き
があるのは当然だよねー？」

「ひいつ!？」

その瞬間に、強張る体がまるで自分の意思ではないかのように、
脱兎の如く駆け出す。

それも、無駄なことではあったが。
「逃げてても無駄よ」

次の朝まで、鬼島藍は氷に包まれていた。

六話 少女と従者の相互関係（後書き）

これでプロローグの位置する部分の話しは終わりです。

次から本格的に話しが進んでいくつもりなので宜しくお願いします。

一話 和解は笑いと共に

魔法は、魔力と言う人間に宿る生命力を転換し、それを自然に浸透させ馴染ませ、自らの力が浸透した場の、自然の力を利用するもの。

火、水、雷、風、土、光、又は影。

自然は大まかにそれらで出来ている、自然で分からないのであれば、大自然、と言った方が正しいのかもしれない。

そして、それらを扱うもののことを魔法使い、という。

魔法使いの個々の能力は一定のものではない、血統、突然変異、理由は大小様々。

なれど、それらには決して平等というものはない。

五賢人、というのはそうした個々としての能力が問われる中で勝ち残った五人の強者のことだ。

軍事的に、経済的に、それらは確かに影響力がある。

何せ一度逆鱗に触れば辺りは焦土と化すであろう、人間爆弾なのだから。

それでも一定の権力だが。

魔法は世界に浸透しつつある、それは人間が魔力を浸透させるように、確実に這い寄ってきている。

窓から朝日が差し込む、外では小鳥が朝の訪れを待ちわびていたかのように鳴いている。

今日という素晴らしい日差しが差し込む中起きられるのは、日々が平穏な証であるだろう。

偶には雨の日もあるが、それはそれで風情がある、のかもしれない。

雨があるからこそ、潤う場所がある、日差しを素晴らしく感じられる。

そしてリビングからは毎日嗅いでいても尚、飽きさせることのない仄かな甘い香りが漂っている。

その匂いの下へ向かうべく、自称普通の高校生、でも体力には自身ありである神代真は今日も朝のジョギングをする為に布団をどかし、起き上がる。

――はずだったのだが。

「……重い」

「あー！ 女の子に重いなんて言うなんて兄さん酷いっ！？
こうなったら、もっとぴつたりくっついて離さないもんっ！」

もんっ、じゃないと言う前に全体重を十六歳とは思えないその豊かな胸に乗せ、ボディプレスをかます妹――神代百合によって阻止された。

世界中の男ならば、今ここで歓喜するだろう、色々。

だが、百合は妹だった。

「……百合、それは勘違いだ。

重いと言ったのは何かが乗っているからであって、それが例え本であれ、何であれ、重いと言ったはずだ」

そもそも、よく気配も感じさせずに忍び込めたものだ、と思うのだが、今は生憎とそう言っている場合ではない。

こうした場合の百合の反応は、言い方は悪いようだが、面倒なのだ。

「重い！？ 私の想いが重いつて……っ！？」

私はこんなにも想っているのに、酷いつ、酷いよ兄さんっ……！」

ほらこうなつたと言わんばかりの真に、尚も下着姿で誘惑してくる妹。

(……下着姿?)

百合は普段から家の中では全く下着を付けないことで真は認知しているのだが、どうやら今日は少しばかり趣向を変えて攻めてきているように思える。

確かに、男ならばその男の腕でも埋まっ^つてしまいそうな胸の中に顔を埋めてみたいという衝動に駆られるかもしれないが、如何せん妹に欲情するなど道徳に反する。

それに、もし一度欲情しようものならば、一日の大半を共にする少女と同じ家にいるのだ、間違いはいつ起こってもおかしくはない。真は、確かに世間から見ればシスコンというものに見られても仕方ないかもしれない。

だが、どこに自らの妹を愛さない兄や姉がどうか。

親の愛も碌に受けず、床に臥せって普通の生活すらしつかりと送って来れなかった妹に、多少過保護な状態にあっても不思議はない。そう、信じなければ過ちを犯してしまうから、真は普通でいなければならぬ。

「兄さんっ！」

聞いているの、聞いてないの、聞いてないなら私の命令をきけー」

横暴な妹君は、そんなことを知ってか、攻めの手を一向に緩める気配は微塵もない。

寧ろ、現在のところで言えば、胴体に抱き枕状態で抱きつき、足を絡めてくる辺りもはや冗談では済まないレベルなのかもしれない。真の胸板によって押されている百合の胸の、北半球がブラジャーからはみ出して今にも零れそうな程に揺れては擦りつけられている。「百合、分かったから……頼むからそろそろジョギングに行かせてくれないか。」

話ならまた今度聞くから、な」

「そんなこと言って、どうせまたはぐらかすつもりなんでしょ」
口を尖がらせてすねる。

そんな百合をどうしたものかと考える、最近では年々様々な対応

をされていてマンネリ気味なのは否めない。

そんなマンネリ気味なのを解消する為か、百合が下着姿という珍しいものを見せてくれている。

目の保養ではあるが、如何せん朝なので色々と危ない、危なすぎる。

「百合、そろそろ……どくんだ」

男の朝といえ、それは他人には見せられないものがあるもの。

それに現状でいえば、百合の胸が押し付けられ、腰の辺りは危ない場所に近づきつつある。

「んふふー、兄さんってば……何をそんなに動揺してるのぉ？」

……あら？ あらら、ふふっ、兄さんのえっちい」

「……っ！」

例え姉妹だろうと、それはまずい。

どうにかしてこの場を退けたいのだが、その場合は強行突破を講ずる他ない。

だがしかし、問題はその後百合がどれ程不機嫌になるかだ。

「兄さんってば、私の下着姿を凝視するなんて、そんなに見せて欲しいなら私はいつでもいいのに……」

頬に手に添え、ぽつと顔を赤らめる百合。

どうやら真の想像は杞憂だったようだった。

予想の斜め上を行く百合は、そのまま勝ち誇ったような笑みを浮かべている。

心配事が杞憂に終わり、毒気を抜かれたように息をつく真に、百合は吃驚したような声をあげる。

さながら情事を速やかに終えて寝る夫と、その妻の構図に似ていると思っただのは気のせいだろう。

それからゆっくりと引き剥がし、未だ渋り続ける百合を適当に説得してジヨギングへ向かう。

——もしあのまま自分の考えていた通りに事が進んでいたら、自

分はどうしただろうか。

——寧ろ、それを望んでいたのではないか。

そう浮かんだ疑問を拭い去ることは叶いそうに無かった。

学校の校門に着いてすぐに真は違和感を察知した。

違和感、という程真は学校に慣れ親しんでいる訳ではないが、それでも一週間新学期、クラス替えということ踏まえてもなお、余りあるこの浮ついた空気。

何かの催し物か、何やら有名人で来ているのか等という結論のない思いを巡らせているうちに、クラスへ着いてしまった。

中では朝から早く登校する派である竜胆とティアが話し合っている。

「おはよう、二人共」

「あっ、おはようございます、神代君」

「おっはよう！」

淑女らしい丁寧な返事の黒髪の竜胆りんとつに、対照的に元気で活発な赤髪のティア。

普通に考えれば話の噛み合わなさそうな二人だが、恐らくどこか通じ合っているものがあるんだろうと考えている。

教室を見渡してみれば、何故だかいつもよりも教室に集まっている人数が多い気がする。

そんな真を見てか、ティアが口を開く。

「あ、そっか……真君つては転入生だから知らないんだよねえ、合同演習」

「……合同演習？」

言葉の通りに考えれば、それは軍隊やら団体やらが、本来交わるはずのない組と一緒に演習をする、という意味にとれるのだが。

果たしてそんなもので、この空気が出来上がるのだろうか、と思っ
ていると竜胆から説明がなされる。

「合同演習というのは、一年生から三年生までと一緒にチームを組
みまして、深い森の中を抜けるという単純なものです。」

ですが、例年その都度出される課題が難しく、今からそれなりの実
力者と組む約束をして事をしている最中だと思います」

「……ふむ」

「どうやら言葉のままの意味だったらしい、というのは放って置く
問題はその、合同演習とやらだ。」

「付け加えると人数は六人、その中には絶対に他の学年が入ってな
いと駄目、もし入ってないでクリアしても失格扱いよ、まあ例外が
一人だけいるんだけど。」

で、森の中は進むごとに難易度が難しくなっていくから、二年生は
一緒に連れて行ける一年生と、去年クリアした先輩を何とかして自
分のチームに引き込もうとしてるってわけよ」

「なるほど、それなら三年が多い方が有利なんだな」

クリアした人数が四人ならば、それだけで合同演習とやら簡単に
クリア出来る。

合同演習の意味はないが。

「それがそうでもないのよ、ルールとして三年生は一チーム二人ま
で、これも失格の対象ね。」

「だって強い人が固まったらそれだけでずるいでしょ、他のチームに
入る三年生もいなくなっちゃうし」

「だがそれだと、各学年にあぶれる人が出てくるんじゃないか？」

「それも合同演習の面白みと言われています、戦は始まる前からが
勝負だ、というのをモットーにしているらしいです」

自らの部隊強化もまた、自分次第ということだろう。

「どれだけ優秀な部下を引き入れるか、又は優秀な指揮官の下に入
れるかどうかの人間を見る目を問われる。」

一年生は上の学年の魔法を見ることが出来、二年生と三年生は利

益はないが、見せ場というところだろう。

「更に付け加えるとね、同じ学年の生徒は、同じ組の生徒同士で組まなきゃいけないってことになってんの、ややこしいけど一応クラスの親睦も兼ねてるって感じ」

「ふむ、大体理解した。」

それで、お前達は誰か組む人は決まってるのか？」

こういう場合、目的達成よりも親交を目的としてチームを組むのが世間の女子学生だか、如何せんこの生徒は少しばかり感覚がずれている感じが否めない。

集団意識、というべきだろう、この場合。

群れの中で生き残る為には必要なことだと割り切るのは簡単だ、だがその中で個を生かしたり、個を貫き通す力を人間は時として要する。

それは学生の間でも、社会人になってからもまた然りだ。

「勿論、そんなのその場任せに決まってるじゃない！」

——個性的過ぎるのも、問題だ。

「私はまだ決まってますせん、元々私はティアちゃんや竜也君みたいに体力がありませんから、誰か力のある人と組みたいというのが本音です」

竜胆は至って普通？の女子高校生みたいな感性を持っているようだが、その場任せの行き当たりばったりではなく、自らも力を貸そうとしている意思を感じられる。

ここまでの話の流れから推測するに、その合同演習というものは近々行われるようだ。

「真君は……まあ、転入したばっかだから一年生と三年生には心当たりないよねえ」

「そうだな、俺の場合はまあ……どこかに入れてもらえればそれで良しとしておこう。」

それとティア、先ほど他の学年がチームにいなければいけないという話で例外がある、と言っていたがそれはどういう意味なんだ？」

そのことについて聞くと、ティアは「あー……」と言いながら頭を掻いて渋る。

「その人はまあ、その……その人はなんていうか、アレな人でさ」彼女の性格とは反して、今一要領を得ない話し方をする、余程語りたくない部類の話なのだろうか。

そのことについて、ティアはあまり触れたくないようだからと、竜胆の方に視線を向けると苦笑して誤魔化す。

(……余計、気になるんだが)

結局、そのことについては聞けず仕舞いのまま朝の時間は終わりを告げた。

「神代真！」

昼休み、それは学生にとって至福の時間だ。

勉強中が五十分、それが四回続く地獄の後に待つ、オアシスだ。

「かーみーしーろー！」

その時間については、男が何人集まって猥談しようが、女が幾数人集まり囲み、恋話に熱中しようが自由なのである。

重ねて云う、昼休みとは、自由な時間だ。

「まあーこおーとおー！」

「さあ、まずは昼飯を食べよう。」

竜也もティアも竜胆も用意はいいな……走って行くぞ」

三人が弁当を掲げ、同意すると同時にそのまま駆け出す。

後ろで「ええっ!？」と驚いたような悲鳴を上げる天保山こと背の小さな金髪ツインテール、ミラ「エクセリーズは悲しく吼えていた。

「……撒いたか」

「『撒いたか』、じゃあないわよ……あの場から退散する意思を感じ

じ取れた私達も私達だけど、理由ぐらい話してくれるんでしょーねえ？

あの子、お金持ちの子なのよ、一体どれだけの子があの子の家柄気にして話しかけないでいると思ってるのよ」

爆発したらどうするのよ、と呟いていたがそれが一番の理由になるだろう。

だが、それが一番であっても主な理由ではない。

それと、言いたいことが滅茶苦茶だということは本人は理解しているだろうか。

「俺達学生にとつては、昼休みは大事にしなければならぬ時間だとは思わないか？

先人は言ったはずだ、時間は有限であると」

「あの子との会話が無駄って言ってるのがすごく可愛そうなんだけど……」

「確かに」

「少しぐらい話しているぐらいの時間なら……」

どうやら一言も話してあげないことが可愛そうらしく各々が何かを言っているが、「爆発」とだけ呟くとそっぽを向いた。

お前達の方が余程酷いぞ、とは言わない方が華である。

それに、真にも考えは少しあった。

「確かにお前達の言うとおり、あいつの話を聞いてやるうとは思ったださ」

竜胆が「では」と今か話してみても、と続く前に語る。

「俺があいつのことが嫌い、と言えばそれで話は終わるがそうじゃない。

俺はあいつのことは嫌いじゃない、寧ろ個性的な奴として好感は持てる……けどな、百合を危険な目に遭わせたというのは、正直許せる話ではないんだ」

「でも、それは……」

「それは？」

それはあいつが魔法を扱うのが苦手だから、それでも頑張つて魔法を使えるようになったんです、ということか？

冗談じゃないぞ……俺が魔法使いではなかったら、あそこで俺と百合は爆風によつて死んでいたかもしれぬ。

それは結果的にはなく、その過程が問題なんだ。

魔法が使えないのならば、魔法を使うべきではない、ましてやあんな人が密集している場所で使用するなんて持つての他だ」

その時、校舎の影の方でガサツと音がして、金髪ツインテールの片方が去つて行くのが見えた。

当然、それは教室から真達を追っていたミラである。

先の話聞いていたのだらうということは容易に想像が出来る。

それを見ていたのは真だけではなく、三人ともやってしまったという顔をしている。

「……真君、後で謝つた方がいいんじゃない？」

「そうですね、ここは男の子として、やっぱり……」

「いや、俺は謝らないでいいと思うぜ」

真の言葉がミラを傷つけたことに対し、ティアと竜胆が誠意を示すべきだと言つたが、それに対して以外にも竜也が反発した。

勿論、自分の意見に反発されれば敵対心が生まれる。

「……竜也」

現に、仲間だと思つていただらうティアは、おふざけではない敵対心をむき出している。

「俺は間違つたことは言つてないはずだぜ。」

確かにこの魔法学校の中で、唯一まともに魔法を行使出来ないという立場を考えれば、今の発言を聞いたら傷つくかもしれぬえ、立ち直れないかもしれぬえ。

でもよ、あいつが頑張つた結果として人が死んじまうなら、どつちにとつてもいい話じゃねえだらうよ」

「それはそうだけど……だけど、それでもそれを認めたら……やっぱり駄目ですよ。」

だって私達、クラスメイトなのよ？」

竜也の考えも、ティアの考えも、概ね理解した。

危ないと称されるもその行為が看過されてきたミラの魔法の暴発、それが真という魔法をあまり使わない人間が入ってきたことで、竜也の考え方が少しばかり変わった。

それと、ティアの意見は穿った見方をすれば正論を述べるだけの解決策も無い絵空事だ、だがそれでもクラスメイト、つまり仲間を大事に想う心は失くしてはいけない。

「竜也、ティア……二人共、ありがとう」

唐突に、そう言われて二人共きよとした顔になっている。

竜胆もまた、「え？」と声に出していた。

「ミラの爆発は確かに看過出来ないことだ、百合が巻き込まれたということに対しての怒りは少なからずある。

だがそれでミラを切り捨てる、というのもまた看過出来ないことだったな。

だからこう約束しよう、次にミラから話しかけてくれば、俺はあいつに謝る」

それが、どちらにとっても良い結果になるはずだと思いたい。

先程まで呆気にとられていた二人は、すぐに言葉の意味を理解し、顔を見合わせた。

「すまねえ、少し感情的になり過ぎた」

「私も……ごめん」

誰かに素直に謝ること、それは簡単で難しいことだ。

意地や矜持プライドが行き過ぎた場合、それらを成すことは容易ではなくなる。

人はそうした中で、貫くべきものと、そうでないものを見極めていかなければならない。

と、その様子を見て笑うのを我慢していたのが約一名。

「ごっつ、ごめんなさい……竜也君と……ティアが……な、仲直りして……」

普段からの二人の争いを見ていれば、確かにおかしな光景ではあるのだが。

(それは空気を読めていないだろう……)

「な、何言ってるんだ竜胆！」

誰がこんな奴と仲直りなんてするかっ！」

「そうよ、だーれがこんな考えなしの直情的で考えなしの馬鹿でアホな考えなしとなんか仲直りなんてするもんですかっ！」

「てっ、てめえ……今考えなしって三回言っただろ！」

考えなしってのは、お前みたいな奴のことを言うんだよ、もう少し真の言うこと理解してから喋りやがれ、この考えなしが！」

「……言っただわねえ！」

今日という今日は許さないわよ！」

「あああ……わ、私のせいでこんなことに……」

(本日も晴天也、本日も晴天也)

真はその光景を見て、そんなことを思っていた。

結局というべきか、時間がなかったというべきか、六時限目の現代国語を終えるまでミラからの接触はなく、いつも喧しかった授業中も今日に限って言えば物静かだった。

たった一週間で真が静かに聞こえるぐらいのものなのだから、さぞや元々同じクラスの奴らはこう思っただろう。

嵐の前の静けさか、だと。

その嵐の元凶は、帰りのHRを終えても一向に帰る気配はない。

真が一人きりになるのを待っているということは、すぐに分かること。

竜也達には大丈夫だ、という意思だけ目線で伝えて、一人で人気の無い場所へと移動することにした。

その場所は例によって、中庭のいつも昼食を摂っている場所。そこに着く途中、後ろでは度々足音が消えたり擦ったりしている音が聞こえた。

「もう、出てきて良いぞ」

寧ろさっさと出て来い、というのは言わなくても伝わってくれていると嬉しい。

校舎の影に隠れていたミラは、躊躇いを見せながらも姿を現し、真の前までやって来る。

「……神代真」

「何だ、ミラ＝エクセリーズ」

「あの時はすまなかった、お前の妹を危ない目に巻き込んでしまった」

「……そのことについては元から許す、というよりはどうでもいいんだ。」

だが百合にはいつでもいいから一応は謝ってくれないか」

あの爆発程度ならば、別段真は死にはしないと考えていた。

頭を伏せるだけでも火傷を負ってでも命は助かった、全速力で逃げれば助かったかもしれない。

だがあそこには百合がいた、そのことについては真が関与する話ではない。

「あの子には今度、直接謝る」

「そうしてくれ」

いつもは元気がいい――威勢がいい――ミラも、こういった場合ではどこかから借りてきた子犬のように大人しい。

それが余計に、彼女が謝罪について誠意を見せているとも言えなくはない。

もしもこれが演技だというのなら、彼女は劇団にでも入った方がいいだろう。

「なあ、もう少しだけ……話してもいいか？」

「ああ、構わない」

真としては、これで話は終わりなのだが、彼女の方はまだ話があるようだ。

だがそれでもミラは一向に話しだそうとしない。手を交差させたり、足をもじもじさせたりと乙女？らしい行動を見せる。

「お前に聞いていいのか分からないのだが――

お前の妹は何者なのだ？」

意味が、分からなかった。

「……………は？」

恐らく今世紀最大の呆気にとられた声、というものをしたと真は自負している。

真とて、今まで生きてきたまだまだ短いだろう人生の中で様々な本を読んできた。

先人の深い思想や理念を読み解き、それを自らの人生に加算していく、新しい概念や思想を知った時に人間は一步、また一步と新たな思想を生み出していく。

シェイクスピア然り、偉人の言葉とはそれだけ尊大なものであると、真は考えている。

そういった考えを大事に考えている真でさえ、理解不可能な事態、事柄。

その不可解な難問を解くこともまた、楽しみである真はミラの放った言葉について考える。

まず第一に、何故妹について聞くのか。

第二に、何者なの、という言葉についてだ。

ミラと百合との間には接点がある、ということは真は知らない、知らないだけかもしれないがそれでも記憶の上では確実に知っていないことだ、つまり何故妹なのかということについては考える必要

性が欠ける。

そして何者なのか、という問いはそのままの意味では百合が何らかの行動をミラに見せ、それを訝しんだミラが本人に問いかけるのを良しとしなかった為、兄である真に問うたということだろうか。

(……駄目だ、明らかに情報が不足している……ミラは何が言いたいんだ!?)

ミラの頭がアレだと仮定しても尚、余りある情報不足。

(まさか、百合は俺の知らない間に特殊作業員にでもなったというのか……駄目だ、意味が分からない)

どれだけ考えても答えは迷宮入りだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

そして、真の出した結論は、

「お前が何を言っているのか分からない、もっと丁寧に話せ」

とりあえず詳細を要求することだった。

「あ……えと、その、なんとというか……」

まさかミラが百合の魔力量についてのことですべて渋っているなど真が知るはずもなく、ただミラが話し出すのを待っていた。

とりあえずは一旦のところ、思考を止めて次のミラの発言に対して備える。

「……まず、聞きたいことがあるんだが」

「構わない、話せ」

「……私のことを、覚えているか？」

またその話か、とは思わない。

二度目ではあるが、ミラと以前接触があったというのなら、それはそれでいい。

「いや、前にも言ったと思うがお前のことについての記憶はないな
ここであると言ってもその記憶がない以上はいつか墓穴を掘ることとは間違いない、ならばここは正直に言う方が正解だ。」

その言葉を聞いたミラは心底がっかりしたような表情をしていて、深く肩を落としている。

真自身、記憶がないというよりも該当する事柄が当てはまらないと言った方が正しいように思っている。

更に詳しくすると、心当たりがあり過ぎてどれに当てはまるのかさえ分からない。

「覚えてないなら別に構わない……それで困るって訳でもないからな！」

「だが、お前と俺は会ったことがあるんだろう？」

「いいんだ、お前には特別恨みがある訳でもないんだ。

寧ろお前には転入早々迷惑をかけたと今は思っている……すまなかつたな」

ミラは謝意を示す為ふかぶかに深々と頭を下げる。

「頭を上げる、俺は別に怒ってないさ。

俺は多少だが、お前のお陰で竜也達とも友達になれたと思っている。だから……もう一度言うぞ、友達はいらないか？」

確かにミラのあの一件で竜也が寄ってきて、ティアがついてきた。竜胆はそのままで友達にはなれたとは思うが、それでも今以上の関係にはなっていないかつたはずだ。

そう出来たのは、紛れもないミラのお陰と言えるのだろう。

だから真は感謝こそすれ、怒ってはいないし、ましてや謝罪が欲しい訳でもなかった。

ミラは、ゆっくり頭を上げて言った。

「いる」

「なら、俺達はもう友達だ」

真の差し出した手をしっかりと握る。

普通ならば趣味が合ったり、共通の友達がいたり友達宣言などなくてももいつの間にか友達になっていたりするものだが、それは人によって違う。

ミラは友達か友達じゃないか、そういう分別をつけた方が付き合い易いだろうと考えた末の言葉だ。

「――それで、神代真よ」

「なんだ、ミラ」エクセリーズよ」

唐突に始まった会話は、傍から見れば互いにおかしな呼び方をしていると思われ、指を刺して笑うだろう。

だが、真とミラの間には交わされた約束に、お互いに名前でも呼び合うというものがある。

「ひとつ、私の秘密を打ち明けようかと思う」

「……いいの？ まだ時間はある、判断材料が揃ってからでも遅くはないぞ」

「いや、いいんだ、これは私のけじめと決意だ。」

私は友達を裏切らない、そういう意思の表れだと思ってくれればいい」

真はそれがミラの意味ならば、と話を続けるように促す。

自らの心臓の鼓動を確かめように胸に手を当てて、二、三度深呼吸して話し出した。

「……私は、エクセリーズ家の待望の長女として生まれた。」

私の家は先祖代々大富豪でね、表では優良企業のトップ経営なんてやってけるけど、影じゃ魔法使いの対半数の監視の役目を持つてる。そんな家に生まれたからかな、私はかなりの期待を持たれていた、魔力保有量も並じゃなかったらしい。

でもね、私が始めて魔法を使った日……知っての通り、大爆発。

父は大丈夫だったんだがな、母が大怪我して……それから私は本家から隔離されて育てられた。

今は弟が家督を継ぐって話になってるらしいが、詳しいことはあまり知らない」

「では、あの爆発はわざとではないと？」

「そう、だって真面目にやって爆発なんて笑い事にもならないだろう？」

だから私は馬鹿みたいに大声だして、馬鹿みたいに力んだりして、フリしてるとて訳さ」

「……なるほど」

つまり、ミラは他者から馬鹿にされるのが嫌で、侮蔑の視線だったり恐れて、わざと”馬鹿”なフリをしていると。

そうしなければ、自分でもやっていけないから。

笑って誤魔化して、自ら道化を演じて自分を騙し続けているのか。

「あはは、これでも結構真面目にやってるんだけどね。」

ああいう風に力まなくてもね、勝手に魔力が入っていつちゃうのよ。それなりに苦労はあっただろう、だが同情などしない。

「……それでお前は、ミラは使えるようになりたいのか、魔法を」

「当たり前よ、別に私を見下した奴を見返そうなんて思っていないけど、それでも持っているのに使えないなんてもどかしいじゃない」

報復の為ではなく、ただ自らの為に使えるようになりたいと言うミラの目に嘘の色はない。

ならば、真のすることはただ一つだった。

「……俺は決めたぞ」

同じではないにしろ、真も少しばかり似た様な感情を持っている。

——普通の魔法を使いたい、そう何度思ったことか。

「えっ……何が？」

だから、真は言う。

ミラの為でもない、ただ己の為に。

「ミラ、俺とチームを組め」

一話 和解は笑いと共に（後書き）

次回はこの話の続きです。

二話 チームthe変(前書き)

前回のミラとの会話の続きになります。

二話 チームthe変

『ミラ、俺とチームを組め』、そう言った瞬間からどれ程の時間が経っただろうか。

真としては、ミラは快諾するものとばかり考えていたのだが、現実のところは違つようだ。

偉人の誰かが言っていた、物事とは思い通りにはいかないものと。

時間として、およそ十数分経つただろうか、その間に真は携帯で百合に「遅れるかもしれない、早く帰るように努める」という内容のメールを送っていた。

返ってきた内容は、「分かりました、晩御飯の時間を少しずらします。それと、兄さんは裸エプロンとシャツエプロン、どちらが好みですか?」と書いてあった。

すぐに、携帯を閉じた。

だがメールが返ってきたのは事実であるし、それを見ていないという嘘もつけない。

とりあえず、内容については深く考えずに「普通でいてくれ」とだけ返しておいた。

返信はすぐにきたのだが、読むのが恐ろしく感じ、ミラとの会話を済ませてから見ようということにした。

「……………はい?」

遅すぎる反応に、膝が崩れ落ちそうになる。

「『はい?』じゃない、近々合同演習とやらがあるのだろうか?」

そのチームは六人だそうじゃないか、だから、俺と組めと言っている」

言葉の意味が分からない訳ではないのだろうが、顔が信じられな

いと言っているのは確実だ。

「だって……私、だぞ？」

「そうだ、お前だ、ミラ㊥エクシリーズ」

「大富豪の娘の、私をか？」

「一般人の神代真だ、宜しく」

「爆発する、この私を？」

「爆発する前に思い切り敵に向かって投げやろう」

「真のこと、一度でも恨んだことがあるぞ？」

「人間、誰でもあることだな」

「それでもいいのか？」

「構わない、俺はお前を荷物だとは思っていない、しっかりと働いてもらうつもりだ」

「一一ぷっ、はっ、あははははははははは！」

一体、何がおかしいのか突然に笑い出す。

「わっ、わた、私と……こんな風に話しくれる人、誰もいなかった！
ま、まさかこの私を投げ飛ばして……更にな、投げ飛ばそうなどと……ぷっ、あははははは！」

「……ふむ、初めて笑ったな、お前」

思えば最初は怒り、次は投げ飛ばし、それから暗い表情で、学校でも笑った顔など見たことはなかった。

まるで憑き物がとれたかのように笑うミラは、快活な笑顔で。

それは大富豪の娘ではない、ただ世界に一人だけの、ミラ㊥エクシリーズだった。

「あー笑った、凄く笑った！」

こんなに豪快に笑ったのは久しぶりだ、いや生まれてから初めてなのかもしれないな。

つくづく面白い奴だな、真は」

「お前こそ、チビっこいくせによくそんなに尊大な話し方をするな」

「なっ、それがこれからチームになる奴に言う台詞かッ!？」

「ふむ、そうだな……チームだからこそ言える言葉かもしれんぞ？」
「転入早々言っておったわ！馬鹿にしておるのか！」
「……今頃気付いたのか？」
「むきや……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」
「はっはっは！」
「その笑い方が余計にムカつくのだ……！」
「よせ、照れるだろう？」
「褒めておらんわ！」

「……と、お前のせいで本題からずれるところではなかったではないか」

「コホンと咳払いして、今まで高ぶっていた興奮を収める。」

「そのところは大人らしいな、と思ったがそれをあえて言わないのが真クオリティー。」

「なんだ、まだ終わっていないかったのか？」

「てつきり、本題も何も話は終わりだと踏んでいたのだが。」

「違う、言ったではないか……秘密を話すと。」

「私の家の事情は話したが、それは過去話であって秘密ではないからな」

「確かに、秘密という程秘密って訳でもない内容ではあった。」

「ただ魔法使いの監視役が存在があつたということ自体は知っていたが、そんな意味のない監視に何の意味があるのだろうか。」

「（……意味のない役だからこそ、役に立とうと必死なのか、それも役に立たなくなったのか）」

「これ以上は無用な考えと判断し、今はミラの話を聞くことにする。」

「それとこの話は他言無用で頼む」

「それは安心してくれ、俺は例えば拷問されても秘密は言わない主義だ」

「秘密を言ったのなら最後、不必要となった存在は消されるだけだ、」

それも”死”という拷問からの開放という考え方もあるが、それは意味のないことだと真は思っている。

「別に拷問されてまで……こほん、改めて言うとな、私は他者の魔力を”視る”ことが出来るのだ」

「魔力……見る？」

「うむ、その者の魔力の量、質、色、形、様々な情報を視ることが出来るのだ」

それが本当ならば、破格の力だ。

真自身、そういったものを見ることは出来ないのだから、その能力の有用性は分かっているが考えうる限り、それは脅威のものといえる。

そんな考えをよそに、ミラは言葉を続ける。

「私はこの能力が、私の唯一の特技……いや、異能だと思っているのだ。」

驚いただろう？

私は基本的な魔法が使えない代わりに、こんな異能を身につけてしまっていたのだから」

「それは生まれた時からなのか？」

「いや、身につけたと言ったであろう。」

この異能は私が始めて魔法を使おうとした時に分かったものなのだ（……なるほどな）

やはり、ミラとは少しばかり境遇が似ているということが分かった。

その方向性は違えど、”普通”の魔法が使えないことと、突発的に発現した能力だということ。

「……それが、お前の秘密か？」

「うむ、そうだ。言うておくが、家族でさえ誰にもいつておらんからな。」

何せ爆発してからすぐに隔離されてしまったからな」

はは、と乾いた笑みだけが残る。

その表情から大よそどんな人生を歩んできたか、分かるつもりではある。

碌に親からの愛情を貰えず、他人から蔑まれて育ってきた、そんな辛い人生でありながら、ミラは尚も笑っている。

「強いんだな」

それが空元気でも、元気でいられるのならそれでいいのではないだろうか。

空元気でも、続ければそれはきっと元気に変わる。

暗い気持ちでい続けたって、それは結局のところ暗いままになってしまっただろう。

「いや、私はそんな強い人間ではない……何度両親を恨んだことが、何度私自身こんな体で生まれてきたのかと……思ったことか！」

人間だれでも生きていれば他人を恨む、憎む、蔑む。

だからそれらが全て、決して悪いものとは言えない、それが人間の定義だからだ。

「それでいいんだろう、人ってのは。」

見返したいって気持ちがあるんなら、それは次に進む為の糧となる」

「それは、そうだが……」

「いいか、魔法って数十年生きる人生の中でのプラスアルファでしかない。

つまり道具だ、道具は使い道で生かすことも殺すことも出来る、つまりはその人の気の持ち様ってことだ」

「それでも、この魔法社会の中では……やはり、差別を受けてしまっただけだ」

魔法を碌に使えない魔法使い、落ちこぼれ、敗者の烙印はどういったところで消せはしない。

だが、それがどうしたというのだろうか。

ただ魔法で勝てないというだけで、別の可能性まで消すことはないのだから。

「ミラ、お前は俺の試合を見ていたか？」

「……勿論だ」

「お前には俺がどういふ風に戦っていたように見えた？」

「私にはお前が、指を出すというだけで意識をそちらに差し向けていたように見えた」

「……それだけか？」

「なら、その解答では五十点しかあげられないな」

「何がいいのいだ？」

「真は、少し息を吐いてからしつかりとミラを見据えて続ける。

「俺があの時、もしも拳銃を持っていたらどうする？」

「それはルールの……」

「違う、そこにルールは関係ない。

「考えるべきはあの場面で、俺が拳銃を持っていた場合だ、お前ならどうする？」

「どうするも何も、持っていないと考えているのだから……撃たれてしまうだろう」

「そうだ、いかに魔法でも拳銃の速度には敵わない。

「そんなものに頼ってどうする、魔法陣を描くスピードと銃を引き抜いて打ち出すスピード、完全に銃が勝る。

「更に言えば、魔法は万人が使える技ではない、そこには個人差がある、メンタル状況に左右される。

「そんなものに何の意味がある、いやないさ……所詮、魔法は魔法、言ってしまうえば学校でのクラブ活動にでも導入された方がいいようなものだ」

「だが、それでも魔法社会というものはそれを許さない！」

「だから、それが間違っているんだ」

「何が間違っている！」

「魔法とは皆が使える訳ではないつ、だからこそ、それを使える我々はその技量を伸ばし、使えない人々の為に使うが当然だろう！それが魔法のあるべき在り方であろう！？」

「完全なまでに、ミラの中では魔法は”良い”存在として認識され

ている。

力ある者の義務感、責任感、それが彼女を魔法を使えないという欠点を更に浮き彫りにさせているのだ。

だからこそ、真はその考えを否定する。

「違うな、魔法は危険な力だ。

例えば俺が、お前に向かって火を起こすとすると……するとお前の皮膚を焼き、眼球を煮る、拷問でもするならば髪の毛を全て燃やし、女性と認識出来なくなるまで、死なない程度に、更に死にたくなる程に炙り尽くす。

誰かむつかく人がいる、魔法を使えばその人の家は全焼する、ただし魔法なので証拠はないから完全犯罪の成立だ。

病院に寝ている人がいる、水を操って点滴に混じって水を入れる、するとそのまま死亡。

同じく病院で雷を起こし停電させる、すると今まで生命維持装置をしていた人達は皆死亡。

——つまり、言っている意味が分かるか？

魔法は人を殺す、殺す為にあると言っても過言ではない程に。

だから魔法は危険なんだ、それが多種多様であればあるほどに危険率も鰻上りだ、そんなものに何の意味がある、どんな意義がある。

魔法に道具はいらない、銃はいるさ、銃は銃刀法違反っていう立派な規制があるから持つ人は少ないさ。

でも魔法はそうじゃない、魔法は万人が持てる殺人兵器だ、それを突き詰めていく先には大量殺人兵器への道しかない。それでも魔法は良いことの為にあるんだってのは、正解だ、大正解だ。

でも、お前の大切な人が魔法で殺されたとしても、お前は魔法が良いものだって言えるのか？」

真は自分でもよく噛まずに話し続けられたものと、自嘲気味になっっていた。

それは真が魔法に対して見てきた存在のあり方であり、魔法に対

しての意見。

魔法が良いものであることには代わりにはない。

例えば酷い火傷を負った人がいる、魔法はそれをなかつたものにする事が出来る、それは”良い”ことだろう。

例えば足を切断されてしまった人がいる、魔法はそれを綺麗にくつつける事が出来る、それは”良い”ことだろう。

だが、物事には必ず二面性がある。

良いことと、悪いことだ。

この場合で言えば真の先の言葉で言う、完全犯罪。

他にもやり口は沢山ある、水で相手の喉を塞いでの窒息死等々だ。

ミラは、その事実を告げられて絶句する。

魔法の底知れぬ悪意、危険性、それがいつどのように明確に浮き出たのかは神のみぞ知るところだろう。

「分かったか、魔法はお前の言うように人は救える魔法もあるさ。それでも魔法の詰まるところは人間性なんだ、そんな魔法を極めたところでのどのつまり、殺人鬼を極めたのと同じことなんだ」

「つだが、それでも人の為になろうという気持ちは悪いものではないだろうが！」

「そうだ、だが世間はそう見てはくれない、強力な魔法は人を助けるのと同時に人を殺すことも出来るんだ。

人間は自分より強いものに恐怖し、それを排除しようとする。

だから魔法を極めたところで何の意味もないんだ、寧ろ大富豪の娘なら医師にでもなつて金を稼いだ方がいいだろう」

「お前の意見は虫食いだらけだ！」

確かに私の理想は今は机上の空論、子供の絵空事と笑われるかも知れない、しかし！

私は誰かの為になれるということだけは否定したくない！

どこかで私のように魔法が使えなくて困っている人がいるかもしれない、だからこそ、私は魔法を使えるようにならなければならない

のだ！」

そこで、一息置いてみる。

ミラの意思是本物らしい、その眼には一切の揺らぎもない。だが真の語った話もまた、真自身の偽らざる意思だ。

(だからと言って、相手の意思を否定する訳ではない)

この話は、言わば忠告のようなものだ、この話を聞いて魔法に対しての見方が変わるようならば所詮はそこまでの奴だったというだけだ。

「あい分かった」

「……何がだ？」

ミラは以前、訝しげな表情を見せている。

この話は、ここで一旦のところお仕舞い、相手の感情が昂ぶり過ぎて感情論になっている。

「お前の意思は理解したってことだ。

魔法が誰かの為になるっていうのもまた偽らざる事実だ……だから、もしかしたらその気持ちを持ち続けていたらいつはその理想が実現出来る、かもしれない」

「……でも、真は真の意見を、意思を曲げないのであるっ？」

「そりゃそうだな、俺の意見もまた偽らざる事実。

だからミラ、勝負をしよう」

「勝負？」

「そう、勝負だ……人生を懸けた尊大な戦いをな」

先程まで昂ぶっていたミラの感情はすっかり収まり、今度は違う意味で訝しげな顔をする。

説明不足だったか、とは疑念に思うもの話を続ける。

「つまりあれだ、お前は俺に、お前の魔法の在り方を納得させられたらお前の勝ち、そうでなかったら俺の勝ちだな」

「それはずるいぞ、それではお前は何もしいではないか」

「そうでもないさ、俺はお前を出来る限り手伝おう、それならフェアだろうっ？」

「う、うーむ？」

大事な部分は手伝う気はないが、と心の中で付け足しておく。

「それで、受けるのか、受けないのか」

「決まっておろう、受ける！」

それでもって真、お前のその意見を否定してやる！」

「そう、その意気だ。まあ無理だろうが、頑張れよ」

恐らくミラは、成長する、そう確信していた真はその手助けをすることにした。

それが勝負事という形、気性の荒いミラならばこの方法が良いと踏んでの作戦ではあるが、それをミラ自身が理解する日が来るのかどうかは分からない。

「さて、それじゃあ話も纏まった事だ。

次に俺達ができるべきことはチームメイト集め、ミラは誰か心当たりないか、変人に」

「ちよつと待てい！」

何だその私が変人だからその他の変人を知っているとか変な理論は！私がそんな奴を知る訳がなかる……う……あー」

突然齒切れが悪くなり、目もあちこち泳いでいる、つまり、

「……知っているんだな？」

その反応は自分が変人だと認めたようなものだろう。

「い、いや待て！」

確かにその人は変人だが、決して私だけが知っている訳では……

——って何で変人限定なのだっ！？」

「あまり魔法を使わない学校の異端児の俺、魔法を使うと爆発するお前。

どうだ、変人の集まりじゃないか」

「そんなドヤ顔して言う程のものではないわッ！」

眉間に皺を寄せて、クワツと怒りを露にする。

そんなに怒る程のものではないだろう、と思う。

「で、その変人は誰なんだ？」

「だから私の話は最後までちゃんと聞けえ！」

……はあ、はあ……何だか、真と話ししていると何故だか急激に疲れる気が、するのは気のせいだろうか」

「それは気のせいじゃないな」

「そこは否定しろお！」

つてまた怒鳴ってしまった、この調子では体力がもたん」

「体力が足りないからだろう、カルシウムもしっかり摂らないと大きくなれないぞ」

「……が、我慢だ、我慢だ私ッ！」

「む、我慢は良くないぞ。」

我慢をするというのはストレスを溜めるということだ、ストレスは心の病気だ、一刻も早く発散するといい」

「お前がそれを言うなあぁー！ー！！」

「はっはっは、全くだな」

「自覚あったのかー！ッ！？」

人間、興奮をすると血圧が上がるしストレスも溜まる。

だがそれでも怒ってしまうのが人間、喜怒哀楽を表情や態度でもって表すから人間なのだ。

それは人間に許された特権か、はたまた枷なのかは分からない。

しかしあるものは使え、あるのに使わないのは勿体無い、そういう風に考えると感情を殺すのは非常に勿体無いことのように思える。感情を出しすぎるのもどうかと思う、真ではあった。

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

そろそろ話を真面目に進めたいのだから、という気持ちを込めた視線を送ると何故か睨まれる。

真自身は何も悪いことはしていない、というのは冗談だが少しば

かりからかつただけ過ぎない。

所謂、おふざけた。^{いじめ}

「お、お前の……せい、だろう」

「ハハハ、キノセイジャナイカナ」

「くっ……も、もう気にしないぞ、ああ、私は全くこれっぽっちも気にしていないんだからな！」

「そんなことはどうでもいい、話を進めるぞ」

いい加減疲れてきた、早く済ませて帰らなければ命がない。

（百合のメールを確認するのは家に帰ってからにしよう……いや、それはそれでまずいことに……）

「そんなことっ……まあいい、それで私の知っている人は、鬼島藍という人でな、三年Dクラスに所属している」

震える拳を無理矢理抑えつけ、毅然として話し始める。

真は自分自身は何も悪いことをした記憶はないので迷いもなく話しを進める。

「ふむ、それでどんな人なんだ？」

この人魔学校では、ひとクラス四十人で五クラス存在する。

先程ミラが言った通り、AからEまでの五クラスで鬼島藍と言う人物はそのDクラスに所属しているらしい。

そして何もAクラスが、又はEクラスが特に優秀という話はない。寧ろ、戦力は一年生での評価を見て平等になっているはずだ。

「うむ、その人はな……なんというか、仮面をだな、付けているのだ」

「仮面を……？」

普通に考えれば、その人は顔に傷を負っていて、それを見せたくないから仮面でも付けているという考えだろう。

それならば仮面を付けているのが変だというのは酷い話だ。

だがミラの場合は最初に与えてくれる情報量が少ないというのは、分かっていたので更に話を促す。

「そうだ、確か真っ白な仮面に筆で書いてような赤い模様があるの

が特徴だったな。

それが変だと思った理由はな、その人が仮面を付けている理由なのだ」

「それは？」

「死にたくないから、だそうだ」

「……は？」

「だ、だから言いたくなかったのだ！」

ほら見る、やはり私が変人扱いを受けるだけになってしまったではないか！」

「いや、待て……何もお前が変人、とは思っているがそれとこれはまた話を別にする」

すると考えは別の方向にベクトルを変えていく。

ミラが「私は変人じゃない！」と言っているのは聞こえないフリ。仮面を取ると死ぬ、それは一体どんな呪いなのだろうか。

否、もしかしたらそれは比喩的な表現で、取ったら死ぬのではなく、取ったその後に見られた顔が、問題なのではないか。

そうならば辻褄が合う、ミラ同様のどこかの金持ちのご令嬢というならば、顔を隠していても不思議はない、はずだ。

はずだ、というのは無論のこと、仮面を付ける方が目立つからだ。(……また、脈絡のない考えに耽ってたか)

何事も深く考えようとするのは真の良い癖であり、悪い癖でもある。

物事には何事も、適度な加減が要求される、それを見極める為にも深く考えるという思考は不可欠、一度奥まで行かなければ行き止まりも分からない。

「……ふむ、それではその鬼島藍という人のところへは明日行こう。なに、この学校はへんじ……个性的な奴が多いからな、すぐにチームは集まるだろうさ」

「あたかもさりげなく自分は変人じゃないみたいなのを言っているがお前も十分変人だ、ああそうだ、そうに違いない！」

「……………」
心外だ、と思うものの、そこで反応しては事実だと言っているよ
うなものだ。

ここは一つ、大人の対応として視線で語ろう。

「何だその『俺は違うんだが』みたいな顔はツ！？」

確かにお前はそんなに変なこととはしていないとも思えなくもないが
っ、でも変人だろうがッ！？」

「心配するな、人間は誰しも変な部分があるさ」

百合にしてやるように、頭をそっと撫でてやる。

「私を子供扱いするなあぁー！」

「……………え？」

「だからその顔を止めるおぉー！ー！」

今日の感想、ミラをからかうのはとても楽しいということ、そして
今日の教訓はミラの話はきちんと最後まで聞こうということだ。

だが、真はこの時知る由もなかった、この後には真に思いもよら
ぬ出来事があることを。

その後、ミラを最初に無視したことを謝ると快く許してくれたこ
とは語るまでもないことだろう。

――会話を終えて、それぞれの帰路につく。

つい先程まで燦々と黄色にと輝いていた太陽は今ももう橙色に変
わり、夕刻であることを示している。

帰宅するということ、気になってメールを確認するとそこには、
「そんな…………裸なんて、えっち」

と書かれていた、それはもう、絵文字や顔文字などなくともどう
いう顔をしながらメールを打っているのか鮮明に想像が出来た。

真の背中には、確かあれは十階建てのマンションの屋上から落と
された時のような冷や汗が出ているのが分かった。

百合はこの手の冗談はあまりしない。

それから慌てて自分の送ったメールを確認し、そこには確かに『普通でいてくれ』と書いてある。

つまりは、百合にとって裸はデフォルトだということだろう。

それを理解した真は、玄関で裸で待機する百合の姿を想像し、それを払うようにいつもの二倍速でメールを打つ、「しっかり服は着ている」と。

メールが画面が送信完了と出るまで待った真は、少しばかり歩みを遅めて家へ向かうことにした。

真が家に着く一時間と少し前に時間は遡る、神代家の中では少女が二人、談話している最中だった。

「あの……百合」

深く深海の底のような瞳と、髪の色をしている少女――今は仮面を外している鬼島藍は引け腰に反対側の椅子に座っている少女に話しかける。

向かい合ったテーブルを挟み、藍に話しかけられた百合は不満そうな顔をしている。

テーブルの上には藍の前にお茶とお菓子が、百合の前にはお茶だけが置いてある。

「何よ、言いたいことがあるのならはっきり言いなさい。」

「……聞くだけだけど」

眠たげな眉を何とか持ち上げている百合は、「聞くだけですかって!?」という藍の心からの叫びを無視していた。

「それじゃあ言いますけど……どうして今日の面談、私が百合の代わりに喋ることになってたんですか?」

不満たらたらな顔で講義する藍。

実はというと、今日は百合が人魔学校へ面接に行ってきたところ

だったのだ。

眠たそうな顔をしているのはそのせいだ。そしてその面接は、普通ならば一対一の面接なのだが、そこで何か藍が問答をするハメになってしまった。

投げかけられた問いには全て藍が答える、もし百合の思っていたことと違えば百合が藍に耳打ちをして正す。

そう、百合は他人と話すのが好きではない。

特に男性と話すのは極端に嫌がる、それを知っている藍だからこそ何も言わずに面接を代わりに受けるといふ学校設立以来の謎の行動を起こしたのだが。

当然の如く、学校を休んでまで面接した藍は理由を分かっているも聞かすにはいられなかった。

「貴女のお願ひ、面接、とう……せん」

もはやしつかりと語る気もないらしい百合は、眼を閉じてテープルに伏せながらけだるそうに言う。

「それは分かって

一一百合ッ!？」

言葉数が少ないのは眠いからだと思っていた藍は、百合の異変に気付く。

そう理解した時には素早く近くの棚の引き出しを開け、数種類の錠剤と水を入れたコップを用意した。

「くっ……はあっ、うう……」

テーブルに付していたのはけだるいのではなく、体に力が入らないから。

今は胸を押さえて丸くなるように痛みを堪えている。

「さ、水とお薬です」

慣れた手付きで手を開かせて錠剤を置き、もう片方の手にコップを握らせるとそのまま百合は勢い良く薬を飲み干した。

「一一はっ、はっ……」

水と共に薬が異に流れ、やつのことでまともな呼吸が出来るようになり、百合は尚も苦しそうに眉間に皺を寄せながらも、背を伸ばし顔を上に向けて気道を確保する。

荒い呼吸が数十秒続いた後、百合は深呼吸を数回繰り返す。

「平気ですか、CPAPはいりませんか？」

「ついで、平気よ……もう、治まったから」

先程よりも血色も良くなった百合は毅然とした様子で振舞う。

本当は相当苦しいはずだ、以前藍が共に病院へ診察を受けに言った時に聞いたのは、発作時の呼吸困難は下手をすれば死に至るというものだ。

それも発作時にはかなりの苦痛を伴うので、先程のように藍が薬を出したり、呼吸補助装置で手助けしなければ命に関わることもあるらしい。

百合が今日まで生きてこれたのは、他ならぬ百合の生への執着心だ。

その苦痛を、苦しみをなかったことのように兄と会話する百合を遠目で見ている藍は、どんなに苦しいか。

そしてその当の本人である百合は、稀に真と話している最中に発作を起こし、それでも尚気丈に振舞う。

気付かれないように過ごした大抵のその後には、自室で悶え苦しんでいるのを藍は知っている。

だから今日も藍は笑って百合の傍に寄り添う、それが百合の望むことだから。

「そうですね、では早く体調を戻さないとですね。もうすぐ神代真が帰宅する時間ですから」

藍も始めの頃はその姿を見る度に動揺しては泣いていた、その度に百合に叱られていたのは今となっては彼女の良い思い出の一つ。

「あ、藍……」

「はい、何ですか？」

突如、何か思い出したように掌をこぶぼんと叩く。

先の一件のこともあり、藍の口調は会話の当初より穏やかで優しいものになっている。

「――裸エプロンって、兄さんは喜ぶかな？」

「ええええええッ！！」

どうして先程の流れからそっちに話がっ！？ 私は今日のどの一件よりもそちらの方が驚きなのですかッ！？」

「だって、この前街に言った時に雑誌に書いてあったのを見たんだもん」

発作の後の百合は、平常時の藍との会話よりも言葉のレベルが幾分下がる。

それは百合が普段、真と話している会話のレベルである。

藍はその会話が出来ることを嬉しく思う反面、こういった発作で苦しんだ後、というのが藍の心を負の感情に縛り付ける。

「か、神代真には裸エプロンはまだ早いと思います、そんな百合ま姿を見たら鼻血を噴出しかねません、寧ろ私が嘔きます、血の噴水の出来上がりですね！」

「藍が噴出してどうするのよ、バカ」

馬鹿な会話が始まりだして、百合の口調が体調と共にすっかり元通りに戻る。

「それではこうしましよ、メールで裸エプロンと、エプロンの中に何か着たものを、どちらがいいか問うのです」

百合はその話の要領を読めなく、首を傾げる。

その仕草に藍は心打たれるのを感じるが、そこはぐっところえる、また氷付けにされては適わない。

「まず神代真は裸エプロンを選びません、ですからもう一つの選択肢として妥協案みたいなものを提示しておくのです。

するとどうしてか、神代真はもう一つの選択肢を選ばざるを得ないのです」

「じゃあ、もう一つは何にする？」

「そうですねー……制服エプロンも捨て難いですけど、まだ制服は届いてないですし。」

やはりここは王道？にワイシャツエプロンでいきましょう、そうしましょう！」

「貴女、また私を着せ替え人形にするつもりでしょう？」

目を三泊にしてジト目で見る百合に、藍はそんな目で見つめないでと思っていた。

藍は、百合限定のエムである。

「それもあります、やはり百合が着れば神代真も心をケダモノにして襲いかかること間違いなし、ですよ」

「えっ……」

その光景を想像したのか、花をも恥らう乙女に早変わりした百合。かくして真に送られるメールの内容はそうにして決定していたのであった。

二話 チームthe変（後書き）

新年明けましておめでとございます！

拙い文章力ではありますが、頑張つて続けていきたいと思ひますので、今年も宜しくお願いいたします。

そして今回は少しばかりですが、真の魔法に対しての考えを出しました、少しでも「ああ、確かに」と思つて頂ければと思つております。

ある休日の兄妹（前書き）

今回はいつもに比べて遅くなってしまっすみません。

実は五千字ぐらいまで書いたのに、内容に納得出来ずにもう一度書き直したのです。

という事で始まります。

ある休日の兄妹

概念とは、物事の総括的、概括的な意味のこと。

ある事柄に対して共通事項を包括し、抽象、普遍化してとらえた意味内容で、普通、思考活動の基盤となる基本的な形態として頭の中でとらえたもの。

概念はまず、個人と個人の意識の共有が成って初めて概念となる。個人一人が知っているものを、概念とは呼ばない。

概念と空想、それは人々の意識の中で薄皮一枚で隔てられた壁のようなもの。

そして概念と空想を大きく分ける要因となるのは、人々の意識の層。

厚ければ厚いほど、それは確固たる存在として確立する。

その概念を言葉で表現されたものを名辞と呼び、言語の構成要素として、それを組み合わせ、述べ表し、判断、認識可能なものとして現実世界をとらえて表現する。

人間はほぼこのような概念化した名辞によって、この世の中のあることを理解したり、表現したりしている。

また概念は、それを提議・提唱する者の心性、視点、立場、精神的なポジション・在り方を反映する。

そして、魔法とは概念と空想の狭間にある抽象的だが普遍的な事柄の事象である。

それは何気ない日常の一欠けら、真は何気ない休日で何気なく過ぎ去っていた。

本来、真の朝はジョギングから始まる。

駅伝選手も真っ青なスピードを息も切らずに走り続けるその姿は異様なのだが、今日に限って言えばその限りではない。

真は、人気のない森の中にいた。

森と言っても学校の敷地内の範囲で、今日は土曜日だから学校は休日。

合同演習の森もここでやるらしいのだが、真がいるのはその入り口付近で、それ以上は立ち入り禁止区域と今はなっている。

それでは何故、真がその場にいるのかというのは単純に忍び込んだからというだけだ。

その場で軽く、屈伸や伸脚等の準備運動と柔軟体操を始める。

準備体操や柔軟体操は人体において有益な行動の一つだ、体の血液の循環、体の細部の軋みや痛み等を詳細に教えてくれる。

(肩から腕、胸、腹、内臓良し、足は……)

そこから跳躍して有に二メートルは超える大ジャンプをして、
「体は至って良好、もう少しいけるか……?」

呟いてすぐに再度跳躍、今度は宙返りまでしてみせて軽やかに着地、その際の着地音はほぼ無音に等しい。

「ふむ、ではまず準備運動その二からか」

次いで真は走り出すと、木と木との幹を渡り歩くように飛んでいく。

それは世間で言う、三角飛びというものなのだが、真はやっていくのは無限飛びと言ってもいいものだろう。

たまた木の枝から枝へ、まるで猿のように渡っていく。

たまた折れそうな木の枝や、か細い枝まで様々なものを渡っていくが、依然として枝が折れる気配はない。

そして木の幹を蹴って、宙返りしながら着地する。

「体も大体温まったな……」

心臓の鼓動が普段よりも二割り増し程早くなっているのを感じ、程良く体のエンジンがかかっているのを理解した。

「すまん……」

次に真がとつた行動は、木を殴ることだった。

大地が震え、木が一瞬ブレる。

次の瞬間には無数の木の葉が舞い落ちるが、真はそれを先程の木渡りの要領で回収していく。

大体のものは地面より十センチ程上の辺りで取られ、木の周り三百六十度の範囲に落ちる木の葉は全て回収されていく。

(今日は三百二十七枚か……)

日々によつて木から落ちる木の葉は違ってくる、それ故に全てを回収しなければ多いのか少ないのか判断の出来ないところもまた、木の葉回収の面白みではある。

常人では、出来ないが。

真は木の葉をなるべく見分けのつかないようにばら撒き、木に向かって礼をする。

木渡りは、真の得意とする歩法の一つだ。

通常、山の中を歩く際は当然地面を歩くのだが、山の地面は街の歩道と違って土で出来ている、雨が降ればぬかるむし、いつも通りの場合でも整備された歩道よりは体力を奪われる。

そこで、木渡りという歩法を編み出したのが真。

雨の日でも木ならばザラついた感触は変わらないし、ほぼ一定した硬さだ。

加えてアスレチックな気分も味わえるという正に一石二鳥な歩法である。

だが、この歩法には一つ懸念があった。

(誰にも見せられないんだよな、これは)

常人では在り得ない行動、魔法の力で重力制御するのならば可能かもしれないが、真はそれをなしでやってのける、それが問題だ。

故に誰も居ない森の中で一人、こっそりと感覚を忘れないように練習している。

「……百合も連れて来るべきだったか」

先程の誰にも見せられない、というのには少々訂正が必要だろう。誰にも、ではなく百合以外にはと変えたほうがいいかもしれない。本日も朝から軽めの朝食を用意してくれた百合は、真が外出することに明らかな不満を見せていたが、何やら体調が芳しくないように見えたので休ませたのだ。

それでも、百合の退屈凌ぎぐらいにはなったか、と思わないでもなかった。

それは兎も角として、真は更なる試練を己に課していく。

（今からやること百合にはあまり見せられないからな、連れて来なくて正解か）

常人では理解しきれない、常識を超えた苦痛を通り越して絶望すら感じる程の、辛い訓練を。

同時刻、神代家では例の如く二人の少女が密談？をしていた。

リビングにあるテーブルの上にはコップが二つ、どちらも麦茶が入っている。

「兄さん、休日ぐらいは私と遊んでくれてもいいのに……」

件の少女、神代百合はその瑞々しい桜色の唇を尖がらせて、愚痴を零していた。

真の朝食を作り、自らは寝間着からいつも通りの色気も飾り気もない白単色のワンピースに着替えている。

確かに昨日の今日で、あまり体調が良くないのはあったのだが、それを真に気付かれるのは嬉しいやら、残念やらという気持ちだった。

「まあまあ、神代真にも日課がありますから」

その不満たらたならな様子に、鬼島藍は仮面を外しながら答える。

百合の愚痴はもつともだが、人にはそれぞれ日常がある、それを

拘束しようというのは些か自分勝手だ。

それでも、一緒に居たいというのもまた、乙女の偽らざる心なのだが。

その乙女は、突如として会話の声のトーンを上げた。

「そうよ、代わりならここにいないじゃない」

それは、藍にとって死刑宣告そのものなのだが、それを理解する前に藍は脱兎の如く逃げ出していた。

その速さたるや、自動車の乗ってる人たちも圧巻するだろう速さ。だが結局のところ、例の如く氷付けにされていた。

百合は宙に浮かぶ氷付けの藍を連れてどことも知れない更地の場所へと来ていた。

そこで百合は氷付けの藍を降ろし、指を鳴らして藍を開放する。

「起きなさい、藍」

自分で時を止めさせておいてそれはないだろう、というツッコミを入れる者はだれ一人としておらず、氷から開放された藍は自らの逃走劇が儚くも夢に散っていったと理解した。

そもそも、百合から逃げたそうというのが土台無茶な話、というのが藍の持論。

周囲の時間そのものを止められれば藍は逃げる場所を失くし、瞬間的に捕まえられるのは必然。

藍は己の脚力には絶対の自身がある。

それは常人ならざるものであるということも自身が理解しているし、それを百合も認めてくれている。

新幹線よりも速い、というのに未だ逃げ遂せることは叶っていない。

しかし、それこそが藍が百合の従者たる所以だということも理解している。

「うう、やっぱり魔力補助なしで逃げるのは無理ですー……」

藍のこの台詞は世界の魔法使いには聞かせられない、誰が補助なしで新幹線と肩を並べる少女の存在を認められようか。

「魔力なんて使ったら私にバレるからね、早く私の認識外速度まで達して欲しいものだわ」

やれやれ、と落胆の表情を露にする百合。

考えてもみると、百合の言っていることもおかしい話だというのはすぐに分かる。

人が動くものを視界に入れる時、近いものと遠いものでは近いものの方がすぐの視界より消えてしまうというのは子供でも分かる常識だ。

故に、人の視界では近いものは早く、遠いものほど遅く感じる。

その近いものの中で、人間程の小さな物体が新幹線の速度以上の速さで瞬間的に走っているというのに、鬼島藍は百合より逃げることの出来た日は一度としてない。

寧ろ、捕まえられのが日課だ。

一体どうしたら百合から逃げられるのか、と藍は考えた。

まず音速の六から七割より遅い亜音速——俗に言うマッハ、それから音速、そして光速。

その間の隔たりは確かにあるが、それらを区分するのならばそれらの言葉が妥当かもしれない。

それらに達した時にはもう人間ではなくなっているかもしれない、思いながらも百合から逃げるのならばそれぐらい必要だと感じずにはいられない。

「……………はふー」

「やがて灰となる不毛の大地」

藍がそんなことは無理、と心の中で溜め息をつくのと、実際に溜め息をついたのは同時。

それを快く思わなかったらしい百合は、間髪を入れずに魔法を使用する。

「へっ……いい、嫌あああああああ！？」

本日最速の走りを見せる藍であるが、それを追う紅の炎。

「ほらほら、逃げ続けなきゃ”心まで燃やし尽くす”よ？」

絶叫マシーンすら阿鼻叫喚しながら逃げ出していくような最恐の魔法に、藍は涙を拭くのも忘れて逃げ続ける。

炎はまるでプロミネンスのように地面から飛び出てきたり、球体となって剛速球で飛んでくる。

そのどれもが、人間に触ればひとたまりもない熱量を帯びているのは決して気のせいではない。

藍は、今は魔力補助の効果で音速に近い速度で走っている。

その突破力でもって炎の熱さを感じないようにしているのだが、それも永遠という訳にもいかない。

やがて、魔力は底を尽きる、それは体力が限界という意味でもある。

それはもはや死の宣告で、

「よく逃げてるわね……じゃあラストスパート、いくよ」

容赦のない炎が地面全体に広がりだした。

追い続けて逃げられるのならば、逃げる場所を失くしてしまえばいい、ただそれだけのこと。

それだけのことを、百合”だけ”しか出来ないのだが。

「ひいつ!？」

実のところ、藍はこの炎を少しだけ触れたことがある。

百合が試しにとライターの火ぐらいのものに、手を触れさせたのだ。

その時、何が起きたかというと、

「もうあんな痛いのは嫌ですうううううう!」

精神を磨り減らすぐらいの痛みを与えるといたものだった。

外傷的な要因は何一つない、ただ精神的に苦痛を味わうだけ。

痛覚など関係なく、感情を殺す痛みは精神を通してダメージを与える。

勿論、藍は触れた一秒後には気絶していた。
だから藍は無我夢中になって飛ぶ、空中を蹴って、蹴って、蹴り続ける。

「嫌ああああああああー！？」
大絶叫の喚き散らしながら。

「お疲れ様、藍」

「……………はい」

今、藍は大の字になって地面に転がっている。
大きく実った胸は息を大きく吸い、吐く度にその形を変形させている。

あれ程広範囲に燃え広がった火は、今はその形跡もなく、元通りの更地となっている。

火の手から長時間逃げ切った藍の額には数時間全力で走りこんだような汗が、びっしりとついている。

服も汗だらけで、薄っすらと透けて見えるのは気のせいではないだろう。

だから百合は言う。

「藍、こっちへ来なさい」

手招きをして、どこから取り出したのか毛布の上に正座していた。藍はその手招きに吸い寄せられるようにふらふらと覚束ない足取りで歩いていく。

百合の下へ辿り着くと、風が彼女の体を浮かせ、頭を百合の太ももの上へと運んでいった。

その状態を言葉で表すのなら、膝枕だ。

「服、汚れますよ…………？」

これは、いつもの問答だった。

疲れて倒れた藍を、優しく介抱する百合。

先程の鬼のような厳しさと、今の聖女のような慈悲、両方の顔を同時に持つ百合の、両方の顔をしっかりと認識しているのは藍だけだと、彼女は自負している。

兄である真に見せるのは、彼女の素。

鬼のような厳しさは百合の愛情や優しさからきているもの、だから彼女はこうして藍を介抱し、甘えさせている。

そう藍は、百合のことを認識している。

百合が藍に厳しい態度をとるのは、それが藍の為になるからで、上から目線で語るのそれが藍が欲する立ち位置として最も適した形だから。

その百合はいつもの問答に、いつもの調子で答える。

「どうせすぐに洗うわ」

にっこりとは笑わないものの、どこか微笑んでいるような、藍でしか気付かない微笑を浮かべながら、これまたどこから取り出したのかハンカチで藍の汗を拭っていく。

それが、とても心地良くて。

百合の匂い、百合の力、百合の何から何まで、それは疲弊していた心を隅々まで癒していく。

「……それにしても、”概念魔法”は酷いですよ」

だから藍は、別に恨んでもいないが言ってみることにした。

「そう、別にいいじゃない、あれくらい」

愛が何とも思っていないこともまた、理解している百合はそのまま流す。

「あれくらいで済ませられるのは、恐らく私達だけでしょうね」

「そう、あんな魔法で襲われるのは貴女だけよ、感謝しなさい」

「感謝って……」いつか訪れる眠りの時”とどっこいどっこいの最強魔法の一つじゃないですか」

時いつか訪れる眠りの時すら止める氷と、心を焼き尽くす炎《やがて灰となる不毛の大地》。

概念魔法とは、そういった現代の魔法とはかけ離れたところにあ

る魔法。

「あんなもの、最強であつても最高ではないわ。

それに私の魔法はそんなものじゃないわよ」

現代魔法では到底再現の不可能な離れ業魔法を放てるのに、それをあんなものと切つて捨てる百合に、苦笑する他なかった。

「そうでした……百合の魔法はあんなものではないですもの」

藍の言った通り、百合の使う魔法はあのような最強の魔法では決してない。

そう断言出来る程に、尊く素晴らしいものであるから。

「――あれ、いつの間に……」

そうして思い返す、藍は百合の膝枕で寝ていて、そのまま疲れのせいで眠りについてしまったのだということ。

ふと顔を見上げてみればそこには、愛くるしい寝顔を晒している百合の顔が間近にあつて。

近くで見ると、その美貌はやはり人間離れをしているように見えて。

整えようとしていない睫毛は何故か上を向いていて、その上にある眉毛は丁度いい位置に配置してある。

髪の毛は穢れを知らない純白の絹の様、それでいて良いスタイルを維持しているのだから、その形容を言葉で表すのは筆舌に尽くし難い程だ。

ここまで美貌を手に入れる為の並々ならぬ努力を、藍は知っている。

藍にその手の情報を集めさせているのは百合だが、それを実践するのは百合本人であるのだから。

不意に、百合の目が薄っすらと開いていく。

「んっ……ああ、寝ていたのね」

浅い眠りだからか、まだ寝たりない様子で覚醒した様子。

「おはようございます、お陰様で良い夢を見られた様です」

人間が胸竜也の合間に見る夢など、起きてしまえばすぐに忘れてしまう。

しかし、良い夢か悪い夢かは起きた時の気分で良く分かるだろう。藍の気分は、絶好調である。

「おはよう、それは良かったわね……とりあえず、足が痺れているからどいてくれる？」

「あつ……すみません」

藍が慌てて体を起こし、百合と向き合う。

百合は足が痺れているだろうに、それを表情には決して出さない。

「別に謝らなくてもいいわ。」

……続きはまた後でにして、私は貴女に聞きたいことがあるわ」

「はい」

通常、百合は藍には質問したりはしない。

必要なことがあるならば藍から語ることが多く、また百合が質問するのは真に関してばかりだから。

「事前に学校の事は聞いていたけど……藍は一つ程、学校のことについて私に言い忘れていたことがあるじゃない？」

百合の目の奥底がキラリと輝く。

何故そんなことを聞くのか、それはいいとして藍はその言い忘れていたということについて考える。

学校のこと二人が引越してくる前から少しずつ報告をしている。

内部調査や校風等、大体のものは百合は切って捨てていたが、藍が語ることはもうあまり少ない。

その少ないだろう事柄から取捨選択し、より優先度の高いものを選出する。

「魔法のこと、ですか？」

やがて捻り出せた答えは不透明なもので。

「五十点」

百合は更に促す為に言う。

「魔法陣のこと、ですよね」

「百点……それに付け加えてると？」

「そういえば、言ってなかったかも、です」

百合は、何を、とは聞かない。

それは藍自身の口から言うべきことであり、それが彼女に課せられた義務なのだから。

「百合は魔法陣、描けますよね？」

そう、人魔学校一否、世界全体の魔法使いでの”普通”は魔法陣を描き、その効果でもって魔法を発動するというもの。

百合のように魔法陣を使わない魔法は、一般として今までに認知されたことはない。

その事実を知ってか、それとも知らないのか、

「氷付けになりたいなら言ってくればいいのに」

そう呟いた。

「わ、分かってますよ、勿論！」

ただ一々魔法陣を描いてから、というのは百合はあまりしませんよね？

だから百合にとってそれは退屈になってしまうのではないかと

「そんな退屈な場所に、私に来いと？」

「うう……すみません」

百合は魔法陣をあまり使うことがない。

というのは、魔法を瞬発的に発動の出来る百合にとっては質面倒くさいこの上ない。

例えて言うならば、パソコンによって既に組み立てられているプログラムを一からまた作り直すといったところだろうか。

「冗談よ、別に怒ってないわ」

「本当……ですか？」

「その分の埋め合わせはしてもらうけどね」

そう言って笑う百合の顔には、虚の色は一切なく、ただ屈託のない笑みを浮かべているだけ。

「はっ……はい！」

久しぶりに見たその笑顔に、藍はただ嬉しさが込み上げる。

藍にとって百合の賛辞と笑顔は万人の賛歌よりも心を癒し、昂ぶらせるものであった。

「それで、私には魔法陣なしで生活しろというのね」

「はい、お願い致します」

あくまでお願いする立場として、藍は礼をする。

元々のところ、年齢差などあってないようなものだが。

「別に気にしないわ、どうせ子供の遊びでしょう」

全校生徒が必死になりながらも勉強している魔法陣を子供の遊びだと言った百合に、生徒達が頑張っている姿を見ている藍はただ笑う他なかった。

「——ごほっ」

深く木々が生い茂る森の中、その一箇所では、地面に赤い雫が一滴、また一滴と垂れる。

点々と続く赤い跡、それは水よりも濃い液体で、全ての生命の証でもある。

「……損傷箇所、把握」

森の中でひっそりと座り込んでいる真は、そう呟いた。

（頭部問題なし、胴体、左胸筋裂傷を確認、左腕と右腕は共に三箇所
の裂傷、左腕に二箇所、右腕に三箇所、内出血はなし…

… 治癒、開始）

少年が心の中で言う。

すると真の体で、自らが怪我と認定した部分は徐々に回復の色を見せ始めている。

裂傷の部分は赤い血を垂らしておきながらも、まるで何事もなかったかのように回復していく。

打ち身はまだ時間も然程経っていないので分からないが、外見から見える部分の箇所では赤みが引いていく。

（続いて腹部、二箇所の裂傷、腰から太もも、膝までなし、ももの一箇所も列しよう、右足首の骨折を確認……治療開始）

今度は腹部から始まり、右足首以外の箇所を直していく。

最後に右足首だけなのだが、そこだけは他の箇所とは違い、直るスピードが違う。

「っ……」

突然、真の体に鈍い痛みが広がる、痛み自体は大したことはないのだが、地味過ぎる痛み程嫌なものはない。

それから続いて内部の損傷を修復していき、最後には念には念を入れて最終チェックをする。

「自然治癒完了」

体が元の万全の状態に戻り、深呼吸をしてみます呼吸のリズムを整える。

「……よし」

真が行った地獄の訓練、それは自らの体を極限にまで傷みつけること。

今回は森の中でも高く枝の少ない木から何度も落ちること。

その行いのルールは地面に激突する際には決して受身を取ってはいけないという過酷極まりないルール。

そうして身体の破壊と再生を何度も繰り返す、自らの生命としての”生きる”力を底上げしていく。

死にたくない、治れ、そう何度も自分に言い聞かせて、自らの体に生きるという選択肢の中でも最も生に近いものを選ばせる。

と簡単に言ったものの、それは人間として、ましてやただか高校生として出来ることではないが。

人間には驚くべき機能が備わっているのを真は知っている。

それは、環境適応能力。

他の生物も勿論有しているが、人間のそれは並大抵のものではな

い。

まず頭脳が違う、生物が環境が変わったのを感じるのは体の次に本能だが人間はまず視覚から環境の情報を得ることが出来る。

だがそれだけではただのどこにでもいるホームレスや、登山家などとは変わらない。

真と彼ら、どこが違うのかと言えば、それは危機感が違う。

死ぬかもしれないという恐怖、危機的瀕死の状況、様々な要因が重なり合うことで生まれる。

”生きる為の極限の環境”というものを自分自身に作り出すことが出来る。

そしてもう一つ、人間には自分が欲しいと思った分だけの力を手に入れることが出来る。

スポーツ選手ならば、それに合ったスポーツに必要な筋力など。

だがそれは、メダルや賞といったところまでしか想像が出来ていない、それ以上を知らないからだ。

そこで真とスポーツ選手との境目が生まれる、生きる為に最高の肉体を求める真と、メダルが欲しいだけのスポーツ選手。

体が求める強さが違うのだ。

そうした危機的状況を自らに、稀に作ることで肉体は更なる進化を遂げていく。

更には魔力補助——即ち生命力補助による治癒能力の強化（と言ってもあくまで少し程度）も含めて、真の体はあまり普通とは言い切れないかもしれない。

だがそれが、真の体が強靱な理由であった。

もし自分が過去の人間で、世が世ならば仙人とでも呼ばれていたかもしれないな、と一人思っていた。

「……何度やっても慣れないな」

首を鳴らしながら、真は近くにあった座り易そうな木の枝の上で一人ごちる。

痛みというのは人の精神を擦り減らすものだ。

人間が本能的に嫌がるものが肉体的な痛み、理性的に嫌がるのが精神的な痛みだ。

その肉体的な痛みの極みを、真は自ら率先しているのだからエムと言われようと文句は言えない（肯定するつもりもない）。

それに多数の人間の習慣となりつつある、手の関節の鳴らし。

あれも子供の頃は相当な痛みを伴っていたが、暫くすると痛みも大してなくなり、寧ろ鳴らした方が手の感覚がすっきりしていることに気付くのだ。

つまり、何が言いたいのか言くと、それが日常的なものになれば痛みも半減、という訳である。

そこで真の言った台詞に戻ると、慣れないというのは真が鍛錬をするのは、月に何度かだけであるからだ。

あの鍛錬をそう何度もやっていては心の方が壊れてしまう。

実際に最初に何度かはもう二度とやらないと心に誓いたい程の葛藤に駆られたものである。

それでも続けるのは、他ならぬ百合の為である。

否、それは恩押し付けがましい行為であり、本来の目的は自らの心的、肉体的向上ということにしている。

「我ながら何とも……」

それに続く言葉何なのか、自らに問い続ける日々。

もしそれに答えを見つけることが出来たのなら、自分という人間をより深く理解出来るだろうと考えている。

真は百合に、メールをして少しの間休むことにした。

消費した体力が元に戻るまで、真は木の上で一休みをし、時刻が夕方になるまで何もせずぼーっとしていた。

人は寝る時にも体力を使うというのは事実で、自然に意識が睡眠

へと移らない限り、人は寝る行為に体力を使う。

体力を回復する為に体力を使う、何とも意味の薄い話である。

故に、一番体力を使わない方法としてただぼーっとしているというのが正しい選択だ。

「今は……五時か」

今日はいつもより日が落ちるのが早い、まだ沈んではいないが日は橙色に染まっているのが見える。

真が森へ来たのは正午直後、昼飯を摂ってから来たから鍛錬に二時間と少し、それ以降を休憩に回したということになる。

携帯に着信はない、百合は多くの場合として寝ているだろう。

「そろそろ、買い物に行くか……」

恐らくはもう買いだめしている分の食材は少ないはずだ、麻に冷蔵庫を覗いた時も大体のものが少なくなっている。

百合も今日は外出しない様子であったし、真が買い物しても怒られることはないだろう。

それに百合は数日分の食材を買うことがあっても、それを腐らせるようなことはしないし、日持ちするようなものを数種類と、安くなっている早めに食べなければならぬものを買分けしている。

故に、たまたま百合が買い物に行っていたとしても百合は真の買ってきた食材を少し後の日にずらすだけで済まず。

真は、自分の好きなものと、百合の好物を買っ帰ろうということ、帰路につく。

真と百合の休みの日の一日目は、こうして幕を閉じていった。

ある休日の兄妹（後書き）

次回からは出来るだけ書き溜めしてから、早めにお送り出来るといいなと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3144z/>

Deus Ex Machina

2012年1月10日07時54分発行